

アーク・ファイブ・デイズ

YASUT

遊戯王A R C・Vと遊戯王5D・sのクロス。「もしもシンクロ次元Ⅱ5D・s本編後
だったら」な話。

2015・09・14・誠に勝手な話ですが、この小説は本編8話+おまけ1話で完結
とさせて頂きます。

書きたい話は書き終えた！

2016・02・08・思ったらやっぱり続いた！ 揺れるマママインド！

2016・05・18・第二章完結。今のところ続きを書く予定はないため、これにて
一応の完結とさせていただきます。

お楽しみは、これからだ！（俺達の戦いはこれからだー的な意味で）

目次

シンクロ次元編

アーク・ファイブ・デイズ

ライディングデュエル。それはスピードの中で進化した決闘。

そこに命を懸ける伝説の痣を持つ者たちを、人々はファイブデイズと呼んだ。



時間帯は正午。不動遊星はガレージで一人、物思いに耽っていた。

手にはフレームに入れられた一枚の写真。トロフィーを掲げた彼を中心に、仲間達が思い思いにシャンパンの蓋を開け、祝杯をあげている。

チーム“SD”ファイブデイズ。

そう称されたのも今となっては昔の話。仲間達は皆自分の道を選び、それぞれの未来へと走り続けている。

「邪魔するぜー、遊星」

背後からの声に遊星は振り返る。

ワイシャツを着た眉の太い大男。肩に担いだ制服のデザインから、ネオ童実野シテイの治安を守る“セキュリティ”であることが伺える。

「牛尾か。どうしたんだ、こんな時間に」

「お前こそ何やってんだ。貴重な休憩時間だぞ、十六夜と連絡取らなくていいのか？」

「アキと……？」

……いや、特に知らせることもないが」

「——……はあ」

数秒の沈黙、そして溜息。

5D'sの面々と付き合いの長い牛尾は、不動遊星と十六夜アキの関係にも気づいている。

恋人ではない。だが、ただの友人でもない。どちらかが踏み出せば劇的に変わってしまう微妙な関係。

——それも、今年で二年になる。

始めこそ生暖かく見守っていたが、この二年間一切変化なしというのは、セキューリティトップの彼でも不安なのだ。

……もつとも。この不動遊星という男が、牛尾の前でそんな簡単にボロを出すはずがないのだが。

「いや、まあいいんだけどよ。で、結局何してたんだ？」

「ああ……ちよつと、昔を思い出していた」

遊星は手元に視線を戻す。

巨大な金のトロフィーと、記念の写真。

そして、今は無き好敵手^{とも}の形見。

「WRGPとアーククレイドル。あれからもう二年になるんだな」

「そうだな。これでようやく、お前も大人の仲間入りってわけだ」

「よく言う。初めて会った時から子供扱いしてくれなかっただろう」

「目の前であんだだけの決闘^{デュエル}を見せられちゃ、子供扱いする方が失礼ってもんだ」

「どうだろうな……スタンディングの方はアキと定期的にやってるが、ライディン

グは最近作ってばかりだからな。セキュリティとして毎日走っている牛尾の方が上なんじゃないか？」

「ん？ 作ってばかりってのはどういうことだ？」

「ああ。モータメント開発の息抜きで、よくDホイールを弄ってるんだ。安全性を重視してみたり、可能な限り低コストにしてみたり、最大速度を上げてみたり、な」
Dホイールとは、ライディングデュエル専用のデュエルディスクのことである。通常のデュエルとは異なり、プレイヤーはバイク型デュエルディスク——Dホイールに乗ってデュエルを行う。

転倒させる、周回遅れにするなど、相手のLPを0にする以外にも勝利条件が幾つかあり、カードプレイングが上手いだけでは勝てないのが魅力の一つだ。

ちなみにネオ童実野シティは、専用道路やコースが作られるほどライディングデュエルが盛んである。

つまりどういふことかと言うと——Dホイールは、滅茶苦茶売れる。

「ちゃっかりしてんなあ、お前」

「フツ……………ん？」

「どうした？」

『ここは、どこだァ——！！！！！！』

「……なんだ、今の」

「外が騒がしいな。ちょっと様子を見てくる」

「おう」

牛尾は遊星を見送る。

向かう先……ガレージの外の噴水広場には、騒がしい人影が四つ。

「——珍しいこともあるもんだ」



「ここは、どこだァ——！！！！！！」

時刻は正午。昼休みの社会人達がくつろいでいる中、噴水広場で怒号が響き渡った。

高価そうな黒のシャツと白い制服。

世界はオレが中心で回っていると言わんばかりの、俺様オーラ全開の金髪少年。沢渡シンゴ。見ての通りおぼっちゃま、そして金持ちだ。

「一々五月蠅い男だ。少しは静かにしたらどうなんだ」

「なんだと——！」

「やめろって二人共。ほら、周りの人達も見てるし……」

一人の少女が不愉快そうに突っぱね、一人の少年が宥める。

そんな彼らを、休憩中の社会人達は奇異の目で見つめている。

WRGP終了以降、この噴水広場はとても静かになった。二年前ならいざ知らず、今となってはこのような騒ぎも珍しいのだ。

「クソ、ようやくシンクロ次元に行けたと思ったらこのザマか。赤馬零児め、この俺を誰だと思ってやがる。普通はシンクロ次元のトップか、せめて柊柚子の目の前に飛ばすのがマナーってもんだろ」

「……兄様？」

赤馬零児。その名を聞いて一人が反応する。

帽子を目深にかぶり、その上から更に水色のフードを被った子供。

子供は少年——神遊矢の制服を引っ張り、尋ねる。

「ねえ、兄様はどこ？」

「零羅……えっと、ごめん。まだ分からないんだ。ここがどこかもまだ分かってないし。」

けど大丈夫だ。赤馬零児は俺と一緒に探してやる。だから——」

「私は反対だ」

そう言ったのは赤い服を着た少女、セレナ。

遊矢の幼馴染——柊柚子とそっくりな容姿をした、融合次元の決闘者だ。デュエリスト

「どうしてだよ。まずは皆と合流するのが先だろ？」

「いや、その必要はない。こうしてバラバラになったのはおそらくあの男の思惑通りのはず。」

我々ランサーズの目的は、このシンクロ次元で柊柚子を探すこと。そして、強い

デュエリスト
決闘者を探し、アカデミアの侵略に備え同盟を結ぶことだ」

「成程な。つまり、赤馬零児はシンクロ次元のトップと取引。俺達は手分けして決闘者を探せてわけか。あのヤローにこき使われるのはちょっと釈だが、確かに俺にはこっちの方が合っている。ま、適材適所ってやつだな」

「そういうことだ。早速だが私は柚子を探しに行く。お前達はここらで大人しくしている」

「えっ——？」

脇目も降らず、セレナは噴水広場を出ていこうとする。

セレナは以前、ここではない別次元で監禁にも似た生活を送っていた。

窮屈な暮らしをしていた彼女としては、早く行動したくて仕方ないのだろう。

尤も、チームという観点から見れば、彼女は自分勝手の一言に尽きるのだが。

「ちよっと、セレナ！」

「四人行動は効率が悪い。その子供が一緒なら尚更だ」

セレナは不満を隠さず零羅を一瞥した。

それに怯え、零羅は遊矢の後ろに隠れる。

「……フン」

「セレナ！」

遊矢の静止を聞かず、セレナは噴水広場を出て行った。

「まあ、確かに一理ある。そういうわけで、俺も行かせてもらうぜ」

「なっ……沢渡、お前まで！」

「一人にするわけには行かねーだろ。いいからこっちは任せとけ」

「あ……ああ」

そうして、沢渡もまた噴水広場を出て行った。



「——ということがありまして」

「成程なあ。よく分からんが、大変だなお前も」

時間は昼過ぎ。遊星と牛尾は二人を椅子に座らせて相談に乗っていた。

あまった廃材で作られた簡素なものだが、その丈夫さから作り手の腕は確かであ

ることがわかる。

零羅は用意された甘めのコーヒーを啜りつつ、物珍しそうにガレージ内を見回している。

「そういえば牛尾。もう時間は過ぎていますが、大丈夫なのか？」

「ぐっ……う、うるせえ、迷子搜索も仕事の内よ。っていうか、そういうお前はどうなんだ」

「抜かりはない。きちんと休暇をとっている」

「なにに!? ……ああいや、俺は今絶賛工作中だ。風間のヤローにも連絡つけないだし、多分大丈夫だろう」

「そうだな。俺もよかれと思って深影さんに連絡しておいた。あの人なら庇ってくれるだろう」

「んなっ!? 遊星、てめえ!」

「——フッ」

「確信犯じゃねーか!!」

「気にするな。それより遊矢」

「あっ、はい」

あからさまな塩対応に牛尾は落ち込むが、構わず遊星は遊矢に話しかける。

「さっきの話を聞く限り、寝床はまだ決まっていらないんだろう？ よければここを使ってくれ」

「え……いいんですか？」

「構わない。四人ならなんとかなる。それに、いくつか気になる話もあるからな」
先程の四人の会話には、遊星と牛尾にとって聞きなれない単語がいくつか出てきていた。

——シンクロ次元。

過去や未来に関係する敵とは何度も戦ってきた遊星だが、別次元に関しては初耳だ。

「おいおい遊星、まさか信じてるのか？ シンクロ次元だか何だか知らないが、所詮は子供の言うことだろ？」

「ダークシグナーやイリアステルといった前例があるんだ。聞いてみる価値はあるだろう」

「遊星さん……」

遊星もまた椅子に座り、遊矢と零羅に向き直る。

「詳しく話してくれないか。君達は何者なのか。そして、目的はなんなのかを」

「——はい」

遊矢もまた遊星を見つめ、自分達のことを真摯に話し始めた。

他次元を侵略する融合次元の決闘者デュエリストのこと。

彼らに滅ぼされたエクシーズ次元のこと。

そしていずれは残りのスタンダード次元、シンクロ次元にも侵略に来ることを。

次元を渡ってきた彼らの目的は三つ。

一つ目は融合次元に対抗するため、シンクロ次元と同盟を結ぶこと。

二つ目は強い決闘者デュエリストを探し、対融合次元精鋭部隊“ランサーズ”を強化すること。

そして三つ目は、この次元に迷い込んだであろう少女“柊柚子”を探し出すこ

と……だそうだ。

「俺は柚子を……柊柚子を探しに来たんだ。確かに強い決闘者デュエリストも探さなくちゃいけないけど……柚子を見つけないことには、俺はスタンダード次元には帰れない。

牛尾さんは警察なんですよ。何か連絡とかないんですか？」

「さあな。そもそも俺はハイウェイの取り締まりがメインだからな。迷子とかには詳しくねえんだよ」

「そうですか……じゃあ、遊星さんは何か知りませんか？」

「俺は最近、外に出ること自体が少なくてな。すまない」

「……いえ、謝らないでください。こんなに広い住まいまで貸してもらってるんですから」

「気にするな。俺も五月蠅いのは慣れている。いや、寧ろ騒がしいくらいがちょうどいいくらいだ」

「慣れている？——……あ」

遊矢はガレージの奥、大切に仕舞われている大きなトロフィーを見つけた。側には一枚の写真立てと、ボロボロに壊れた赤いサングラス。

「……仲間、ですか？」

「そうだな。皆、俺の大切な仲間だ」

「……………」

写真を見つめ、遊矢は自問自答する。

大切な仲間ならいる。探しに来た“柊柚子”もその一人だし、他にも沢山いる。だが、今のランサーズの面々はどうか。果たして彼らを仲間と言えるのか。あの写真に映る彼らのように、ふざけあうことができるのか。

——無理だろう。

ランサーズとは赤馬零児が率いる決闘戦士^{デュエル}のチーム。

その選抜基準は“強いこと”。ただそれだけだ。それ以外の共通点など皆無に等しい。

隣で大人しくしている零羅だって、彼自身、赤馬零児の弟であること以外は何も知らないのだ。

「……このままじゃ、駄目なのかな」

写真を見れば見るほど遊矢はそう考える。

確かにランサーズは強いかもしれない。今は無理だとしても、いずれは融合次元に勝つことができるかもしれない。

けれど最後の最後に、あの写真に映る彼らのように、皆で笑い合うことができる

のだろうか——と。

「まあ、なんだ。人探しの件はセキュリティの奴らに任せるとして……強い奴らなら、こっちにゃ山程心当たりがあるぜ？　なあ遊星」

「……どういう意味だ、牛尾」

「こういう意味だよ——そら！」

「！」

どこから用意したのか、牛尾はデュエルディスクを遊星に放り投げた。

ぞんざいに扱う牛尾を軽く睨みつつ、遊星はディスクをキャッチする。

「融合次元だのシンクロ次元だのは正直信じられねーが、こいつらが何か問題抱えてるのは明白だ。だったら、力になってやるのがおまわりさんってもんだ」

「だからって何故デュエルディスクを……遊矢とデュエルしろ、とでも言うつもりか」

「おうよ。デュエリストの性格を知るなら、言葉よりもこっちの方が断然早え。プレイングや使うカードで、そいつがどんなヤツか大体分かるからな。それに、リハビリにはもってこいだと思っとな」

「リハビリ？」

「ああ。遊星、ここにテレビあるか？」

「テレビならそこだ。だが、何を見るつもりだ？」

「ちょっとしたDVDよ……あった、こいつだ」

牛尾はバッグの中から、ケースに入った円盤状のディスクを取り出した。白を基調とした華美なパッケージ。

「それは……まさか、ジャックのDVDか？」

「ああ、それも最新のな。」

おい遊矢、それと零羅だったか。お前ら確か強い決闘者デュエリストも探してんだろ？
だっ
たら見というて損はないぜ」

「あ、はい。……零羅、行こう」

零羅は小さく頷き、遊矢の後ろについていく。

牛尾は再生プレーヤーにディスクを入れ、リモコンでテレビを操作する。

画面が点灯し、すぐにデカデカとタイトルが表示された。

タイトルは——
“キング王への道”ロード。

「あ……この人、もしかして遊星さん？」

「ああ。名前はジャック・アトラス。世界を舞台に活躍してるDホイラーだ」

「D……ホイール？」

「ちよいと飛ばすぜ」

牛尾は早送りのボタンを押した瞬間、画面がめまぐるしく動き回る。

内容は、ざっくり言えばジャック・アトラスのデュエル総集編だ。

ネオ童実野シティのキングだった男が世界へ飛び出し、多くの好敵手と戦い競い合うというありきたりな構成のもの。

ところどころインタビュやドラマも入れられており、完全にジャックファン向けの内容となっている。

——が、遊矢と零羅にとってはそうもいかない。

ありきたり。それはあくまで遊星と牛尾にとってでしかない。

零羅は目を丸くしてDホイールを駆るジャックを見つめ、遊矢は浮かんだ疑問を素直にぶつけた。

「遊星さん。これはアクションレースか何かですか？」

「似たようなものだな」

「そうですか……いえ、でも、時々カードが映ってるような……」

「デュエルだからな」

「え？ デュエルって、バイクに乗って？」

「ああ。ライディングデュエル。もしかして知らないのか？」

「はい。今、初めて見ました」

「……そうか」

遊星は確信する。この二人は間違いなく別世界の人間であると。

ネオ童実野シティに住んでいてライディングデュエルを知らない、なんてことは絶対にありえない。

専用道路やコースがいくつもあり、毎日セキュリティやプロが練習のために走っているからだ。

ライディングデュエルが認知されていないほどの田舎から来た、という考えが一瞬過ぎたが、こうして世界大会が開かれている上、その単語すら知らないのはおかしい。

「詳しくは後で教えよう。とりあえず今は、スタンディング……通常のデュエルの進化系とも思ってくれればいい」

「はい」

「おい、そろそろだ。早送り止めるぞ」

牛尾が通常再生のボタンを押した瞬間、画面は高速移動を止め、通常で動き出す。

映っているのは二人の決闘者——否、Dホイーラー。デュエリスト

白く巨大なDホイール“ホイール・オブ・フォーチュン”を駆る“ジャック・アトラス”と、赤黒いDホイールを豪快に乗り回す“炎城ムクロ”のデュエルだった。



炎城ムクロ

LP .. 2400

ジャック・アトラス

LP .. 800

映像にする際に編集されたのか、画面の端に分かりやすくライフが表示された。
炎城ムクロの猛攻が終わり、次はジャックのターン。

「再生時間から予想すると、おそらくこれがラストターンだな」

「ラストターン？ でもこれ、ジャック・アトラスって人のDVDですよ？」

「そうだな。ジャックの残りライフは800。《スピード・ワールド2》には手札
に《SP》^{スピードスベル}がある場合、SPC^{スピードカウンター}を四つ取り除くことで800ポイントのダメー

ジを与える効果がある」

「じゃあ、もしかして負けるんですか？」

「さあ、どうかな」

「？」

遊矢の疑問も尤もだ。

炎城ムクロのフィールドには炎を纏い、四つ足で疾走する骸骨のようなモンスター——《スピード・キング☆スカル・フレイム》^{リバーズ}が一体、伏せカードが二枚。

《スピード・キング☆スカル・フレイム》

星10〔風属性〕アンデット族〔攻2600〕守2000

対しジャックのフィールドには、伏せカード^{リバース}が二枚のみ。モンスターは一体もない。

このフィールドを見て遊矢は、炎城ムクロの伏せカード^{リバース}が発動してジャックのライフが0になる、と予想した。

ジャックの状況は絶望的ではあるが、二枚の伏せカード^{リバース}次第では逆転も可能。だが、このターンで決着が着くならそれしかない。

『ハッ、どうよジャック・アトラス！ テメエとは長い付き合いだが、今度こそオレの勝ちだ！』

『フン！ 相変わらず口だけは達者だな！』

『強がりはやしな！ お前のライフは僅か800！ 次のターン、オレが《Sp》^{スピードスベル}をドロースればオレの勝ちよオ！』

『ならばこのターンでケリを着けるのみ！ ——オレのターン！』

ジャックはカードをドロース、SPCが一つ溜まる。

しかしカウンターの数は三つのみ。手札に《Sp》があつたとしても、《スピード・

ワールド2』の恩恵は得られない。

『——フッ』

『あん？』

『フフフフ………フハハハハ——！』

男は笑う。関係ないと言わんばかりに。

スピード・ワールドがあろうとなかろうと関係ない。

この男はいつだってその圧倒的パワーで、何もかもを根こそぎ薙ぎ払う。

『炎城ムクロ！ 以前オレはお前に言ったな！ キングのデュエルは、エンターテインメントでなければならないと！』

「!!」

エンターテインメント。聞き慣れ、そして言い慣れた言葉に遊矢は反応する。

『ああん!? それがどうした!』

『今からそれを見せてやる！ 行くぞ!』

ジャックは手札から、長い間愛用してきたドラゴンを選択する。

『相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在

しない時、《バイス・ドラゴン》は特殊召喚することができる！』

《バイス・ドラゴン》

星5《闇属性》ドラゴン族《攻2000》《守2400》

『ただし、この効果で特殊召喚した《バイス・ドラゴン》の攻撃力と守備力は半分になる』

攻2000 ↓ 攻1000

守2400 ↓ 守1200

『そしてチューナーモンスター、《ダーク・リゾネーター》を召喚！』

《ダーク・リゾネーター》

星3《闇属性》悪魔族《攻1300》《守300》

『オレはレベル5の《バイス・ドラゴン》に、レベル3の《ダーク・リゾネーター》をチューニング！』

王者の鼓動、今ここに列をなす！ 天地鳴動の力を見るがいい！

——シンクロ召喚！ 我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

星8〈閻属性〉ドラゴン族〈攻3000〉守2000

ガラ空きだったジャックのフィールドに紅蓮の竜が現れる。

デュエリスト

決闘者の頂点に君臨する絶対王者の風格が、そこにはあった。

「……これが、シンクロ次元のシンクロ召喚」

その在り方に、遊矢は息を飲んだ。

何もかもが違いすぎると本能が悟ったのだ。

D ホイールを乗りこなすパフォーマンズ。

王者の象徴とも言えるエースモンスター。

そして、場を盛り上げる魅せ方とテクニク。

遊矢が志すエンターテイメントとは別ベクトルではあるが、決闘者として圧倒的

デュエリスト

に格上であることは画面越し、録画越しでも理解した。

だが、炎城ムクロもまた一人のDホイラー。この程度に一々臆する男ではない。

トラップ

『流石は孤高のキング、ジャック・アトラス！ だが一手甘エ！』

罠カードオープン！ 《煉獄の落とし穴》！

こいつは攻撃力2000以上のモンスターが特殊召喚された時、その効果を無効にして破壊する！』

「そんな——!?」

炎城ムクロが発動した罠カードトラップにより、紅蓮の竜はたちまち爆散した。

これで再びジャックのフィールドはもぬけの殻。

エースによって逆転すると思った遊矢は驚きを隠せない。後ろに控えている零羅、映像を用意した張本人である牛尾ですら驚いている。

「……こいつはマジでヤベーんじゃないか？ どう思う、遊星」

「さて、どうだろうな。まあ、もう少し見れば分かるさ」

だが遊星だけは一人落ち着いていた。そして、それだけではない。

笑っているのだ。

好敵手ともの活き活きとした表情、全力で決闘デュエルする姿を見て、彼の決闘者デュエリストとしての本能が疼いているのだ。

ここに遊星の理解者——例えば十六夜アキでもいれば、ジャックに誰よりも魅せられているのは遊星自身だと指摘されていただろう。

『《レッド・デーモンズ・ドラゴン》撃破ア！ これで勝負は見えたぜ！』

『笑わせる！ 一手甘いのは貴様の方だ！』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が破壊されたことにより、この伏せ^{リバー}カードを
発動させる！

^{トランプ}

罠発動！ 《シャドー・インパルス》！ シンクロモンスターが破壊された

時、同じレベル・種族のシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚する

！』

『何イ——!?!』

破壊された《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が半透明で出現し、影から同種の
ドラゴンが現れる。

全身に傷を負い、角は一本折られた。

それでいてなお倒れぬ、誇り高き破壊竜——！

『混沌を制する次元の王者！ 天地鳴動の力をその身に刻め！』

——現れる、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》!!』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》

星8〈闇属性〉ドラゴン族〈攻3000〉守2500

『オレは更に貴様の二歩先を行く！』 《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカールイト》の効果発動！ このカードの攻撃力以下の特殊召喚されたモンスターを全て破壊し、一体につき500ポイントのダメージを与える！』

『チッ——させるかよ！』 永続罠発動、《ミニチュア・ライズ》！ モンスター一体の攻撃力を1000ポイント下げ、レベルを一つ下げる！ オレは《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカールイト》を選択！』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカールイト》

星8 ↓ 星7

攻3000 ↓ 攻2000

トラップ

罠の赤いエフェクトが傷だらけの竜を縮小させ、弱体化した。

「……《スピード・キング☆スカル・フレイム》の攻撃力は2600。これじゃあ、効果を発動しても破壊できない……！」

「ああ。だが、ジャックの場にはもう一枚の伏せカードがある」

リバーズ

『まだ終わらんぞ！』これが、三歩先に行くオレのデュエルだ！

トランプ
 暴発動、《スカーレット・カーペット》！

フィールドにドラゴン族シンクロモンスターが存在する時、墓地から《リゾネーター》モンスターを二体まで特殊召喚できる！

これにより《ダーク・リゾネーター》、《フォース・リゾネーター》を特殊召喚!!
 《ダーク・リゾネーター》

星3《闇属性》悪魔族《攻1300/守300

《フォース・リゾネーター》

星2《水属性》悪魔族《攻500/守500

『《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》はフィールド・墓地に存在する時、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》として扱う！ この意味が分かるか！』
 『チューナーモンスター二体に《レッド・デーモンズ・ドラゴン》……ってことは、まさか——』

『見せてやろう！ これがオレの荒ぶる魂——バーニング・ソウル！』
 「——っ!？」

ジャックの様子が豹変する。

その様子は——例えるなら、“紅蓮の悪魔”。

『レベル7となった《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》に、レベル3の《ダーク・リゾネーター》と、レベル2の《フォース・リゾネーター》を、ダブルチューニング!!』

「ダブルチューニング……!? 遊星さん、これは!？」

「ジャックのデュエルは初めてか。ならいい機会かもな。じっくり見ておくんだ、遊矢」

「——はい」

チューナーモンスター二体が炎の輪となり、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》がその輪をくぐり抜け、同調^{シンクロ}する。

チューナー二体が必要とする究極シンクロ召喚。その負担は無視できないほど大きい、その分召喚されるモンスターは圧倒的なパワーを誇る。

『王者と悪魔、今ここに交わる! 荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ!』

——シンクロ召喚! 出でよ、《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》!!』

《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》

星12／闇属性／ドラゴン族／攻3500／守3000

赤いアーマーで全身を覆った、新たな紅蓮の龍が爆誕した。

その威圧感と咆哮は観客を沸かせ、対戦相手を怯ませる。

『《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》は墓地のチューナー一体につき、攻撃力を500ポイントアップさせる。オレの墓地のチューナーは三体。よって攻撃力は、1500ポイントアップする！』

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》

攻3500 ↓ 攻5000

『攻撃力5000!』

『行け、《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》！ 《スピード・キング☆スカル・

フレイム》を攻撃！

——「バーニング・ソウル」!!』

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》は全身に煉獄を纏い突撃。その破壊力を前に成すすべもなく、ムクロのモンスターは粉碎した。

『ぐわああああ——!!!!!!!!?』

炎城ムクロ

LP .. 2400 ↓ LP .. 0

ムクロのライフは尽き、これにて試合終了。

勝者はジャック・アトラス。

王者を名乗るに相応しい圧倒的な力で勝利を勝ち取ったのであった。



「――すごかった」

遊矢の第一声はそれだった。

純粹な賛美。表も裏もないむき出しの感情。

「すげえよな、流石はジャック・アトラス。ちなみに、あと一週間だ」

「一週間？ 何がだ？」

「……はあ。遊星、ここまで言ってまだ分からねえか。来るんだよ、ジャック・アトラスが。この街にな」

「何っ？ いや、だがどうしてだ。ジャックはプロだ。早々この街に帰って来れるとは思えないが」

「テレビ、見てみな」

牛尾に顎で差され、三人はテレビを見る。

画面には“ジャック・アトラス”対“炎城ムクロ”を振り返り、二人が使用したカードの説明・解説が始まっている。

そして画面の一番下には“FRIENDSHIP CUP”^{フレンドシップカップ}開催”と、開催日まで添えて大きな文字で宣伝されていた。

「……そうか。そういうば、そんなイベントもあったな」

「ああ。全国からDホイラーが集うライディングデュエルの祭典。優勝者は賞金と共に、ジャック・アトラスと対戦する権利を得る。その予選があと一週間後、ネオ童実野シティ全域で開かれる。ま、俺は警備があるから出られねえけどな」

「しかし、一週間ならもう無理だろう。こういう大会は選手登録とか、色々と手続きがあるんじゃないのか？」

「いいや、要らないんだよなこれが。タイトルをよく見ろ。これは“フレンドシッ

プ”な大会だぜ？ D ホイールさえあれば誰でも参加できる」

「……俺に、出場しろと言いたいのか」

「無理強いはいしねえ。が、遊星よう。お前は今のデュエルを見て、何も感じなかったのか？」

「――」

遊星は黙る。

何も感じなかったと言えは嘘になるからだろう。

不動遊星は研究者だ。勝手に街を出ることは許されない。

それ自体に後悔はない。残ったからこそ得られたものも沢山ある。

だが時々――本当に時々だが、心が疼く。

街を出られない。しかしこの街で開かれる大会ならば、彼を縛り付けるものはない。もしかしこの街で開かれる大会ならば、彼を縛り付けるものはない。

ならば――ならば、自分も参加してみてもいいのではないか――と。

「遊星さん」

迷う遊星に遊矢は話しかける。

そして。

「俺と、デュエルをしてください」

唐突に。正面から真っ直ぐに、デュエルの申し込みを受けた。

「遊矢……?」

「俺はデュエルの可能性を信じています。デュエルは人を笑顔に出来る。ジャック・アトラスも、あの炎城ムクロって人も、全力で戦って全力で笑ってた。

遊星さん。貴方は最近、デュエルで笑ってますか?」

「……勿論だ。俺も時々、街に帰ってくるアキや龍亜と……仲間とデュエルしている」

「それは、仲間と一緒にだからじゃないですか? 話を聞く限り、遊星さんもかなりの決闘者とお見受けします。全力で戦って勝ったり負けたり……そんなデュエルを、最近はしてないんじゃないですか?」

「……………」

「だから、俺とデュエルしてください。生意気なことを言ってるのは分かっています。でも、俺は——デュエルで、皆を笑顔にしたい」

そう言って、遊矢は後ろの零羅を見た。

全力で俺とデュエルしろ。この少年はつまり、そう言っているのだ。

「——ハハ」

本人の言う通り……確かに生意気だ。

けれどそれは、目指すものがあるからこそ。背負うものがあるからこそだ。ならば、遊星に断る理由はない。

「そうだな。だがまだまだだ。君一人では、俺が本気を出すまでもない」

「むっ……そんなことない。俺だって——」

「だから、タッグデュエルにしよう」

「俺だって——え？」

タッグデュエル。そう聞いて遊矢は固まる。

「牛尾、手伝ってくれ」

「そう来ると思ってたぜ。任せろ」

「えっ、ちょっと待って。タッグなんて、そんないきなり——」

「ようやく俺様の出番のようだな！ 榊遊矢!!」

「えっ？」

声のする方向に四人が振り返る。

——ガレージの前で、天高く指を突きつける少年が、そこにはいた。

「沢渡!? って、ちょっと待て！ セレナはどうしたんだ？」

「ここにいる」

ガレージ入口……その隅っこから顔を出す。

どうやら、この意味もなく叫ぶ金髪少年とは他人のフリをしたかったらしい。

「しかし、何やら面白いことになってるな。タッグデュエルか。実戦に備えて練習しておくのもいいかもしれないな」

「全くもってその通り。そういうわけだ遊矢。この沢渡シンゴが特別にお前のパートナーぶぎゃっ——!？」

「うわ……」

セレナの顔面裏拳が炸裂。

……ものすごくいたそう。

そんな、小学生並こなみかんの感想が出た。

「お前はDVDを見ていなかったのか？ 先に言っておくが、お前程度ではワンターンキルされるのがオチだ」

「んなワケねーだろ！ てめえ、俺を誰だと思ってやがる！ 俺は沢渡シンゴ、舞網市市長の息子だぞ！」

「知らん。それより遊矢、さっさと準備しろ」

「無視してんじゃねーよ！

ッ——くそう、こうなったらデュエルで決着をつけてやる。それなら文句ねーだろ！」

「勝った方が遊矢とタッグを組むというわけか。……フン、面白い。瞬殺してくれ
る」

「こっちのセリフだ！ 行くぜ！」

「——決闘!!」
デュエル



「……俺は一体どうしたらいいんでしょうか」

「……とりあえず、コーヒーでも飲もうか」

魔界劇団と月光ムーンライトがOCG化しないと絶対続きが書けないようにした。

ちよつと無理矢理だったかもしれないけど、他にオチが思いつかなかった。

遊矢とセレナ エンタメ・タッグ・フォース！

セレナに ペン デュラム ユーゴ させたかっただけ。（ネタバ
レ）

注意…アニメオリジナルカードが何枚か登場します。

具体的には《月光^{ムーンライト}》シリーズ。

そして遊矢の《ペンデュラム・クライマックス》。

遊矢の方は「多分こんな感じの効果じゃないかなー」っていう予想。

《魔界劇団》は流石に情報少なすぎて無理なんで、沢渡さんには申し訳ないがワ
ンキルされてもらうZE！

「魔法カード、《融合^{マジック}》を発動。私が融合するのは《月光蒼^{ムーンライダール・キャット}猫^{ムーンライダール・バタフライ}》と、《月光紫^{ムーンライダール・バタフライ}蝶^{ムーンライダール・バタフライ}》
！

蒼き闇を徘徊する猫よ。紫の毒持つ蝶よ。月の引力により渦巻きて新たな力と生

まれ変わらん!

——融合召喚!

現れ出でよ、月明かりに舞い踊る美しき野獣!

《月光》
ムーンライト!

キャット・ダンス!
舞猫姫《!》

ムーンライト・キャット・ダンス!
《月光舞猫姫》

星7《闇属性》獣戦士族《攻2400》守2000

セレナのフィールドに融合モンスターが召喚される。

三日月を模した仮面で素顔を隠し、二刀の短剣を手繰る舞姫。

「来たな、融合召喚……! だが攻撃力はわずか2400! 俺のビッグ・スターには届かないぜ!」

「さあ、どうだろうな。私は更に魔法カード、《月光香》を発動。墓地から《月光》
マジック モンスターを一体選択し、特殊召喚できる。

これにより 《月光蒼猫》
ムーンライサル・キャット を特殊召喚!」

《月光蒼猫》
ムーンライサル・キャット

星4《闇属性》獣戦士族《攻1600》守1200

「ブルー・キャットの効果発動。このカードの特殊召喚に成功したとき、自分の場

の《月光》モンスター一体の攻撃力を、ターン終了時まで二倍にする。私がキャット・ダンサーを選択！」

ムーンライトキャット・ダンサー
《月光舞猫姫》

攻 2400 ↓ 攻 4800

「更にキャット・ダンサーの効果発動。このカード以外の《月光》モンスターをリリースすることで、キャット・ダンサーは全てのモンスターに二回ずつ攻撃できる」「なあに!？」

「バトル!」
ムーンライトキャット・ダンサー
《月光舞猫姫》で、《魔界劇団・ビッグ・スター》を攻撃!

沢渡シンゴ

LP:4000 ↓ LP:1700

「まだだ! キャット・ダンサーの効果により、ビッグ・スターは一回目のバトルでは破壊されない!

そして二回目のバトル! キャット・ダンサーで攻撃!!」

沢渡シンゴ

LP:1700 ↓ LP:0

「うわああ——!!!?」

モンスターが破壊されると同時、沢渡は爆風に吹っ飛ばされた。

怒涛の展開。まさに瞬殺。有言実行。

全くの無傷であった沢渡のライフを、セレナは一ターンのみで削りきった。

「よし、終わったぞ」

「あ……ああ」

遊矢の顔が引き攣る。

実力差はそこまで圧倒的ではない。互いが全力を尽くせば——それでもセレナが勝つかも知らないが——そこそこの勝負になったかもしれない。

だが如何せん間が悪かった。

沢渡はセレナを舐めていた。故に遊び心を持たせ、最善と言えるプレイをしなかった。セレナはその隙を全力で攻めた。

その結果がワンターンキルだっただけである。

「——成程。これは中々厄介だな」

「遊星。それはどういう意味で言ってるんだ？」

「……想像に任せる。ともかく、タッグデュエルという」

遊星と牛尾はデュエルディスクを装着し、デッキを装填する。

「そういうわけだ。お前は大人しく下がってろ」

「クソッ……まあいい、そういう約束だからな。いいか、俺達は言わばスタンダード次元の代表だ。無様な格好を晒したら承知しねえからな」

「ワンターンキルは無様ではないのか？」

「あれは油断しただけだ！ 次は俺が勝つ！」

「どうだろうな。かろうじてペンデュラムを使えるだけのお前が私に勝てるとは思えないがな」

「あーもう、ストップストップ！ いいから行くぞセレナ。沢渡は零羅を頼むよ」

「ッ——ああ、分かったよ」

二人は渋々と離れ、セレナは遊矢の元に、沢渡は零羅を傍において観戦する。

仲が悪い……わけではないのだろう、きっと。喧嘩するほど仲がいい”なんて言葉もあるのだから。

——そう信じて不安を誤魔化す遊矢であった。

「ルールは“タッグフォース”ルールだ。遊星、いいか？」

「ああ」

タッグフォースルールとはその名の通り、タッグデュエル専用のルールのことだ。フィールド、墓地、除外されたカード、そして「LP——ライフポイント」つまり、デッキと手札以外の全てを共有する。

「ということは、パートナーのカードを自分も使えるのか。……ともかく、頑張ろうセレナ」

「言われるまでもない」

「……牛尾、一つ提案がある」

「あん？」

遊星は二人に聞こえないよう、牛尾に耳打ちする。

怪訝そうな顔をしていた牛尾だったが、遊星の提案を聞いた途端、納得顔で頷いた。

「——……成程な。ちょっとおせっかいな気もするが、面白いことになりそうだな」
「だろう？」

「……何をこそそとしている。早く始めるぞ」

「あー悪い悪い。そんじゃあ——始めるぜ！」

四人の決闘者が、デュエルディスクを一斉に展開した。



「決闘——!!」

ライフは共有して4000ポイント。

プレイヤーのターンは交互に回ってくるため、^{レベル}「△モンスターを初めとしたターンを跨ぐコンボは難易度が格段に上がる。

ライフをコストとするカードも然り。この“タッグフォース”ルールのデュエルは、より高度なタッグプレイを要求されるのだ。

「さて、勝手ばかりで申し訳ないんだが、先行はこちらがもらう。はるばる別の次元からやって来たお客様には厚いおもてなしをしなくちゃな」

「好きにしろ。むしろ私としては好都合だ」

牛尾の挑発をセレナはバツサリ切り捨てて。

そして挑発には挑発。セレナは明らかに年上である牛尾に対して、この上なく不敵に笑う。

「シンクロ次元と言うからには、お前達はシンクロが得意なんだろう？ だったらこのターンで見せてみる」

「ほう、言うね。その態度、いつぞやの誰かさんを思い出さず。なあ遊星」

「……………」

遊星は露骨に黙りこくり、無表情で睨む。

——「早くしろ」と。

「ハハッ、無言か。まあいい。お嬢さんのお望み通り、一ターン目から本場のシンクロ召喚を拜ませてやるぜ。俺のターン！

俺は《ゴブリンドバーク》を召喚！」

《ゴブリンドバーク》

星4／地属性／戦士族／攻1400／守0

「《ゴブリンドバーク》のモンスター効果発動。このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを召喚できる。

ここで俺はチューナーモンスター《トラパート》を特殊召喚！」

《トラパート》

チューナー

星2《闇属性》戦士族《攻600守600

「俺はレベル4の《ゴブリンドバーク》に、レベル2の《トラパート》をチューニング！」

——シンクロ召喚！ であえ、《ゴヨウ・ガーディアン》！」

《ゴヨウ・ガーディアン》

星6《地属性》戦士族《攻2800守2000

一ターン目にして、牛尾のフィールドにシンクロモンスターが召喚された。

かつてのセキュリティの象徴。紐付きの十手を振り回し、権力を振りかざすポリスモンスター。

「攻撃力2800のシンクロモンスターか」

「ああそうさ。そこらのモンスターじゃ越えられねえ権力の壁よ。お前さんの融合モンスターも然りだ。さて、残りの俺のターンだが、カードを一枚伏せてターンエンド」

「——よく言った。ならばその壁、一足で踏み超えてやろう。私のターン！」

セレナのターンが回り、カードをドローする。

ドローしたカードは——《月光蒼猫》ムーンライダール・キャット。先程の沢渡シンゴとのデュエルでも

使用された、融合素材モンスターだ。

「その顔からすると、早速キーカードを引いたらしいな」

「まあな。今度はこちらの番だ。お前達に融合の力を見せてやろう。」

私は魔法カード、《融合》マジックを発動する！ これにより、私は手札の《月光》ムーンライト二

体を——」

——ニヤリ、と。

セレナが《融合》を使った瞬間、牛尾は不気味に笑った。

「かかったな！ セレナ、お前さんの《融合》にチェインして、俺はこの罌カードトラップを発動するぜ！」

「何っ——!?!」

セレナの魔法カード^{マジック}を遮り、牛尾は前のターンにセットした伏せカード^{リベース}——カウ
ンター罠^{トラップ}を発動させる。

「このカードは《封魔の呪印》。手札の魔法カード^{マジック}を墓地に送ることで、相手の魔法^{マジック}の発動を無効にし破壊する。そして、この効果で破壊されたカードはこのデュエル中、使用することができない」

「なっ——デュエル中だと……!?!」

「そう。つまり、これでお前は完全に《融合》を封じられた」

「……くっ」

「オイ、何やってんだ! とんでもない醜態晒してんじゃねえ!」

「っ——うるさい!」

沢渡のブーイング。

しかし、全くもって彼の言う通りだ。セレナは何も言い返せない。

「さあどうするよ。このままターンエンドか?」

「……くそ。私は、モンスターを守備表示で召喚」

セレナはモンスターを裏守備表示でセットする。

だが、通常召喚できるモンスターの守備力などたかが知れている。

彼女を守る盾は、あまりにも薄い。

「ターンエンドだ」

「……さて。次は俺のターンか」

牛尾が下がり、ターンプレイヤーである遊星が前に出た。

セレナは警戒する。

彼女は先程のDVD……ジャック・アトラスのデュエルを途中から見ていた。戦士を自称する彼女からしても、あの男の腕は確かだった。

——そしてこの男は、ジャック・アトラスの仲間だと言う。

あの男より強いかは分からない。だが、少なくとも弱いはずがない。

「ドロー。俺は《シンクロン・キャリアー》を召喚！」

《シンクロン・キャリアー》

星2/地属性/機械族/攻0/守1000

「《シンクロン・キャリアー》の効果発動！」

俺は通常召喚に加えてもう一度、《シ

ンクロン》と名のつくモンスターを召喚できる。

これにより、《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

《ジャンク・シンクロン》

チューナー

星3《閻属性》戦士族《攻1300《守500

「《ジャンク・シンクロン》の効果発動！ 墓地からレベル2以下のモンスターの効果を無効にし、守備表示で特殊召喚することができる！」

牛尾の《トラパート》を特殊召喚！」

《トラパート》

チューナー

星2《閻属性》戦士族《攻600《守600

「チューナーモンスター……やはり来るか！」

「俺はレベル2、《シンクロン・キャリアー》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

集いし星が、新たな力を呼び起こす！ 光射す道となれ！

——シンクロ召喚！ 切り拓け、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》

星5《闇属性》戦士族《攻2300 守1300

牛尾の《ゴヨウ・ガーディアン》に並び、また新たなシンクロモンスターが召喚された。

紫のアーマーと加速ブースター。右腕には巨大なナックルが装着されている。

「《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！ このモンスターのシンクロ召喚に成功した時、自分の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力分アップする！」

——「パワー・オブ・フェローズ」！」

《ジャンク・ウォリアー》

攻2300 ↓ 攻2900

「バトルだ！ まずは《ゴヨウ・ガーディアン》で、裏守備モンスターを攻撃！」

——「ゴヨウ・ラリアット」！」

守備表示モンスターは——《ムーンライザル・キャット月 光蒼 猫》。

投擲された十手がモンスターを粉碎する。

そして、それだけでは終わらない。《ゴヨウ・ガーディアン》は十手を巧みに使
い、ブルー・キャットは縛り上げる。

「なにっ——これは……!?!」

「これぞ《ゴヨウ・ガーディアン》のモンスター効果よ！ 戦闘で相手モンスター
を破壊し墓地に送った時、そのモンスターを俺達のフィールドに守備表示で特殊召
喚できる」

ムーンライザブルー・キャット
《月 光蒼 猫》

星4《闇属性》獣戦士族《攻1600》守1200

牛尾の解説と共に《ゴヨウ・ガーディアン》がブルー・キャットを引つ張り上げ、
フィールドに特殊召喚された。

コントロール奪取。これこそがポリスモンスター最大の特徴。

「まだバトルフェイズは終わっていない。《ジャンク・ウォリアー》、ダイレクトア
タック！」

——「スクラップ・フィスト」!

「ぐうっ——!!」

《ジャンク・ウォリアー》の巨大な拳を受け、セレナは大きく後ずさりする。
 リベース
 伏せカードはない。セレナに抵抗する手段はなく、二人共有のライフが一気に減
 少する。

セレナ・遊矢

LP:4000 ↓ LP:1100

「くっ……!」

セレナは歯噛みする。

牛尾・遊星の場には、彼らのエースであろうモンスターが一体ずつ。

そしてチューナーの《トラパート》と、セレナのモンスター《月光蒼猫》。
 ムーンライザル・キャット

「セレナ。これはタッグデュエルだ」

「……分かっている。次は私のターンではない。遊矢のターンだ」

「違う、そうじゃない。……やはり、君は分かっているようだな」

「……なんだと?」

「俺の仲間の一人は、タッグデュエルの世界大会にも何度か出場していてな。そいつがよくこう言っている。」

“パートナーを信じない者に勝利はない”、と」

「……何が言いたい」

「それは自分で考えるんだ。もし見つけられなければ、悪いが君達に勝機はない。

……カードを二枚伏せて、ターンエンド」

フィールドに二枚の伏せ^{リバー}カードが出現する。

これで牛尾・遊星のフィールドは万全。対して、セレナ・遊矢のフィールドには一枚もカードがない。

状況は絶望的。されど――

されど、これを覆してこそエンターテイメント。

「セレナ、無事か？」

「……………」

「浮かない顔だな」

「……まあな」

「そっか。じゃあ、とりあえず今は休んでくれ。舞台は俺が温めておくから」

「？ 何をする気だ」

「決まってるだろ」

そう言って、遊矢は満面の笑顔を浮かべる。

そして――

「レディース、エーン、ジェントルメーン!!」

――唐突に、声を張り上げた。

「あ?　なんだあ?」

その唐突さに牛尾は素に戻り、間抜けな声で呟いた。

遊星、パートナーであるセレナでさえも目を丸くして遊矢を見ている。

「本日はワタクシ榊遊矢と、その弟子セレナのエンタメタッグデュエルにお越しいただき、誠にありがとうございます!」

「弟子になった覚えはない」

セレナはきっぱり否定するが、遊矢は気にせず続ける。

「さて。早速ですが、まずはフィールドを確認しましょう！ 牛尾・遊星タッグのフィールドには、強力なシンクロモンスターが二体！ しかもセレナのモンスターは無実にも関わらず、悪い警察官に捕まってしまいました！ ですがご安心あれ！ このエンタメデュエリスト『榊遊矢』が、この逆境を見事引っくり返してみせましょう！」

「……言いたい放題だな。あんにやろう」

毒づく牛尾。だが、その顔は笑っている。

「では参ります。ワタシのターン！」

長い長い前口上のあと、ようやく遊矢がドロローした。

遊矢は引いたカードともう一枚を手札から選択し、相手に見えるように掲げる。

「ワタシは、スケール4の《エンタメイトEM

生の魔術師》で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

二枚のカードが置かれた瞬間、遊矢のディスクに“PENDURAM”の文字が表示された。

セットされた《エンタメイトEN》トランプ・ウィッチ》と《相生の魔術師》が出現し、上空へ浮かび上がる。

「この召喚法……沢渡もさっき使っていたな。遊矢も使えるのか」

「左様でございます！ 我々のペンデュラムゾーンには、スケール4のトランプ・ウィッチと、スケール8の《相生の魔術師》。これにより、レベル5から7のモンスターが同時に召喚可能となります！」

ペンデュラム振り子が揺れる。大きく——もっと、大きく。

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！」

——ペンデュラム召喚！ 来い、ワタシのモンスター達！」

遊矢が手を振り上げた瞬間、天空の孔からモンスターが出現する。

「まずは、《エンタメイトEN》ドラミング・コング》！」

《エンタメイトEN》ドラミング・コング》

星5/地属性/獣族/攻1600/守900

「続いて、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星7/闇属性/ドラゴン族/攻2500/守2000

召喚されたのは二体。

一体は、胸部がドラム状になっているゴリラのエンタメイト。

もう一体は世にも珍しい、緑と赤のオッドアイを持つドラゴン。

——ペンデュラム召喚。上級モンスターを同時に召喚する、神遊矢の十八番。

「この二体が第一幕の主役となります！ さあ、バトルと参りましょう！」

まずは《エンタメイトEN ドラミング・コング》で、《トラパート》を攻撃！」

《トラパート》が破壊されるが、表示形式は守備。遊星にダメージはない。

「次はオッドアイズ！ 《ジャンク・ウォリアー》に攻撃！」

「何っ——？ だが、攻撃力はこちらが上」

「その通り！ しかしここで、ドラミング・コングのモンスター効果が発動します！」

自分のモンスターが相手モンスターとバトルする時、その力強いリズムによっ

て、攻撃力を600ポイントアップさせるのです!

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

攻 2500 ↓ 攻 3100

「行け、オッドアイズ! その二色の眼で捉えた全てを焼き払え!

——螺旋のストライク・バースト——!」

オッドアイズのプレス攻撃が、強化された《ジャンク・ウォリアー》を焼き尽くす。

その炎はモンスターだけでなく、プレイヤーにまで効果が及ぶ。

「オッドアイズの効果発動! モンスターとの戦闘で与えるダメージを二倍にする!」

——リアクション・フォース——!」

牛尾・遊星

LP 4000 ↓ LP 3600

「っ……、やるな」

「まだまだこれからですよ! ワタシは更に速攻魔法《ペンデュラム・クライマッ

クス》を発動！ 自分の場のペンデュラムモンスター一体をリリースし、同じレベルの相手の墓地のモンスターを、このターン戦闘を行ったペンデュラムモンスターに装備します！

ワタシは《エンタメイトエンタメイト》ドラミング・コング》をリリースし、同じレベルの《ジャンク・

ウォリアー》を、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》に装備！

オッドアイズの攻撃力は《ジャンク・ウォリアー》の攻撃力の半分アップし、このターン、二度目の攻撃が可能となります！」

「何——！」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

攻 3100 ↓ 攻 4250

「さあオッドアイズ、二度目のバトルです！ 《ゴヨウ・ガーディアン》を攻撃！

—— 螺旋のストライク・バースト”!!」

二度目のブレスが、今度は《ゴヨウ・ガーディアン》を粉碎する。

オッドアイズの攻撃力は4250。その差——1450。

「オッドアイズの効果により、与えるダメージは二倍！

——「リアクション・フォース」！」

牛尾・遊星

LP:3600 ↓ LP:800

「ぐあっ——！」

「無事かあ、遊星」

「っ——ああ。……しかし、予想以上にやるな」

オッドアイズの怒涛の連続攻撃により、状況は一気に逆転した。

——だが、それだけでは勝てない。

ライフは僅か800。それでも、牛尾と遊星は微塵も焦ってはいなかった。

これはタッグデュエル。一人で頑張るにしても限界がある。パートナーを引きずったまま勝つことなど不可能。

つまり、言い換えれば——

「——あとは、セレナ次第だな」

「あ？ どういうこった。確かにヤバイっちゃヤバイが、このままなら行けるだろ」

「さあな、今にわかるさ。一つだけ確実に言えるのは、次が牛尾の最後のターンということだ」

「……分かんねえな。はっきり言えよ遊星。お前、何企んでる？」

「そんな言い方はよせ。俺はただ、あの二人の絆を信じているだけだ」

「絆……ねえ」

牛尾は遊矢とセレナの方を見やる。

「……流石だな、遊矢」

「お褒めに預かり光栄でございます、姫」

「遊矢—— ふ ざ け て い る の か ？」

「……へっ？ あ、いや、違うぞ。今のはただのエンタメっていうか、ちょっと

したお芝居っていうか……だから、頼むから落ち着いて。暴力反対」

「なら早くしろ。まだお前のターンだ」

「あ、ああ。ええと、俺、いやワタシは、カードを一枚伏せる！」

セレナに脅され、慌てて遊矢はターンを終了させる。

牛尾はそのやりとりを眺め——思わず、頬が緩んだ。

「ワタシはターンエンド。これにて第一幕は終了にございます」

仰々しく一礼し、遊矢のターンが終了。これにて一巡。

遊星と交代し、今度は牛尾が前に出る。

「さて、と。これでようやく俺のターンが来たわけだが……随分と派手にやってくれたじゃねえか、オイ」

「それはそれは。お気に召して頂けたでしょうか？」

「正直驚いた。が、少しばかり詰めが甘かったな。ドラミング・コングの効果はバトルフェイズ終了時に消え、《ペンデュラム・クライマックス》はターン終了時に消える。

つまり、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の攻撃力は元に戻り、《ジャンク・ウォリアー》もまたこっちの墓地に帰ってくる」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

攻4250 ↓ 攻2500

「そうですね。ですが、貴方のフィールドにはセレナのモンスターが一体のみ。こちらの優勢は変わりませんよ？」

「——だといいな。」

じゃあ行くぜ、俺のターン。遊星、この伏せカードリバース、使わせてもらうぜ」

「好きにしろ」

「よし来た。伏せカードリバースオープン！」

牛尾は伏せられたカード——遊星が伏せたカードを使用する。

「魔法カード、《戦士の生還》マジック。墓地の戦士族モンスターを一体手札に戻す。

俺は《ゴヨウ・ガーディアン》を選択。しかし、シンクロモンスターは手札にいかずエクストラデッキに戻る。

さらに永続罠トラップ《エンジェル・リフト》！ 墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。俺が召喚するのはチューナーモンスター《トラパート》！

《トラパート》

チューナー

星2\闇属性\戦士族\攻600\守600

「レベル4の《月光蒼猫》ムーンライダール・キャットに、レベル2の《トラパート》をチューニング！

——シンクロ召喚！ もう一度来い、《ゴヨウ・ガーディアン》！」

《ゴヨウ・ガーディアン》

星6／地属性／戦士族／攻2800／守2000

「そんな、また!？」

「へっ、それじゃあバトルといくぜ。《ゴヨウ・ガーディアン》で、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃!

——「ゴヨウ・ラリアット」!」

セレナ・遊矢

LP1100 ↓ LP800

「ぐっ——!」

「そして《ゴヨウ・ガーディアン》の効果発動! そのドラゴンは頂くぜえ!」
 「っ……ところが、そうはいきません! オッドアイズはペンデュラムモンスター。
 ペンデュラムモンスターはフィールドで破壊された場合、墓地には行かずエクスト
 ラデッキに戻ります!」

「おっとそうか。じゃあ効果は使えねえな。俺はカードを一枚伏せて、ターンを終了するぜ。」

——分かってるよな？ 次は融合の嬢ちゃんのターンだ」

「っ……分かってる」

——そう。ここが境目だ。

セレナの手札は五枚。枚数だけを考えれば十分逆転は可能だろう。

だが《封魔の呪印》の効果により《融合》は使えない。融合召喚が主戦力である彼女にとって、これほど厳しい状況はない。

「私のターン！」

カードを引く。

おそらく、これが彼女にとって最後のドロー。

「なっ——……！」

セレナはドローしたカードを確認する。

引いたのは——二枚目の《融合》だった。

言うまでもなく、彼女のデッキのキーカードである。

「どうやらお望みのカードは来なかったらしいな。いや、もしかすると逆か？

《融合》でも引いちゃったのか？」

「っ——!」

セレナは射殺すように牛尾を睨みつけるが、当人は涼しい顔でそれを流す。
牛尾は自分の勝利を確信している。

事実、《融合》を封じられた今のセレナは何もできない。

「ハッ、分かり易いヤツだ。となると、これで俺達の勝ちは決まりだな」

「いーや、それはどうかな!」

「!」

自信満々の声にセレナは驚く。

代わりに答えたのは遊矢。

険しい顔のセレナとは裏腹に、遊矢はどこまでも明るく、牛尾の勝利を否定する。

「ほう。この状況を挽回できると?」

「できるさ。俺とセレナならできる。確かに貴方は強い。多分、一体一じゃ勝つのは難しいと思う。けど、これはタッグデュエルだ」

「だったら勝てるだけでも言いてえのか」

「勿論! さ、セレナ!」

「……はあ。全く」

溜息をついたあと、セレナは遊矢を睨む。

しかし、表情はどことなく柔らかい。

「……^{リベース}伏せカードだ、セレナ」

「ん？」

「^{リベース}伏せカード。どうしても無理だと思ったら使ってくれ」

訝しげにしつつ、セレナは遊矢のカードを確認する。

「——！」

その瞬間、理解した。

タッグデュエルの意味を。遊矢の想いを。

そして、不動遊星という男の狙いを。

「……そうか。そういうことか」

合点がいった。そう言わんばかりにセレナは頷く。

「セレナ？」

「ああ、いや。もう大丈夫だ」

「……そっか。よかった。」

それでは、シンクロ次元の皆様にご覧頂きましょう！ 我々師弟のコンビネー

ションを！」

「だから違うと……——いや……まあ、いい。では、第二幕を上げるとしよう」

セレナの表情に笑顔が戻る。

ただしそれは、この上なく不敵な笑み。彼女らしい挑発的な笑顔だ。

「第二幕か。大きく出たな。今度は何を見せてくれるんだ？」

「今にわかるさ。まずは下準備からだ。」

私は魔法カード《死者転生》^{マジック}を発動する。手札を一枚捨て、墓地のモンスターを

一体手札に戻す。……私は、このカードを墓地に送る」

セレナが示したのは《融合》のカード。

《封魔の呪印》によって使えないため、運用としては間違っていない。

しかし、融合次元の決闘者^{デュエリスト}が自らの意思で《融合》を捨てたのだ。

誰も気づいていなくとも、これには大きな意味がある。

「まずいな牛尾。どうやら本気になったらしい」

「らしいな……にしても、やけに嬉しそうだな」

「気のせいだ」

「手札に戻すのは《月光蒼猫》ムーンライザル・キャット。そして私は、この伏せカードを発動させる！
リバース

——速攻魔法発動！ 《ペンデュラム・ターン》！」

「ペンデュラムだと？ オイ、まさかそのカードは……」

「そうだ。これは前のターンに遊矢が残した伏せカード。リバースこの効果により、ペンデュラムモンスター一体のスケールをターン終了時まで変更する。

私は《エンタメイトEN》 トランプ・ウィッチ》のスケールを4から1に変更！

そしてフィールドのカードが減ったことで、《相生の魔術師》のスケールは8に戻る！」

宙に浮くトランプ・ウィッチと《相生の魔術師》が示す数値が変動する。
セッティングされたスケールは1と8。

「これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！

——ペンデュラム召喚！ 来い、私のモンスター達！」

《月光蒼猫》ムーンライザル・キャット

星4 闇属性 獣戦士族 攻 1600 守 1200

《月 光紫 蝶》
ムーンライボプル・バタフライ

星3 闇属性 獣戦士族 攻 1000 守 1000

月夜に舞う獣が二体、天空のアークより姿を現した。

どちらも低級モンスター。一体では大した力を持たない。

彼女のモンスターは、融合召喚により真価を発揮する。

「……こいつは驚いたぜ。まさかペンデュラム召喚とはな」

「安心しろ、お楽しみはこれからだ。」

ここで私は、《エンタメイト トランプ・ウィッチ》のペンデュラム効果を発動。一ター

ンに一度、自分フィールドのモンスターで融合召喚を行う」

「なにい!？」

《封魔の呪印》はあくまで《融合》という魔法カードを封じるだけだ。融合召喚

そのものは封じられたわけではない。

「私が融合するのは、《月 光蒼 猫》と《月 光紫 蝶》。
ムーンライザル・キャット ムーンライボプル・バタフライ

蒼き闇を徘徊する猫よ。紫の毒持つ蝶よ。月の引力により渦巻きて新たな力と生

まれ変わらん！

——融合召喚！

現れ出でよ、月明かりに舞い踊る美しき野獣！

《月光》

舞猫姫《！》

ムーンライトキャット・ダンサー

《月光舞猫姫》

星7〔閻属性〕獣戦士族〔攻2400〕守2000

「ちっ、出やがったな猫娘」

「バトルだ！ キャット・ダンサーで《ゴヨウ・ガーディアン》を攻撃！」

「血迷ったか！ キャット・ダンサーの攻撃力はたったの2400！ 《ゴヨウ・

ガーディアン》の方が攻撃力は上だ！」

「始めに言ったはずだ。その程度の壁、一足で超えてみせると！」

私は速攻魔法《決闘融合バトル・フュージョン》を発動！ この効果によりダメージステップ終了時まで、キャット・ダンサーの攻撃力は《ゴヨウ・ガーディアン》の攻撃力分アップする！」

ムーンライトキャット・ダンサー

《月光舞猫姫》

攻2400 ↓ 攻5200

「攻撃力、5200だとオ!？」

「これにて終幕だ。行け、キャット・ダンサー！」

——ッフル・ムーン・クラスター——!!」

「うおおおあ——!!」

キャット・ダンサーの攻撃が決まり二人のライフが底をつく。

一歩下がっていた遊星はその様子を——セレナが牛尾を打ち負かす光景を、満足げに眺めていた。

牛尾・遊星

LP:800 ↓ LP:0



「私は、弟子になった覚えはない」

「ご、ごめん、他に案が思い浮かばなくて……けど、いいエンタメだっただろ？」

「どこがだ。私は戦士だぞ。お前の謳うエンタメなど知らないし興味もない」

「う……ごめん」

がっくりと遊矢は項垂れる。

実際先程のデュエルは、エンタメとしては不安定だった。

……素人を舞台に上げ、その上で活躍させる。

余程上手く魅せなければ客は満足しないし、失敗する可能性も十分あったのだから。

……けれど。

一つだけ、確かなことがある。

「——ただ」

「？」

「ただ……まあ、その……」

ぼそり、と。

誰にも聞こえないほど小さな声で、セレナは呟いた。

「お前とのデュエルも、悪くはなかった」

少女もまた、魅せられてしまったのだ。

この榊遊矢というエンタメの使者に。

——という感じで、「狂犬」が「番犬」になったりとか。
え、しない？ ……デスヨネー。

加速するハヤブサ

しかしそこでは黒咲が大活躍していた！（ネタバレ）

注意…スピードスペルが登場します。ランク・アップ・マジック R U Mが使えねえ！

デュエルは途中からです。一から書くのは割とキツイ。というか、【RR】を書くのがキツイ。

その男は、灰色のコースを駆けていた。

跨っているのは漆黒のD・ホイール。男はカードと、スピード速さというもう一つの武

器を纏い、未知の召喚法を駆使して敵を殲滅する。

観客は皆、その男に魅了されている。別世界から来たのではないかと疑ってしま
うほどの、その異次元的な強さに。

聞くとところによると、男はライディング・デュエルの経験がないらしい。

真実は定かではない。証拠がないからだ。だが、目の前のこの惨状を見れば、誰

もが嘘だと感じるだろう。

——男の名は黒咲隼。

スタンダード次元の精鋭部隊『ランサーズ』が誇るエクシース次元のデュエリストである。



このスタジアムでは定期的に一種の賭博が行われている。

腕に覚えのあるD・ホイラー達を集め、リーグ戦を開く。観客は誰が勝つかを予想し、手持ち金を賭ける。

ある者は無名の選手に大金を貢ぎ、ある者はトッププレイヤーに僅かばかりの財産を注ぎ込む。

平たく言ってしまうえば競馬である。ただ、走るのは馬ではなくD・ホイラーであるというだけ。

ここに集められる者達は様々だ。表舞台を去った者から高待遇のVIPまでなん

でもアリ。

——共通しているのは、ここを走る者全員が敏腕プロモーター『ギャラガー』に目をつけられた決闘者だということ。デュエリスト

黒咲隼もまたそのうちの一人。

シンクロ次元に存在しない召喚法——“エクシーズ召喚”の使い手としてスカウトされたのである。

“グライディング・デュエル”……バイクに乗ってデュエルしてるんだ。うん、スリルがあって面白そうだね！」

スタジアムでD・ホイールを駆る黒咲を見て、デニス・マックフィールドは目を輝かせる。

水色のシャツの上にオレンジのスーツ。動きやすさを重視してか、スーツには右袖だけがない。派手かつ紳士的なその服装は、見る者に手品師マジシャンを連想させる。

「何が“面白そう”だ。今の俺達にこんなことをしている暇はないぞ」

もう一人の男——権現坂昇がデニスを諷める。

巨大なリーゼントと白い学ラン、赤いハチマキ。

髪型だけを見れば不良のそれだが、雰囲気や立ち振る舞いは完全に真逆と言っているだろう。

権現坂は限界まで敷き詰められた観客席を見て、不満を隠さずに言う。

「それに見たところ、これはおそらく賭けデュエルだろう。こんなもの、実にけしからん行為だ」

「そうかなあ。だって聞こえない？ この歓声、この熱気。これぞエンタメって感じじゃない？」

「どかがエンタメだ。法を侵すエンタメなど、もはやエンタメではない」

「オイオイ、人聞きの悪いこと言うんじゃないぞ」

金色のサングラスを掛けた男が訂正する。

高価なスーツを身に付け、指には宝石首にも宝石。只者ではないことが一目で分かる。

彼こそがこの支配人、ギャラガーである。

「ここをどう思おうと勝手だが、これだけは言わせてもらうぜ。こいつは違法じゃねえ。シティからの許可も降りてるんだからな」

「だとしても、けしからん見世物であることに変わりはない。デュエルが終了したら、俺達は黒咲を連れて出て行くぞ」

「ええー!? そんな、黒咲だけずるいじゃないか！ 僕もライディング・デュエル興味あるのに！」

「後にしろ後に。遊矢達を探して合流するのが先だ」

「むう……」

デニスは渋々、といった感じで引き下がる。

が、ギャラガーは引き下がらない。

何しろこの二人はギャラガーにとって絶好のカモ。黒咲を倒せる可能性が最も高く、何より話題性抜群の決闘者^{デュエリスト}だからだ。

「なるほどな。けど、人探しならここよりいい場所はないぜ。なんせ賞品があれだからな！」

ギャラガーが指差したのは一枚のポスター。

映っているのは、白いライディングスーツと金髪の男。そして、明らかに一般の物とは異なるD・ホイール。

「なんだ、それは」

「このネオ童実野シティには、かつて世界を救った伝説のチームがいてな。そのうちの一人“ジャック・アトラス”が、じき開催される“フレンドシップ・カップ”で帰ってくるのよ」

「フレンドシップ・カップ？」

「ああ。フレンドシップなんて可愛らしい名前が付いちゃいるが、その正体はただの生存競争よ。参加希望のD・ホイーラーがシティ中を跋扈し、出会えばたちまちデュエル開始。人数が絞られるまで永遠に戦い合う。」

——そう。大会が始まれば、この眠らない街“ネオ童実野シティ”は、修羅の街“バトル・シティ”と化す！」

「バトル・シティだとい！」

「そうだ！ 公平な戦いなんてのは上っ面だけだ。乱入上等インチキ上等。見つかりさえしなければなんてOKなんだぜ。」

……ま、大抵は見つかっちまうんだがな」

「む——そうか、ならば安心だ」

不正は見つかる。

バトル・シティと聞いて背筋が凍ったが、それを聞いて権現坂はほっと胸をなでおろす。

この次元にはセキュリティと呼ばれる警察組織がある。彼らはすっかり自分達の街を取り締まっているようだ。

「で、この大会の優勝者には『ジャック・アトラス』とデュエルする権利が与えられる。その最短ルートがこのスタジアムってわけだ」

「どういふことだ？ 何故ここがその『フレンドシップ・カップ』とやら繋がる」
「そいつは賞品が『シード権』だからだ。『バトル・シティ』が終われば、その後は一つのスタジアムでトーナメント戦が行われる。

要するにここで一定以上の成績を出せば、バトル・シティの火の粉を浴びることなくトーナメントに進めるってわけだ」

「……成程。黒咲の狙いはそれか」

元来、ランサーズの目的はシンクロ次元と同盟を結ぶこと。そして、強い決闘者デュエリストを探すことだ。

ここで勝ち続けていれば、自ずと強い決闘者に会えるだろう。たとえ機会に恵まれなかったとしても、フレンドシップ・カップでは確実に会える。

加えて大会に出場すれば、ランサーズの面々とも合流することができる。

黒咲の行動は一応、理にかなっている。

「……だとしてもだな、それでは時間が掛かってしまう。俺達は遊矢だけじゃなく、柚子も探さなければならんのだぞ」

「まあまあ権ちゃん」

デニスはギャラガーに聞こえないよう、声を潜めて言う。

「……見る限りこの次元は平和っぽいし、少しくらい遅れたっていいんじゃない？
それに、大会に出場した方が遊矢達も驚くと思うし」

「……正直に言ったらどうだ。ライディング・デュエルがしたいだけだ」と
「心外だなあ。『だけ』なわけじゃないじゃないか」

「まったくお前というやつは——」

「まあまあ落ち着いて。とりあえず、細かい話は後で相談して決めることにしようよ。今は黒咲のデュエルを楽しもうじゃないか」

デニスはスタジアムの方へ目を移す。

ギャラガー専用の特等席だけあって、かなり眺めはいい。

「デニスの言う通りだぜ。なんせ今度は、お前らが黒咲と戦うかもしれねえんだからな」

「ホントに!？」

「断る！」

身を乗り出すデニス。対し、権現坂は腕を組み拒否する。

「ハハッ、真逆の反応とは面白い。こいつは楽しみだぜ」



黒咲は無言のままコースを駆ける。

対戦相手は腕利きのD・ホイラー。公式試合で大敗した後ここに流れ着き、以降長い間活躍しているらしい。

だが、黒咲はそんな経歴に興味はない。いかに幅をきかせていようが、所詮は這

い上がれなかった弱者。そんな決闘者など、彼にとって敵ではない。

「俺のターン！」

ターンが変わり、ドローフェイズ。

黒咲は今一度、フィールドの状況を確認する。

ENEMY

LP:1200

SPC:3

黒咲

LP:1000

SPC:5

ここでのデュエルは、好成绩を収めれば収めるほど不利になる。

今回のライフペナルティは、連勝している黒咲に2000。勝ち負けを繰り返している男には0。

デュエルは既に佳境に入っている。

黒咲の場にモンスターはなく、男の場にモンスターは一体。新緑の木々を彷彿と

させる虎のようなモンスター、《ナチュル・ビースト》。

《ナチュル・ビースト》

星5\属性性\獣族\攻2200\守1700

《ナチュル・ビースト》は、デッキトップのカードを二枚墓地に送ることで魔法マジックの発動を無効にできる。

加えて伏せカード^{リバース}が一枚。

ライディング・デュエル最大の特徴は、専用の魔法である《sp》。《SPC》^{スピードスベル}^{スピードカウンター}が貯まれば貯まるほど、反則的な効果を持つ魔法カード^{マジック}を使用できるようになる。しかし、今はそれが封じられてしまっている。これでは逆転も難しい。

「……くだらん」

黒咲は吐き捨てる。くくだらない、と。

彼にライディング・デュエルの経験はない。しかしそれが幸いした。

たとえ《sp》^{スピードスベル}が使えなくとも、経験がない黒咲にとってはなんの負担にもな

らない。

「《RR》^{レイド・ラフターズ}バニシング・レイニアス》を召喚！」

機械じみた鳥獣が現れ、D・ホイールを操る黒咲と並行して滑空する。

《レイド・ラプターズRR―バニシング・レイニアス》

星4〈闇属性〉鳥獣族〈攻1300〉守1600

「バニシング・レイニアスのモンスター効果発動！ 手札からレイド・ラプターズ《RR》モンスターを特殊召喚する！

俺は、二体目のバニシング・レイニアスを特殊召喚！」

二体目のバニシング・レイニアスが現れ、一体目と並ぶ。

そして、まだ終わらない。

「更に二体目の効果を発動！ 三体目、バニシング・レイニアスを特殊召喚！」

三体目が現れ、更に滑空。

同名モンスターが三体並び、互いに共鳴し合う。

「……やるじゃねえか」

高音の咆哮を浴びて、対戦相手の男は笑みを浮かべつつも賞賛した。

男とて黒咲の評判と戦術は聞いていた。が、それでもなお、魔法マジックを使わずに同名

モンスターを三体並べる手際の良さには、驚かざるを得ない。

「俺は、三体のバニシング・レイニアスでオーバーレイ！」

三体の鳥獣は闇色の塊となり、空に空いた黒き孔へと吸い寄せられる。

同レベルモンスター複数を使用する召喚。素材となつたモンスターはオーバーレイ・ユニットとして宙に舞い、効果を使う際に消費される。

シンクロ次元には存在しない新たな召喚法——それが。

「雌伏のハヤブサよ。逆境の中で研ぎ澄まされし爪を挙げ、反逆の翼翻せ！ エクシーズ召喚！ 現れろ！ ランク4！ 《RR——ライズ・ファルコン》！」

レイド・ラプタース

寒色の色を帯びた機械鳥が、黒咲隼の元へと舞い降りた。

強者を倒すための反逆の翼。黒咲隼の象徴とも言えるモンスター。

レイド・ラプタース

《RR——ライズ・ファルコン》

ランク4〈闇属性〉鳥獣族〈攻1000守2000

「ここに来てエクシーズ召喚か。攻撃力はたったの100。だが——」

「そうだ。ライズ・ファルコンには、攻撃力の差をものともしない効果がある。

オーバーレイ・ユニットを一つ使うことで、特殊召喚された相手モンスターを一体選択し、その攻撃力分アップする！

《ナチュル・ビースト》の攻撃力は2200。よって、ライズ・ファルコンの攻

撃力は——!!」

《レイド・ラフターズ》
RR——ライズ・ファルコン》

攻 100 ↓ 攻 2300

「バトルだ！ ライズ・ファルコンで《ナチュル・ビースト》を攻撃！ ぐ

イブクロー・レボリューション”!!」

炎を纏った突撃を受け、《ナチュル・ビースト》は破壊。同時に男のライフが減少する。

削られた数値は僅かだが、いずれにしても上級モンスターの直接攻撃を受ければ消える程度。いかに小さな傷でも避けたいのが本音だろう。

ENEMY

LP:1200 ↓ LP:1100

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド」

「ちっ……やってくれるぜ。俺のターン！」

ENEMY

LP:1100

SPC:4

黒咲

LP:1000

SPC:6

男はカードをドロ^{リバー}した後、即座に伏せカードを発動させる。

「罨^{トラップ}発動、《シンクロ・スピリッツ》！ 墓地のシンクロモンスターを除外して、

素材となったモンスター一組を墓地から特殊召喚する！

《ナチュル・ビースト》をゲームから除外して、《キーマウス》、《素早いビッグ
ハムスター》を特殊召喚！」

《キーマウス》

チューナー

星1/地属性/獣族/攻1000/守1000

《素早いビッグハムスター》

星4/地属性/獣族/攻1100/守1800

一枚のカードで、二体の下級モンスターが特殊召喚された。

内一体はチューナーモンスター。レベル5のシンクロモンスターが来るのでは、と黒咲は警戒する。

「そして俺は、《素早いビッグハムスター》をリリースして、《バフォメット》をアドバンス召喚！」

《バフォメット》

星5《闇属性》悪魔族《攻1400／守1800

「《バフォメット》の効果発動！ デッキから《幻獣王ガゼル》を手札に加える」
「……」

《キーマウス》と《バフォメット》。合計レベルは6。

今度こそシンクロ召喚が来る——とは、黒咲は思わなかった。
違う、そうではないと彼の本能が告げる。

「っ——」

黒咲隼は覚えている。己の無力さを。己の不甲斐なさを。

どれだけ強くなっても。いかに勝利を重ねようと。

今浴びている歓声など、飾りにも劣るのだ。

「《スピードスベル

《SP—スピード・フュージョン》を発動！

スピードカウンター

SPCが四つ以上ある時、モ

ンスターを融合させることができる！俺は、手札に加えた《幻獣王ガゼル》と、

フィールドの《バフォメット》を融合！

融合召喚！いでよ、《有翼幻獣キマイラ》!!」

《有翼幻獣キマイラ》

星6／風属性／獣族／攻2100／守1800

——翼が生えた二頭の獣。

無理矢理合成させられたようなその醜い様は、正しく合成獣に相応しい。

スピードスベル

キメラ
スピードカウンター

「そして《SP—シルバー・コントレイル》を発動！SPCが二つ以上ある

時、モンスター一体の攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

《有翼幻獣キマイラ》

攻2100 ↓ 攻3100

「バトルだ！キマイラでライズ・ファルコンに攻撃！

キマイラ・インパク

ト・ダッシュグー！」

「墓地の《レイド・ラプターズRR——レディネス》の効果発動！ このカードを除外し、このターン受ける全てのダメージを0にする！」

「だが、モンスターの攻撃は通るぜ！」

キマイラの攻撃を受け、ライズ・ファルコンは脆い硝子のように砕け散った。破壊の衝撃をD・ホイール上で受けつつ、黒咲は体勢を整える。

「耐え抜いたか。俺はこれでターンエンド」

《有翼幻獣キマイラ》

攻3100 ↓ 攻2100

「っ——」

黒咲は舌打ちする。

何しろ手札がない。先程のバニシング・レイニアス三体で既に使い切ってしまったのだ。

観客は動揺する。連勝中の黒咲が負けるのか、と。

だが、当人の目はまだ死んでいない。それに期待している者達もいる。

結果はどうあれ、間違いなく次が黒咲のラストターン。

「俺のターン、ドロー！」

ENEMY

LP:1100

SPC:5

黒咲

LP:1000

SPC:7

スタンバイフェイズの瞬間、両者のスピードカウンターが一つずつチャージされる。

カウンターの数は七個。黒咲はこれでようやく、狙っていた効果を発動できる。

「俺は《スピード・ワールド2》の効果発動！ スピードカウンター SPCを七つ取り除き、手札

の《スピードスベルSP》を一枚公開することで、カードを一枚ドローする」

「ほう、最後のドローに賭けるってことか。まあ無駄だろうがな。エクシーズモンスターは一体では成り立たない。精々壁モンスターを出して終わりってとこだろ

うよ」

「言っている。このデュエル、勝つのは俺だ。」

——ドロー!!」

黒咲

LP:1000

SPC:0

黒咲はカードをドローし、途端にD・ホイールは失速する。

スピードカウンター

SPCがなくなったためだ。D・ホイラーにとってSPCはライフの次

スピードカウンター

に管理すべき数値。これが無ければほぼ全ての魔法が発動できないからだ。

——その上で、黒咲は笑っていた。

速度が落ちた黒いD・ホイールは、中継カメラで黒咲の表情をはっきりと捉えている。

観客席は一瞬だけ静まり返り、男は訝しげに黒咲を見つめる。

——そして唐突に、黒咲のD・ホイールは急加速する。

スピードスベル

「《Sp—オーバー・ブースト》発動! SPCを六つ増やす代わりに、ター

スピードカウンター

ン終了時に一つにまで減少する！」

「何っ——うおっ!？」

黒咲

LP:1000

SPC:6

カウンターを上回った黒咲は、あっという間にその男を追いついた。

もはや彼を止められない。

止まることなく、止め様がなく、黒咲は勝利への道を突き進む。

トラップ

「罠発動、《エクシーズ・リボーン》！ この効果により、墓地からエクシーズモ

ンスターを復活させる！ 舞い戻れ、《レイド・ラプターズRR——ライズ・ファルコン》！」

レイド・ラプターズ

《RR——ライズ・ファルコン》

ランク4\闇属性\鳥獣族\攻100\守2000

「なんだと!？」

「ライズ・ファルコンの効果発動！ オーバーレイ・ユニットを一つ使い、特殊召喚されたモンスターの攻撃力分アップする！」

レイド・ラプターズ
《RR》——ライズ・ファルコン》

攻 1000 ↓ 攻 2200

「さらに《SP》スピード・エナジー》発動！ SP Cを一つ使うことで、ラ

イズ・ファルコンの攻撃力はSP C一つにつき、200ポイントアップする！」

黒咲

SP C: 6 ↓ 5

レイド・ラプターズ
《RR》——ライズ・ファルコン》

攻 2200 ↓ 攻 3200

ライズ・ファルコンの攻撃力が流れるように上昇する。

最終的な攻撃力は3200。一撃で相手を葬れる範囲にまで到達した。

翼を持っただけの地を這うキマイラに、その攻撃力はあまりにも遠い。

「バトルだ！ ライズ・ファルコン、《有翼幻獣キマイラ》を攻撃！ グレイブ

クロー・レボリューション”!!”

スピードの力を得た隼が合成獣に突撃する。

攻撃力の差は1100。男に防ぎ術はなく、彼を守る最後の砦が破壊された。

「ぐっ——うあああああ——!!」

ENEMY

LP:1100 ↓ LP:0

ライフが尽き、男のD・ホイールが停止。スモークが吹き上がり、完全にスピードを失って停止した。

勝敗が決着し、会場は再び黒咲コールに包まれる。

——融合モンスターの破壊。

己の完全なる勝利を実感しつつ、黒咲は余韻を味わう。

勝者は黒咲隼。連勝記録は守られ、目的へとまた一歩近づいた。



「ハ―イ黒咲。久しぶりだね、元気だった？」

「……」

開口一番、デニス黒咲に明るく声を掛けた。

試合が終了し、黒咲は一度控え室へ戻った。そこで待っていたのがこの二人――デニスと権現坂だったというわけである。

だが、黒咲が無言になった理由はその格好だ。

権現坂はいつも通り。しかし、デニスはオレンジのライディングスーツを纏い、ギヤラガーから借りたであろうD・ホイールを引いている。

「……何故貴様らがここにいる」

「それはこちらの台詞だ。単独行動は感心せんぞ」

「俺は俺に出来ることをやっていただけだ。ここに来たということは、貴様らも話は聞いただろう？」

D・ホイールの点検をしていたデニスが得意げに言う。

「あーそれ、僕らも聞いたよ。フレンドシップ・カップのことだよね？」

「そうだ。俺はここで勝ち残り、その大会に出場する。強い決闘者^{デュエリスト}を探すなら、これを逃す手はない」

「だよね。ね、権ちゃん。僕が言ったとおりだったでしょ？」

「ぬう……しかしだな、これは健全なデュエルではない。賭けデュエルなんだぞ」

賭けデュエル。権現坂が洩る理由はそこだ。

糞真面目という言葉が似合うこの男は、どんなに正当な理由があっても、この手のモノを認めるわけにはいかないらしい。

「勘違いしてもらっては困る。貴様らに出番はない」

「……む」

挑発とも取れる黒咲の言葉に、デニスは反論する。

「そんなことはないよ。僕らだってランサーズの一員なんだから」

「それ以前の問題だ。これはライディング・デュエル。通常の魔法は使えず、《《スピードスベル》》
がモノを言う速さのデュエル。」

魔法を使わない決闘者^{デュエリスト}に、ペンデュラムを使えないエクシーズ使い。参加したと

ころで結果は見えている」

「随分はつきり言うんだね。理由を聞いてもいいかな？」

「この次元の決闘者^{デュエリスト}は、スタンダードの連中とは違う。どの連中も強いわけではないが、決して弱くはない。スタンディングならいざ知らず、LDSがライディング・デュエルを挑むなど自殺行為だ」

「意外だね。心配してくれてるのかい？」

「寝言は寝て言ったらどうだ」

「はは、ごめんごめん。でももう登録しちゃったからね。それに、今のを聞いてちょっとワクワクしてきたよ」

デニス は D・ホイールに跨り、ヘルメットを装着する。

デッキをセットし画面を操作すると、D ホイールは走行モードに変形する。

「……うん、行けそうだ。どう？ 権ちゃん」

「ぬう………まあ、サマになってはいるが」

「そっか、よかった。じゃあ二人共、客席でしっかり僕を応援してね！」

ゲートが開き、デニスは意気揚々と D・ホイールを駆る。

別席からはギャラガーのアナウンスが響き、それに合わせてデニスがパフォーマンスを披露した。

奇想天外なその振る舞いに、観客たちは一気に吞まれていく。

——かくして、スターがまた一人。

この小さなスタジアムにて誕生した。

遊戯王はアニメとタッグフォースぐらいでしか知らないの、ぶっちゃけ【RR】と【Em】は全く書けません。TFSPに【RR】は三種類しかいませんし、【Em】に至ってはゼロですから。

「かませになる融合モンスター」を出したかったので、《有翼幻獣キマイラ》を無理矢理出張させました。

榊遊矢、アクセラレーション！

『デュエルが開始されます、デュエルが開始されます。一般車両は直ちに退避してください』

(ネタバレ)

注意…スピードスペルが登場します。

《スピード・ワールド・ネオ》についてオリジナルルールを生やしました。

雲一つない快晴の空の下。不動遊星と榊遊矢は鬱陶しいくらいの陽光を浴びつつ、Dホイールに跨っていた。

共に色は赤。片方は長年使い込まれているらしく、所々小さな傷が目立つ。修理された痕もいくつか残っており、持ち主に大切に扱われていることが読み取れる。対してもう片方——遊矢が乗っているD・ホイールは傷一つない新品。遊星自身の手で製作されたからか、形状は似通っている。

とはいえ遊矢の方は、倉庫の奥で眠っていたものを引っ張り出してきただけだ。毎日ハイウエイを走っている他のDホイールに比べるとやや古い。

しかしその中身は別だ。この二車には、新型のあるシステムが組み込まれている。

「遊矢、調子はどうだ」

「はい……なんとか」

遊矢はデッキをDホイールにセットし、ディスプレイを操作する。

Dホイールが変形し、デュエルモードに移行。人工ボイスが遊矢のDホイールから発せられる。

『——デュエルモードON。オートパイロット、スタンバイ』

無事起動したことを確認し、遊星もまたデュエルモードに移行させる。

「遊矢はライディング・デュエルは初めてだったな？」

「はい。……ここまで来て今更ですけど、本当にこれでデュエルができるんですか？」

「ああ。使用するフィールド魔法は《スピード・ワールド・ネオ》。《スピード・ワールド2》なら専用の免許が必要になるんだが、オートパイロットのこれは必要ない

らしい。最高速度も大幅に制限されて、何より“転倒しないこと”が重視される」
「そうなんですか。いえ、ですけど……」

遊矢は不安げに自分のDホイールを見つめる。

当たり前だが、十四歳である遊矢はDホイールに乗ったことがない。当然バイクもない。本人的に二輪と言えば自転車なのだが、流石にあれとは速さの次元が違う。不安になるのも仕方ないだろう。

「初めては誰にでもある。少しずつ慣れていけばいい」

遊星はヘルメットを被った後、出来るだけ穏やかに、遊矢に呼び掛ける。

「好きなタイミングで始めてくれ。俺は後から続く」

「……はい」

遊矢もまた、遊星に習ってヘルメットを被った。

強烈な日差しとライディングスーツ。全身に熱を感じながらも、思考をクリアにする。

「……」

深呼吸の後、遊矢は愛用のゴーグルをかけ、走る先を見つめた。

道はどこまでも続いていて果てがない。邪魔な障害物もなく、遊矢と遊星以外の走行车もない。

……自由の象徴。ふと、そんな言葉が浮かんだ。

ネオ童実野シティ。街の規模からして、総人口は故郷である舞網市と同等……いや、それ以上だろう。

にも関わらず、道は拓けている。ここに住んでいる誰もが、思い思いに生きている。

遊矢はただ、漠然と感じる。

——大きな、と。

具体的に何が、と聞かれたら返答に困る。

答えは「何もかも」だからだ。

D・ホイールに怖気づく自分など、なんと小さいことか。

「——よし」

迷いが消える。

肺に溜まった空気を吐き出し、思考をクリアに。

もう一度走る先を見据え、遊矢はハンドルを握り締める。

「行きます！」

アクセルを踏み、エンジンを鳴らし、遊矢は走り出した。

「っ——！」

経験のない風の抵抗が遊矢の全身を襲う。

アクション・デュエルでモンスターに乗るのはワケが違う。

モンスター独特の揺れはない。しかし速度は段違いだ。圧倒的な速さで流れていく景色。そして、固まった空間を切り裂くかのように疾走する己自身。

そのえも言われぬ感覚に、遊矢は酔う。恐怖とスリルが絶妙に絡み合い、クリアになったはずの思考は一気に沸騰する。

遅れて遊星が後ろに続く。

両者は縦に並び、ディスプレイを操作。

——瞬間、世界は塗り替えられる。

フィールド魔法《スピード・ワールド・ネオ》。

エンタメを志す少年は、新たな世界へと足を踏み入れた。

「ライディング・デュエル、アクセラレーション！」



時間は少し遡る。

ランサーズの四人が不動遊星を訪れ早二日。遊星、遊矢、零羅の三人は、いつも
のガレージで留守番をしていた。

セレナと沢渡は柊柚子・ランサーズの搜索、強い決闘者^{デュエリスト}の聞き込み……そして街
歩き。

箇条書きにすると働きの者に聞こえてしまうが、実際は搜索二割、聞き込み二割、
そして街歩き六割といったところである。

というのも、前者二つは既に目星がついているからだ。柊柚子に関してはセキュー
リティに探してもらっているし、何よりフレンドシップ・カップがあるため問題は
無い。ならば、遊び呆けてしまうのも致し方ないだろう。

遊星は専用のケーブルでパソコンとDホイルを繋ぎ、あるプログラム——《ス
ピード・ワールド・ネオ》をインストールしている。

遊矢はテレビを借り、以前牛尾が持ってきた“ジャック・アトラス”のDVDを
眺めている。

エンターテイメント。ジャックのお決まりの台詞となっているこの言葉が彼には
響いたらしい。

人見知りの激しい性格をしている零羅は、細かく気に掛けてくれる遊矢に付きつ
きりだ。従って零羅もまた“ジャック・アトラス”のDVDを視聴していた。

各々の時間を思うまま過ごすその光景は、まさに平和そのもの。

しかしその平穏は、ある人物の来訪により崩れ去る。

「邪魔をするぞ、遊星！」

「「!？」」

気持ちが良いくらい豪快にガレージの入口が開かれた。

三人はそれぞれ驚く。

集中していた遊星は突然のその大きな音に。残りの二人はその人物の正体に。

「……ジャックか」

——ジャック・アトラス。

かつてネオ童実野シティに君臨した決闘王、デュエルキングその人だった。

遊矢と零羅は、何が何だか分からないといった体で硬直している。

無理もない。今まさにテレビに映っているはずの人物が、自分達の目の前に現れたのだから。

「お前はいつも突然だな。いつここに？」

「先程この街に着いたところだ。早速で悪いが、頼めるか？」

「ああ、構わない。遊矢、少し席を外す。用事があったら呼んでくれ」

「あ……はい」

狼狽える遊矢。輪にかけて沈黙する零羅。

しかし遊星の態度はいつも通りである。

「ホイール・オブ・フォーチュンの整備か。ジャックの立場なら、専用の整備士が

何人もいるんじゃないのか？」

「確かにいるが、最も信頼できるのはお前の腕だからな。といっても、半分はファンサービスみたいなものだ」

「そうか。まあ、俺としても願ったり叶ったりだ」

雑談を交えつつ、遊星とジャックはガレージを出る。

今日は天気もいい。気分転換も兼ねて、Dホイールの整備は外でやるのだろう。世界で活躍するDホイーラー、ジャック・アトラス。この街の人間にとってその男はヒーローそのものの。

ヒーローとは一種の偶像。偶像とは理想の権化。故にそれは、この世の何よりも美しい。

だからこそ手が届かないのだ。どんなに美しい“理想”も、手が届いてしまえば“現実”に堕ちる。

……それほどの存在が目の前にいて尚、遊星は普段と変わらない。

「……本当に、仲間なんだなあ」

多くの人やファンにとって、ジャック・アトラスとは理想だ。

輝いて見える反面、決して手が届かない。目指すべき目標として、常にこちらに背を向けている存在。

しかし遊星にとってジャック・アトラスとは現実であり、仲間だ。

手を伸ばせば確実に届く。いつでも抜くことができ、いつ抜かれてもおかしくない好敵手なのだ。

「……ジャック・アトラス」

「零羅？」

零羅はぬいぐるみを抱えたまま、弱々しくテレビを指す。

停止し忘れていたからか、映像はまだ続いている。

テレビの中のジャック・アトラスは、特徴的な白のDホイールに乗り、天高く指を突き上げ声を張り上げる。

—— “キングは一人、このオレだ”

—— “キングのデュエルは、エンターテインメントでなければならない”

「エンターテインメント。エンタメ……か」

遊矢がDVDを食い入るように見ていたのは、この発言が気にかかったからだ。

実際ジャックのデュエルは、会場を何度も沸かせていた。

「……零羅」

遊矢は零羅の身長に合わせてしゃがみ、話しかける。

「俺、ちょっと出てくるよ。少しだけ一人にしちゃうけど、いいか？」

「……………」

答えはない。

けれど小さく……ほんの小さくだが、零羅は頷いた。

「っ……ありがとう、零羅！」

何に對しての“ありがとう”なのか。

わがままを許してくれたことに對してか。それとも、ようやく返事をしてくれたことに對してか。

……おそらくはどちらもだろう。

遊矢は零羅なりの返事を確認した後、ガレージの外へ飛び出した。

「——エキシビション・マッチ？」

遊星はDホイール“ホイール・オブ・フォーチュン”の整備点検をしながら、ジャックの言った言葉を訊き返す。

「ああ。フレンドシップ・カップは、キングであるこのオレとのエキシビション・マッチで幕を上げるらしい。年に一度の祭典だ、出来るだけ派手に盛り上げたいのだろう」

「……」

ズズ、と飲み物をすすする音。

遊星は聞こえないフリをして作業を続ける。

「そうか。確かに、使用するフィールド魔法は《スピード・ワールド・ネオ》。アピールも兼ねてるんだろうな。

それで、その相手を俺に頼みたいと？」

「そういうことだ。——フツ」

「……」

ジャックの謎の笑み。遊星は手を止めない。いつものことだからだ。

「どうして俺を選んだんだ？」

「並のDホイーラーにオレの相手は務まらんからな。それに、他に手応えのあるヤツも思いつかん。」

……ん、もうなくなつたか。ブルーアイズ・マウンテン、おかわりだ！」

ジャックは空になったカップを置き、追加注文を頼んだ。

「ブルーアイズ・マウンテン」とは、超高級なコーヒーのことである。値段は一杯三千円ナリ。

……その光景、実に異様。

遊星はDホイールの点検を行っている。が、何も喫茶店の前でやっているわけではない。遊星にも一応の常識はある。

逆なのだ。遊星が喫茶店の前で作業しているのではなく、ジャックが店員にコーヒーを用意させている。

たった一杯の、三千円のコーヒーを、わざわざ噴水広場の向こうから。

「あー……この人、本当にキングなんだなあ」

そんなことを漠然と思う遊矢であった。

思い描いていた理想が崩れた気がする遊矢でもあった。

そして店員も店員でヒドイ。

ジャックの後ろに付き添い、おかわりと聞けば本当におかわりを用意してくるのだから。

完全にジャック専属のメイド気取りである。

「はっ——そうか。これが……これこそが、カリスマの成せるワザ。究極の精神汚染。即ち、エンタメの局地——！」

「違うぞ遊矢、惑わされるな」

「あっ、はい」

ちなみに、ジャックのこの振る舞いはいつものことである。

「遊星、この子供は誰だ。他にもう一人いた気もするが」

「紳遊矢。もう一人の子は赤馬零羅だ。今はあのガレージで居候させている」

「ガレージか。そういうえば、どうしてお前は相も変わらずあの部屋を使っている？ その気になればもっといい場所に住めるだろうに」

「なんだかんだ言っただけであそこが一番落ち着くんだけ。俺に豪華な暮らしは似合わない」

い。それに、この場所だからこそできることもある。

……よし、いいぞジャック」

作業を一通り終え、遊星は立ち上がる。

「速いな。もう終わったのか」

「特に異常は見当たらなかったからな。だが、外装は以前より小さな傷が目立つ。もう少し優しく扱ったらどうだ」

「許せ、名譽の負傷というやつだ。おそらく、お前とのデュエルでまた傷が増えることになるだろうな」

「エキシビション・マッチか……ん?」

「?」

遊星はちらりと遊矢を見やる。

しばらくして、遊星は意味深に微笑んだ後。

——とんでもないことを提案した。

「ジャック。エキシビション・マッチの件だが、遊矢にやってもらおうというのはどうだ?」

「何？」

「えっ!？」

世間話のような軽い口調だが、遊矢本人としてはただごとではない。

エキシビション・マッチ。フレンドシップ・カップ開催と同時に開かれる模擬戦。戦績には一切関与されないが、祭典の開幕戦としてそれ相応の期待が集まる。

「ちょっと待ってください！ どうして俺がその大会に……それもエキシビションで——ジャック・アトラスと」

「君達の目的は強い決闘者を探すことだったろう？ それに、エキシビションに参加すれば自然と君の顔も広まる。柚子って子も探しやすくなるし、いい事づくめだと思ったんだが」

「それは……確かに」

「何より、この一戦は特に注目を浴びる。エンタメを目指しているのならいい練習になるだろう」

「エンタメ……だと？」

いつかカメラの前で言ったその言葉に、ジャックが反応する。

「ああ。前にDVDを見せてからお前に興味を持ったらしくてな。それ以来、彼なりに“ジャック・アトラス”を研究している」

「ちょっと！　そこまで言う必要ないでしょう！」

「フン。研究された程度で負けるようならキングは名乗れん。それで、他にはなんだ？　遊矢とか言ったな。お前が俺との対戦でそいつを勧める理由は、まさかそれだけじゃないだろう？」

「勿論だ。デュエルに関しても遊矢は負けていない。勝敗はともかく、確実にお前を驚かせるだろう」

「――ほう」

「っ……！」

ジャックは遊矢を観察する。

榊遊矢がどれほどの決闘者デュエリストなのか、彼なりに測っているのだ。

ぱっと見た感じ、そこまで強い印象は受けない。しかし、不動遊星ともあろう男が自ら勧めた男。

ならば“何かある”。ジャックはそう感じ取っていた。

「……仕方あるまい。お前がそこまで言うならよかろう。榊遊矢、貴様の挑戦を受けてやる」



そんなこんなで、二人はこうしてD・ホイールに乗っている。

零羅は外出中の二人が帰ってきてても問題ないように、ガレージのテレビを通して見学している。

ジャックはD・ホイールの点検が終わった後、早速それに乗ってどこかへ去っていった。遊矢の戦術を見ないようにするためだろう。

「……けど、まさかあんなことを言う人だったなんて」

先程の発言を思い返し、遊星に聞こえないように一人で愚痴る。

遊矢自身、“不動遊星”は大人しい人だと思っていた。ジャック・アトラスと対戦させる、なんて大胆な提案をする人だとは思わなかったのだ。

けれど思い返せば、彼の提案は遊矢にとって有難いことだった。

——ジャック・アトラス。

成り行きとはいえ、彼と対戦できるのはまたとないチャンス。

他次元だからという理由もあるが、何しろ相手は彼と同じエンタメを志す決闘者^{デュエリスト}。

言ってみれば先輩だ。

どこまで自分の力が通用するのか、遊矢としても試したいのだ。

……まずは、慣れること。

今の榊遊矢とジャック・アトラスが決闘^{デュエル}をしても勝ち目はゼロ。万に一つすらありはしない。

なにせ立っている土俵が違うのだから。

だからこのデュエルで、ライディング・デュエルの経験を積む。それが遊矢の第

一目的。

「行きます、俺のターン！」

遊矢

LP:4000

SPC:1

遊星

LP:4000

SPC:1

遊矢はD・ホイールから片手を離し、バランスを取る。

現在展開されている魔法は《スピード・ワールド・ネオ》。オートパイロット機能を搭載したフィールド魔法。

とはいっても、片手でバランスを取ることとは容易ではない。アクション・デュエルの経験がある遊矢だからこそ対応できるのだ。

「よし。俺は《エンタメイトENシルバー・クロウ》を召喚！」

《エンタメイトENシルバー・クロウ》

星4\閻属性\獣族\攻1800\守700

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

銀色の狼と伏せカードを展開し、遊矢のターンが終了。

召喚されたシルバー・クロウは遊矢の隣を並走している。

ターンプレイヤーが変わり、次は遊星のターン。

「俺のターン!」

遊矢

LP:4000

SPC:2

遊星

LP:4000

SPC:2

「わっ……っ」と!

スピードカウンター

SPCはお互いのスタンバイフェイズ毎に一つずつ増えていく。

つまり、デュエルが進むほどD・ホイールの速度も上がっていくのだ。

しかし遊星は、スピードの中でも容易に片手を離し、手札から二体のモンスターを選択する。

「手札のモンスターカードを一枚墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚!」

《クイック・シンクロン》

星5／風属性／機械族／攻700／守1400

「そして、墓地に送った《レベル・ステイラー》の効果発動！ 自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを一つ下げることにより、墓地から特殊召喚！」

《クイック・シンクロン》

星5 ↓ 星4

《レベル・ステイラー》

星1／闇属性／昆虫族／攻600／守0

「レベル1の《レベル・ステイラー》に、レベル4となった《クイック・シンクロン》をチューニング！」

集いし星が新たな力呼び起こす。光射す道となれ！ シンクロ召喚！ いで

よ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》

星5／闇属性／戦士族／攻2300／守1300

——《ジャンク・ウォリアー》。以前のデュエルでも姿を見せた瓦礫の戦士。

しかし、遊星の場にレベル2以下のモンスターはいない。攻撃力はそのままだ。

「レベル・ステイラー」の効果を再び発動！ 《ジャンク・ウォリアー》のレベルを1下げ、墓地から特殊召喚！」

《ジャンク・ウォリアー》

星5 ↓ 星4

《レベル・ステイラー》

星1《闇属性》昆虫族《攻600/守0

「バトル！ 《ジャンク・ウォリアー》で《エンタメイトシルバー・クロウ》を攻撃！ スクラップ・フィスト！」

《ジャンク・ウォリアー》の拳が唸りを上げ、シルバー・クロウが破壊された。その衝撃は当然遊矢自身にも襲い来る。

遊矢

LP:4000 ↓ LP:3500

「更に《レベル・ステイラー》、遊矢にダイレクトアタック！」

遊矢

LP:3500 ↓ LP:2900

「ぐっ……まだまだ！」

猛攻を耐えつつ、遊矢はD・ホイールを走らせる。

勝機はまだ尽きてはいない。《レベル・ステイラー》の攻撃力はわずか600。これを利用すれば大ダメージを与えられる。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

遊矢

LP：2900

SPC：3

遊星

LP：4000

SPC：3

「——来た！」

ドローしたカードは《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》。

攻撃力は2500を誇り、戦闘で与えるダメージを二倍にする効果を持っている。

これにてピースは揃った。

遊矢は一転、攻勢に入る。彼の十八番である“ペンデュラム召喚”を用いて。

「俺は、スケール1の《星読みの魔術師》と、スケール8の《時読みの魔術師》で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

ペンデュラム召喚は、上級モンスターを一度に大量召喚する新たな召喚法。

しかし、その真価は別のところにある。

ペンデュラム

「モンスターはフィールドで破壊された時、墓地にはいかず表側表示でエクストラデッキに行く。そしてペンデュラム召喚は、手札だけでなくエクストラデッキにも対応している。」

つまり、除外するか、デッキに戻すか、何らかの手段で墓地に送られない限り、何度でもフィールドに特殊召喚されるのだ。

遊矢のエクストラデッキには、先程破壊された《エンタメイトシルバー・クロウ》。この

ターン、遊矢は最低でも二体以上のモンスターを召喚できる。

ただし——あくまでもこれが、通常のデュエルだったらの話だが。

D・ホイールの速度が落ち、同時にデュエル・ディスクから人工ボイスが発せ

られる。

『エラーが発生しました』

「え……？」

遊矢の画面には赤い文字でエラーが表示され、デュエルの続行が不可能なことを知らせている。

「エ、エラー!? そんな、どうして……!」

「どうかしたのか？」

「わかりません。なんかエラーが発生したみたいで……」

「エラー……? いや、しかし……」

遊星は遊矢のD・ホイールを見回す。

見る限りおかしいところは見当たらない。D・ホイール自体は乗り物として機能している。

「……ん？」

しばらくして遊星はある一点……このターンの最初とは異なる箇所を見つけた。

それはS P C。スピードカウンター。遊星のカウンターは3。スピードスペルを使っていないため

一つも消費していない。しかし、遊矢のカウンターは1に減っていた。

遊矢

SPC::3 ↓ SPC::1

「……遊矢。ペンデユラム モンスターでスケールをセットする時、どのような処理が行われ

るんだ？」

「処理？」

「ああ。モンスターの召喚として扱うのか、魔法マジックの発動として扱うのか、それとも罠トラップか。あるいは、それ以外の別の何かなのか？」

「ええつと……一応は、永続魔法の発動として処理されます」

「それだ。遊矢、セットしたPモンスターを一体、手札に戻してみてくれ」

「？ はい」

遊矢はセットした魔術師——《星読みの魔術師》を手札に戻した。

途端、画面は正常に戻り、再びフィールドの状況がモニタリングされる。

「戻った……？ でも、どうして？」

「これが《スピード・ワールド・ネオ》の新しい効果だ。スピードスペル以外の魔

法を使う場合、自分のSPCスピードカウンターを一つ消費しなければならない。Pモンスターの

セッティングは、要するに魔法カードマジックを二枚続けて発動するということだ。

つまり今の遊矢は、SPCスピードカウンターを二つ使って《時読みの魔術師》だけをセッティン

グしたことになる。ペンデュラム召喚をしたいなら、もう一ターン待つてカウンターを貯めないといけない」

「なるほど……あれ？ ということは、もしかして……」

カクカクと、遊矢はロボットのよう^にに遊星の方を見る。

遊星は心底言いづらそうに、その疑問に答えた。

「……はつきり言ってしまうと、ペンデュラム召喚はライディング・デュエルに向いていない。更に言ってしまうと、それを得意とする君や沢渡は、ライディング・デュエルに向いていない」

「そんなあ!? 俺、確かジャック・アトラスとデュエルするんですよね!?」

「すまない。Pモンスターペンデュラムについて把握していなかった俺のミスだ」

「うう……」

遊矢はがっくり項垂れる。

……今更対戦相手の変更はできないだろう。

ジャックは既に立ち去ったのだ。おそらく今頃、運営相手にゴリ押ししているに違いない。

榊遊矢という無名の決闘者^{デュエリスト}がオレの相手になる、と。

「……とりあえず、このデュエルは完結させよう。どうする遊矢。一ターン待ってもいいが」

「……！」

申し訳無さから出た温情。しかし、それをどう受け取るかは相手次第。

遊矢にとってはそれが“余裕”に見えた。

遊星は遊矢のことを“ペンデュラム召喚の使い手”と認識している。それ自体は間違っていない。

——だが、それだけではない。

悔しい。そう思った遊矢は、意地を張って答えた。

「その必要はありません」

「遊矢？」

「確かに、この状況でペンデュラムは使えません。でも、俺だってランサーズの一員だ。それだけで諦めるつもりはないし、手を抜く必要ありません」

遊矢は自分の手札、そしてセットされたカードを確認する。

——まだ、手は尽きていない。

「……そうか。いいだろう、ならば手は抜かない。デュエルを再開する」

遊星はアクセルを踏み、遊矢の前を先行する。

追う者と追われる者。即ち弱者と強者。

いつだって追う者には、強者に食らいつく権利がある。

「永続罫^{トラップ}、《連成する振動》を発動！ 一ターンに一度、自分の^{ペンデュラム}「ゾーンのモンスターを破壊し、カードを一枚ドローできる！」

この効果により《時読みの魔術師》を破壊し、一枚ドロー！」「
宙に浮く《時読みの魔術師》が消滅し、遊矢はカードを引く。

現在の遊矢の手札は三枚。そのうち二体は^{ペンデュラム}「モンスター。このドロー次第で
勝敗が決まる。」

「……………」

遊矢は引いたカードを恐る恐る確認した。

——《エンタメイトENデイスカバー・ヒッポ》。

遊矢が愛用するカバのデュエルEN。愛らしい外見をしているが、効果は使い道が限られているため、本気の決闘で使用されることは少ない。

けれど今は違う。このカードこそがキーカード。遊矢の逆転の一手となる。

「よし！ 行きます、遊星さん！」

「ああ、来い！」

遊矢の顔に笑みが戻り、釣られて遊星もまた微笑む。

「まず俺は《エンタメイトENデイスカバー・ヒッポ》を召喚！」

《エンタメイトENデイスカバー・ヒッポ》

星3／地属性／獣族／攻800／守800

「エンタメイトENの召喚に成功した時、このカードは特殊召喚することができる！ 来てく

れ、《エンタメイトENヘルプリンセス》！」

《エンタメイトENヘルプリンセス》

星4／闇属性／戦士族／攻1200／守1200

デイスカバー・ヒッポはドタドタと遊矢の隣を走り、ヘルプリンセスが後ろに続く。

これがアクション・デュエルだったらなあ、と遊矢は心の中で思う。

「壁モンスターを召喚したか。だが、それでは俺は止められないぞ」

「いいえ。彼らこそがこの状況をひっくり返すキーカードです！

ヒッポの効果発動！ このカードの召喚に成功したターン、通常召喚に加えてもう一度、自分はレベル7以上のモンスターをアドバンス召喚できる！」

「何っ！」

「ヘルプリンセスとヒッポをリリース！ 輝きと共に現れる！ 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星7〔闇属性〕ドラゴン族〔攻2500守2000〕

二色の眼を輝かせ、神遊矢のエースモンスターが降臨した。

「バトルだ！ オッドアイズで《レベル・ステイラー》を攻撃！ //

トライク・バースト”！」

二体の攻撃力の差は1900。《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の効果を加味すれば、与えるダメージは3800。

一撃死には届かないが、それでも十分凶悪なダメージを与えられる。
ワンショットキル

けれど遊矢は知らない。不動遊星の決闘を。
デュエル

——“この一撃で決まる”

それを何度も躲し、反撃を伺うのが彼のスタイルだ。

「罠発動、《ガード・ブロック》！ このカードの効果により、戦闘ダメージを一度だけ0にする」

ブレス攻撃を受けて《レベル・ステイラー》が焼き尽くされるが、遊星にまでダメージは届かない。

「《ガード・ブロック》の二つ目の効果により、カードを一枚ドロウ」

「っ——やっぱり、そう簡単には行かないか。ターンエンド」

「俺のターン、ドロウ」

遊矢

LP:2900

SPC::2

遊星

LP::4000

SPC::4

「遊矢。一つ手本を見せよう」

「手本？」

「ああ。スビードカウンターSPCの使い方だ。

まずは永続罠^{トラップ}、《エンジェル・リフト》発動。これにより、《レベル・ステイラー》を特殊召喚！」

《レベル・ステイラー》

星1《闇属性》昆虫族《攻600守0

「そしてチューナーモンスター、《ニトロ・シンクロン》を召喚！」

《ニトロ・シンクロン》

星2《炎属性》機械族《攻300守100

「チューナーモンスター！ ということは、またシンクロ!？」

「行くぞ！ レベル4の《ジャンク・ウォリアー》と、レベル1の《レベル・ステイラー》に、レベル2の《ニトロ・シンクロン》をチューニング！

集いし思いがここに新たな力となる。光射す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

《ニトロ・ウォリアー》

星7炎属性戦士族攻2800守1800

新たなシンクロモンスターが遊星の場に現れる。

ニトロの名を冠するだけあって見た目は緑一色。加えて、悪魔のような強面が特徴だ。

「《ニトロ・シンクロン》の効果により、カードを一枚ドロー。

更に《SP—スピード・ストーム》を発動！」

「スピードスペル。ライディング・デュエルの専用の魔法カード……！」

「そうだ。このカードは自分のSPCが四つ以上ある時、相手に1000ポイントのダメージを与える」

電撃のエフェクトが遊矢を襲い、ライフを削る。

遊矢

LP::2900 ↓ LP::1900

「うっ——くっ！」

「そして、《スピード・ワールド・ネオ》の効果を発動。SPCを四つ取り除き、

手札の^{スピードスベル}SPを一枚公開することで、相手に800ポイントのダメージを与える。

手札のカードは、これだ！」

遊星が公開したのは^{スピードスベル}《SP—エンジェル・バトン》。SPCを取り除くことで

カードをドロウできるスピードスベル。

よって、遊矢のD・ホイールに再び衝撃が奔る。

遊星

SPC::4 ↓ SPC::0

遊矢

LP::1900 ↓ LP::1100

「っ——そんな、一気にライフが」

「《ニトロ・ウォリアー》の効果発動！

^{マジック}魔法カードを発動した自分のターン、一

度だけ攻撃力を1000ポイントアップする！」

《ニトロ・ウォリアー》

攻2800 ↓ 攻3800

「攻撃力、3800!？」

「バトル! 《ニトロ・ウォリアー》で《オッドアイズ・ペンデラム・ドラゴン》を攻撃! “ダイナマイト・ナックル”!」

《ジャンク・ウォリアー》を上回る巨大な拳を受け、《オッドアイズ・ペンデラム・ドラゴン》は粉碎された。

攻撃力の差、1300が遊矢のライフから削られる。

遊矢

LP:1100 ↓ LP:0

「わっ……!」

スモークが吹き出し、画面に“敗北^{LOSE}”の文字が表示される。

ライフがゼロになった瞬間、遊矢のD・ホイールは緩やかに停止した。



「大丈夫か、遊矢」

しばらく走った後Uターンし、遊星が遊矢の元へ戻ってきた。

遊矢は自分のD・ホイールを見つめつつ言う。

「はい。すごいですねこのD・ホイール。こんなにゆっくり止まってくれるなんて」

「安全性重視の設計だからな。最高速度は遅いが、《スピード・ワールド・ネオ》自体が全体的に遅めだから、問題ないと思ってこれを選んだんだ」

「あれで遅いんですか？」

「経験を積みばそのうち慣れるさ。とは言っても、その恐怖心は大切だから、なくさないようにな。あまり慣れすぎて恐怖がなくなると、事故を起こして大怪我することになる。昔のあいつのように」

「あいつ……?」

「ジャックだ」

「そ……そうなんですか。とてもそうは思えませんが」

半信半疑で遊矢は返す。

世界を舞台に活躍するあの男が、そんな初步的な事故を起こすとは思えなかったからだ。

「君はキングとしてのあいつしか知らないからな。実際はそうカッコイイものでもない。昼間のジャックを見ただろう？ あれが素だ。あいつは少々常識が欠落している」

「……ああ」

二人は昼間のジャック・アトラスを思い出す。

自分が世界の中心にいるような、“傲岸不遜”な振る舞い。いや、あの場合は“厚顔無恥”だろうか。

どちらにせよ、確かに王キングと言えば王キングではある。悪い意味で。

「だが、デュエルの腕は本物だ。慣れていないハンデがあるとしても、このままでは一方的にやられるだけだろう。」

とりあえず、今日は一旦帰って反省会だ。そろそろ他の皆も帰ってくるだろうし

な」

「……あの、遊星さん」

「ん？」

走り出そうとした遊星を遊矢は呼び止める。

「俺……運転できません」

「……………」

待て、じゃあさっきまでのデュエルは？」

「オートパイロットでしたから……」

「そうか……そういえばそうだったな」

「……ごめんなさい」

「気にするな。……なら、歩いて帰るしかないな」

最初は遊矢にダーク・リベリオンを使わせる予定だったけど、魔が差してヒッポ

を使わせなくなった。

「通常の魔法を使用する時、SPCを二つ消費」にした理由は、DSのゲームがそんな感じだった……ような気がしたからです。あとサーチ系、ドロー系は四つだった気がする。(うろ覚え)

軽いように見えて割と重いんですよこれ。とりあえず【HERO】は確実に弱体化する。あとは【魔術師】とかも。

ARCVのジャックと5Dsのジャックの一番違いは「親しみやすさ」だと個人的に思う。

つまり、とりあえずアホっぽいことさせとけば5Dsジャックとなるのだ！(極論)

エキシビション・マッチ 嵐の直前

遊矢「カードは貰った」(ネタバレ)

注意…デュエルしません。

今回は繋ぎの回。各陣営の話をちよつとずつ。

このネオ童実野シティでは、ライディング・デュエルが盛んである。それは専用のコースが複数作られていることから察せるだろう。

しかし、誰も彼もがライディング・デュエルができるわけではない。バイク型デュエルディスク“D・ホイール”は、通常のバイクよりも重くて大きい。積んでいるエンジンの馬力も相応に強力なため、最高速度は通常のバイクを上回る。そのため天下の公道でライディング・デュエルを楽しむには、専用の免許が必要となるのだ。

それを解消したのが《スピード・ワールド・ネオ》。通常の《スピード・ワール

ド、《スピード・ワールド2》よりも速度を抑え、万が一転倒しても軽傷で済むように調整されたシステム。ライディング・デュエル初心者用に《スピードスベル》魔法が使えるのも特徴だ。

そして、システムの完成と同時に開かれたのがこの「フレンドシップ・カップ」。歴史はまだ浅いが、誰でもライディング・デュエルが楽しめる大会として有名になりつつある。

「ライディング・デュエル。そしてフレンドシップ・カップ……なるほど、実に興味深い催しです」

赤いマフラーを首に巻いた男は、眼下の景色に視線を移す。

中央にはスタンディング・デュエル用のフィールドが並び、その周囲をライディング・デュエル用のコースが囲んでいる。ネオ童実野シティの人間にとっては当たり前前のモノだが、舞網市から来たその「男」にとっては異様な舞台だった。

客席には観客と思しき人々がぎっちり敷き詰められている。遠くから見ても暑苦しく感じてしまうほどに。

しかし、上空には球体状の巨大なスクリーンがある。あれならば角度を問わずど

ここからでも等しく確認できるだろう。

そして、スタジアムの特別席。ネオ童実野シティの市長、及びその関係者しか立てない場所に、“赤馬零児”はいた。

「街一つをそのまま舞台にしてしまうほどの規模。これならば専用の塾がないにも関わらず、一般人があればどの腕を持つのも領けます。」

いや……真に驚嘆すべきは、それを可能にしてしまうほどの貴方の手腕でしょうか。イエーガー市長殿？」

「はひっ!？」

声をかけられた人物——イエーガーは肩をびくりとさせて顔をあげる。

「……こほん、失礼。」

確かにこの街のライディング・デュエルは世界規模ではありますが、何も私一人の力で運営しているのではございません。いえ、寧ろ私一人の力など微々たるもの。この街の人々が互いに協力し合うことで、ようやく機能しているのです」

「協力……ですか」

「はい。少々青い言い方をさせていただきますと……絆、ということでしょうか。」

いやはや、この歳にもなってこんな言葉を使うのは、少々気恥ずかしいですね」

「いえ、いい言葉だと思います。繋がりには成長と変化を促し、人を強くする。私はそう感じています」

「そう仰ってくださいると私も嬉しく思います」

そう言って、イエーガーもまたスタジアムの様子を見た。

現在、スクリーンは「フрендシップ・カップ」の開催、そしてエキシビション・マッチの詳細を告知している。

「ジャック・アトラス」の対戦相手は「榊遊矢」。以前聞いた話によると、彼は貴方の身内ということですが？」

「ええ。その認識で構いません」

——「ランサーズ」。融合次元からの侵略に備えて結成された決闘者のチーム。赤馬零児、そして今からジャック・アトラスと対戦する榊遊矢も、そのメンバーの一人である。

他次元からの侵略者。本来なら鼻で笑い飛ばす程度の与太話。しかしイエーガーは、その話を真摯に受け止めた。

彼自身、全てを信じているわけではない。が、全てを否定することもできない。その理由は、神遊矢の異常性が物語っている。

「確か、ペンデュラム召喚」と言いましたね。この次元にはない新たな召喚法を彼は行使することですが」

「はい、その通りです。信じられませんか？」

「……ええ。残念ながら」

イエーガーは肯定できなかった。

この街……この世界には存在しない新たな召喚法。それについてはイエーガー自身も非常に興味深く思っている。

——だが。それを信じてしまえば、他次元に関係する話もまた信じてしまうことになる。

「私は何も、貴方がたを疑っているわけではないのです。貴方からは嘘の色が見えない。おそらく次元侵略の話も本当なのでしょう。」

ですが、それでも私は市長。証拠もないままそんな話を簡単に信じるわけにはいかないのです」

「それは重々承知しています。だからこそ私は、榊遊矢が対戦相手に選ばれて内心ほっとしています。ジャック・アトラスの推薦がなければ、きっと私が彼を推していたでしょう。」

融合次元による侵略。これを無条件で信じろとは言いません。ただ、この一戦でその真贋を見極めていただきたい」

言いたいことを言い終え、赤馬零児は眼鏡を直す。

席では警備員が観客相手に格闘している。

当人達からすれば悲鳴モノかもしれないが、逆に言えばそれだけデュエルに対する関心が強いということ。

市長であるイエーガー、そしてランサーズの長である赤馬零児にとっては、嬉しい悲鳴に他ならなかった。



「ジャック・アトラスの相手は……誰だあいつ。不動遊星じゃないのか」

「なになに……榊遊矢？ 聞いたこともないな。まだ子供みたいだし、大丈夫なのか？」

「知らないのか？ 《スピード・ワールド・ネオ》なら子供でもライディング・デュエルができるんだぜ？」

「そうじゃなくて、ジャックにボコボコにされないかって話」

「……………」

桃色のライダースーツの少女——“柊柚子”は、席を確保した観客たちの雑談を耳にして、あからさまに眉をしかめた。

中央の特殊なスクリーンには、これから行われるエキシビション・マッチの組み合わせが発表されている。

しかし、この街の人々にとってこの組み合わせは不評のようだ。

ジャック・アトラス。かつてこの街にキングとして君臨し、ライディング・デュエルの世界大会『WRGP』では、チーム『5D's』の1stホーラーとして先陣を切った。

そのカリスマ性は相当なものだ。D・ホーラーを志す者なら、その多くが彼

を目標に腕を磨く。

この男に比べれば、確かに櫛遊矢は見劣りする。華やかな栄光も、キングを名乗れるほどの強さも持ち合わせていない。

それでもこの会場の雰囲気は、柊柚子にとっては居心地が悪かった。

「おい柚子。飲み物買ってきたぞー」

「うん」

白いライダースーツの少年が二人分の飲料を手に戻って来た。

柊柚子はそれをひったくり、鬱憤をぶつけるようにストローを啜る。

「……どうしたんだよ。この会場に着いてから色々変だぞ？」

「……別に。なんでもない」

「いや、絶対変だって。明らかに不機嫌というか――」

「ナン・デモ・ナイ！」

「う……」

これ以上詮索するな、と柚子は強烈な視線を送る。

少年は気圧され、曖昧に返事をしながら誤魔化すように飲料を口にした。

「……………」

柚子はもう一度スクリーンに視線を戻す。映っているのはエキシビジョン・マッチの対戦カード。ライダースーツを着たジャックと遊矢。

二人は幼馴染だが、ライダースーツを着た遊矢を見たのはこれが初めてだった。

「……ねえ、ユーゴ」

「ん？」

少年——ユーゴが振り向く。

「ユーゴはこのデュエル……どっちが勝つと思う？」

「どっちって、そりゃジャックだろ。なにせこの街のキングだった男だからな。ちよっと腕が立つ程度じゃ、軽く伸されて終わりだ」

「……やっぱり、ユーゴもそう思うんだ」

「あー……そっか。まあ、柚子からしたらあいつを応援したいよな」

気まずそうにユーゴは視線を逸らす。

彼にとって“ジャック・アトラス”とは理想だ。ネオ童実野シティが統一される前から目標としてきたD・ホーラー。

だからこそ、ユーゴの中では「ジャック・アトラス」は最強の存在である。肩を並べるほどの決闘者——不動遊星やクロウ・ホーガンが相手だったならともかく、自分と同一年程度の少年がジャックを倒すとは微塵も考えていない。

けれど、柚子にとっては全くの逆だ。

いくらジャックがこの街のヒーローであつたとしても。

いくらジャックが強力な決闘者であつたとしても。

彼女の中の優先順位は絶対に揺るがない。

「えっと……まあ、なんだ。とにかく、大丈夫だって！」

「うん」

「だろ？ 俺、あいつのことよく知らないけど、そこそこ強いんだろ？ なら、案外いいところまで行くんじゃないか？」

「うん」

「だよな！ くうー、にしても羨ましいぜ！ 俺とそっくりの顔なのに、俺よりも先にジャックとデュエルできるんだからな！ あの遊矢ってヤツ、すごくラッキ——って、柚子!？」

精一杯のユーゴの話を生返事で流した後、柚子は突然立ち上がった。

彼女の視線はやはり、フィールドに釘付けになっている。

「ユーゴ、飲み物ありがと。ごちそうさま」

「えっ？」

まだ中身が入っている飲料をユーゴに押し付け、柚子は走り出す。

「おい、どこ行くだよ、柚子!？」

「もっと近くに行く!　ここからじゃ、全然見えないから!」

脇目も振らずに、柚子はより中央の席へと駆けていく。

神遊矢。最後に彼を見たのはスタンダード次元。舞網市でのバトルロワイヤル開

幕時。

多くの災難に見舞われ、何度も窮地に陥った。

その度に会いたいと願った。

——その神遊矢が、目と鼻の先にいる。

黙って試合を傍観しているなど、もう彼女には出来なかった。



「対戦相手は遊矢だ?!」

スクリーンに映る遊矢を見て、権現坂昇は驚きの声をあげた。

結局のところ権現坂、デニス、黒咲の三人は、ランサーズの面々と合流することは適わなかった。というのも、地下決闘場デュエルで何度も試合が続いたからだ。

そのため、遊矢と柚子を探す最後のチャンスとして、権現坂はこのエキシビション・マッチに一縷の望みをかけていた。

……結果、一秒とかからず見つけることができたのである。

「あらー……流石は遊矢だね。大会に参加して驚かせようって思ってたんだけど、逆にこっちが驚かされちゃったよ。でも、この組み合わせは期待できそうだね」

デニスは身乗り出してフィールドを覗く。

まだ二人はいない。対戦が始まるのはもう少し後のようだ。

「ジャック・アトラスって地下闘技場のポスターに映ってたあの人でしょ？ 権ちゃん、遊矢とのデュエル、どうなると思う？」

「さあな。ここから先は俺には読めん。個人的には遊矢を応援したいところだが——」

権現坂は会場をさっと見渡す。

観客の多くは、ジャック・アトラスのデュエルを今か今かと待っている。

「……この人気とカリスマ性。どちらが勝ってもおかしくはないだろう」

「ならばその時は、俺がジャック・アトラスを倒すまでだ」

黒いライダースーツを着た男が二人の後ろから現れる。

名前は黒咲隼。地下決闘場にて連勝記録を更新し、ついにシード権を獲得した決闘者。^{デュエリスト}今大会注目のダークホースである。

「黒咲。やはりお前も気になるか」

「ああ。ジャック・アトラスはこの街の英雄だそうだからな。シンクロ次元の強さを測るいい基準になる。まあ——」

黒咲はスクリーンに映っている榊遊矢を一瞥した後、入場門の方を見る。

「俺があの場合にいないことが、不満と言えば不満だがな」

「あはは。その気持ちは少し分かるかな。楽しみなんだけど、ちょっと嫉妬しちゃ

うよね」

うんうん、とデニスが同意する。

“ジャック・アトラスとデュエルがしたい”

この次元の決闘者なら誰もが抱く願望。そしてそれは、どうやらこの二人も例外ではなかったらしい。

唯一人、権現坂は違っていた。彼はひしめく観客席を見て二人に言う。

「そんなことより、俺は柚子を探しに行くぞ。もしこのことを知っていたら、会場のどこかにいるかもしれない」

「あ、そっか。それもそうだね。黒咲はどうする？」

「……どうもしない。それは俺の役割ではない」

話を振られた黒咲はしばし逡巡する素振りを見せたが、きっぱりと断った。

黒咲隼には妹がいる。名前は瑠璃。彼が言うには、柊柚子とそっくりな容姿をした少女らしい。

瑠璃は現在、融合次元の連中に捕らえられている。

彼女を救うのはエクシード次元の人間——わがままが許されるなら、兄である自

分か仲間であるユートであるべきだと考えている。

ならば柊柚子を最初に見つけるべきもまた、スタンダード次元の人間であるべきだろう。

……尤も、なんだかんだ言いつつ協力してしまうのが黒咲隼という男なのだが。この男は恐ろしく目がいい。範囲を限定すれば、権現坂やデニスのように走り回らずとも人探しはできるだろう。



「絶対におかしい」

控え室。

選手が体を休め、次に備えて静かに待機するはずの休憩室にて、沢渡シンゴは不満を爆発させていた。

「フレンドシップ・カップのエキシビジョン・マッチで遊矢が選ばれた。それはいい。」

……いやよくないけど、遊矢だって俺達ランサーズの一員だ。納得はできる。だがな、どうしてその相手がジャック・アトラスなんだ！」

「まだ言ってるのかお前は」

騒ぐ沢渡を、セレナは冷ややかな視線で見つめる。零羅もセレナほどではないが、彼の態度にすっかり呆れている。

五日前……ジャックが遊星のガレージを訪れたあの日からずっとこの調子だ。ライディング・デュエルの練習で遊矢と遊星はガレージを空けることが多かったため、自ずとセレナと零羅が相手をするが多くなっていたのだ。

「そんなにあの男とデュエルがしたいなら、この大会で勝ち残ればいいだけだろう。少なくとも私はそのつもりだ」

「相変わらず分かってねーな、これはそれだけの問題じゃあないんだよ。こんだけのアピールチャンスは滅多にねえ。エンタメるなら絶好の機会だろうが！」

「知らんし興味もない。大体お前如きが相手では、対戦相手のジャック・アトラスにも失礼だ。ヤツはこの次元のキングらしいからな」

「はん、それがどうした。こちとら舞網市市長の息子だぞ！」

「やはり話にならん。せめて市長とやらになってから出直してこい」

「ぐっ、ぬぬぬ——！」

返す言葉が見つからないせいか、沢渡は悔しげに唸りつつセレナを睨みつける。市長の息子とやらがどれだけエライのかは不明だが、“市長の息子”よりも“市長”が上であることは沢渡自身も分かっているらしい。

「……いつも通りだな、三人とも」

二人のやりとりを見つつ遊矢は呟く。沢渡が喚き、セレナが突っ込み、零羅は一步步引いて傍観する。これからフレンジシップ・カップの開幕戦が始まるというのに、彼らは普段通りの彼らでいる。

D・ホイールの最終チェックを終えてきた遊星は、工具箱片手に尋ねる。

「緊張しているのか？」

「……ええ。白状すると、少しだけ。ライディング・デュエルの大会なんて生まれて初めてだし。それに、この観客ですからね」

「そうか」

一見すると淡白な答え。しかし、遊星は笑っていた。

懐かしいのだ。その初々しさが。

二年前に行われた世界大会、WRGP。その初戦、バーサスVSチーム・ユニコーン。

遊矢のように緊張しているD・ホイラーを見ると、遊星はどうしても彼女を思い出す。

「あ。それと、整備ありがとうございます、遊星さん」

「ああ」

遊星のメカニックとしての腕は確かだ。これで少なくともD・ホイールが原因で転倒することはない。

——よって、ここから先は遊矢の戦い。

相手はジャック・アトラス。この街に住む人間なら誰もが知るビッグネーム。緊張するのも無理はない。

「遊矢」

そんな遊矢に、遊星は声をかける。

裏方にできることなど限られている。結局最後に物事が決まるのは、表に立つ人間次第だからだ。

だから。せめてもの慰めとして、彼はお守りを託す。

託されたのは一枚のカード。

進化の可能性を秘めた、小さなピース。

「……遊星さん、これは？」

「今の君達を象徴する絆のカードだ。デッキに入れるかどうかは、君自身が決めてくれ」

「……………」

遊矢は受け取ったカードを確認する。

単体では全く役に立たない。対応するモンスターもないため、入れてもデッキの中で腐るだけだろう。

「大切に使用してもらいます」

——そこまで理解した上で、遊矢はそのカードをデッキに入れた。

お守りとしてわざわざそれを選んだ理由。そして、カードに込められた意味を理解したからだ。

最後に遊星は、いつか彼女に送った言葉を遊矢にも伝える。

「後のことは考えなくていい。初めてのライディング・デュエル、目一杯楽しんでこい」

「はい！」

年相応の元気な返事。緊張は既に吹き飛んだらしい。

遊星はそれを見届け、この部屋から立ち去った。

彼は所詮部外者に過ぎない。遊矢の仲間がいるこの部屋にいても、邪魔なだけだ。「決めたぜ俺は！ バトル・シティが始まったらセレナ、まずお前から倒してやる！ いくつかのリベンジだ、今度は俺が勝つ！」

「断る。せっかく次元を超えてここまで来たのだ。もう少し骨のあるヤツと戦いたい」

「な、成程。ここはシンクロ次元なんだし、確かに一理ある……って、どういう意味だコルァ！」

「……まだやってたのか、二人共」

怒号と挑発の不毛な応酬。それが未だ続いていたことに遊矢は呆れる。

「二人共仲良くしろって。最年少の零羅が困ってるじゃないか」

「俺は（私は）悪くない」

「……はあ」

遊矢は思わずため息をつく。喧嘩（？）が絶えない二人ではあるが、息は驚くほどピツタリだ。

「それより二人共、この会場で赤馬零児を探してくれないか？」

「……兄様？」

遊矢は不安げに見上げる零羅を、安心させるよう優しく撫でる。

兄弟は最も身近な他人だという。遊矢に兄弟はいない。零羅が今感じている寂しさは、彼には一生涯理解できないだろう。

だが、大切な人がいなくなる辛さは痛いほど知っている。

「兄様が……ここにいるの？」

「ああ。これだけ大きな大会なら、会場のどこかにきっといると思う。だからさ、二人共」

「……………」

無言。返事はない。

肯定的に捉えるなら『躊躇っている』

否定的に捉えるなら『イヤダ』

なんと分かり易い二人だろうか。

……以前までなら、ここで終わっていた。

「——はあ」

やがてセレナは沈黙に耐えかね、分かりやすいため息をついた。

彼女なりの抵抗。探したくない、それよりもデュエルが見たいという意味表示。

「仕方ない、これ以上足を引っ張られても迷惑だ。零児を探して押し付けるぞ」

「ありがとう、セレナ。……沢渡？」

「だーっ！ 分かった、分かったよ。探せばいいんだろ探せば！ けど、俺らが

見つけるまで負けるなよ。DVD見る限り、実力はマジみたいだからな」

「何を甘いことを言っている。相手が誰だろうと関係ない。遊矢も決闘者^{デュエリスト}ならば勝

て！」

「……！ ああ！」

沢渡とセレナが激励を送り、控え室を出て行く。

零羅は最後に振り返ったあと、二人に続いて部屋を出て行った。

「……………」

遊矢は不思議な充足感を感じながら、大きく深呼吸する。

繋がりが出来つつある。

それはまだ微かで弱々しく、ふとしたことで切れてしまう細い糸。

けれどもその糸は、時間と共に少しずつ折り重なり、太く大きく成長していく。

——人はそれを、絆と呼ぶんだ。

「榊遊矢さん。榊遊矢さんはいらっしゃいますかー？」

係員の女性が待機中の遊矢に声をかける。

「ここにいます」

「準備が出来ました。スタンバイお願いします」

「はい、分かりました」

遊矢がどんなカード貰ったかはOCGやっていると察せると思う。
で、この後の展開もなんとなく分かっちゃうと思う。

エキシビジョン・マッチ ジャック・アトラス

遊矢「シンクロ召喚！」（ネタバレ）

注意…オリジナル口上とスピードスペル。

S P Cを二つ使うことで通常の魔法が使えます。

ライディング・デュエル専用カードはゲーム版基準。

もし違ってたら……許してください。

エンタメとはなんぞや。そんなことを考えつつ書いてみた。

……いや、正直わかんねーわ。

『会場の皆様、大変長らくお待たせいたしました！ 只今よりライディング・デュエルの祭典、フレンドシップ・カップの開催を、今、ここに宣言するぞォー!!』

「オオオオオオオ——！！！！！」

巨大なリーゼントを生やしたMCがマイク片手に叫び狂う。

超が何個もつきそうなレベルのハイテンションに、観客は更にヒートアップする。

『では、早速行ってみようか！ 今大会最初のデュエル、ジャック・アトラスと

のエキシビション・マッチ！ まずは挑戦者チャレンジャーの入場だー！！』

ゲートから飛び出たのは暖色のD・ホイール。

スピードは控えめであることからライディング・デュエル初心者、あるいはノッてないことが伺える。

だが少なくとも、この決闘者デュエリストなら後者は有り得ない。

『ジャック・アトラスに立ち向かうのは、なんとライディング・デュエル初心者！

異次元からの使者、エンタメの貴公子こと、榊遊矢ー！』

「つて、なんだよそれ!？」

ハチャメチャな自分の二つ名に遊矢はツッコミを入れる。誰が考えたのかは定かではない。赤馬零児が考えたのかもしれないし、不動遊星が考えたのかもしれない。前情報のみでMCがたった今考えた可能性もある。

『少年を迎え撃つのは、かつてこの街のキングとして君臨し、紆余曲折あって伝説となったこの男！ 絶対王者、ジャック・アトラスー！』

続けて飛び出たのは白いD・ホイール。世界に一つしかないと言われる“ホイール・オブ・フォーチュン”。そしてジャック・アトラス。

両者はグリッドにつき、D・ホイールはデュエルモードに移行する。

「ようやくこの時が来たな。貴様はあの遊星が勧めた男。がっかりだけはさせてくれるなよ」

「……分かってる。見せてやるさ、俺のエンタメデュエルを！」

『両者共に準備はいいかー！』

では行くぞう！ フィールド魔法《スピード・ワールド・ネオ》！ セエーッ

ト、オーン!!』

MCによる実況が会場全体に響き渡り、同時にカウントダウンが始まった。

カウントは十。しかしワンカウントは一秒すら満たさず、実質五秒もない。スタートを急かすように、カウントはD・ホイーラー達を精神的に追い詰める。

この瞬間、客席は一斉に静まり返る。

緊張のボルテージがカウントと共に上昇し、最後の瞬間に全てが爆発する。

唯一人。試合の実況を勤めるMCは、静寂の中で稲妻のごとく声を轟かせた。

——カウント・ゼロ。戦いの幕は上がる。

『ライディング・デュエル、アクセラレーション!!』

「っ——！」

遊矢はエンジンを全開まで唸らせるが、思うようにスピードが出ない。

いや、正確には出ている。いつも通り、練習の時と全く同じペースで。

ただそれ以上に、ジャックのD・ホイールが速いのだ。

『第一コーナーを制したのはジャック・アトラス！ よってこのデュエル、先行はジャックだアー!!』

「当然だな！ そんな馬力では、このジャック・アトラスには到底追いつけん！」

「いや、追いついてみせる！ このデュエルで！ 行くぞ——！」

「決闘——！」
デュエル



「オレのターン！」

ジャック

LP：4000

SPC：1

遊矢

LP：4000

SPC：1

「まずは小手調べだ。《インターセプト・デーモン》を召喚！」

《インターセプト・デーモン》

星4／闇属性／悪魔族／攻1400／守1600

「カードを二枚伏せてターンエンド！ さあ、貴様のターンだ！」

「……俺のターン！」

ジャック

LP:4000

SPC:2

遊矢

LP:4000

SPC:2

一ターン目が終了し、遊矢のターンが回ってくる。

ジャックのフィールドには六つの腕を持つ悪魔モンスター。ヘルメットや防具の類からフットボールの選手を連想させる。ステータスそのものは貧弱と言っていい。彼の言ったとおり、まさに小手調べのモンスターなのだろう。SPCは

お互い二つ。《スピード・ワールド・ネオ》下で通常の魔法カードを発動する場合、

SPCを二つ払わなければならない。

つまり、ペンデュラム召喚に必要な個数は最低でも四つ。遊矢は次のターンに備え、まずは下地を整える。

「俺は《エンタメイトENDクロバット・ジョーカー》を召喚！」

《エンタメイトENDクロバット・ジョーカー》

星4〈闇属性〉魔法使い族〈攻1800〉守100

モンスターが召喚ゲートより現れ、文字通りアクロバットに空中を舞う。

その身軽さ、サーカス団員のような振る舞いに、観客の視線が釘付けになる。

「ドクロバット・ジョーカーの召喚に成功した時、デッキからこのカード以外の
エンタメイト《EM》、《魔術師》、《オッドアイズ》のいずれか一体を手札に加えることができる。

この効果により俺は、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を手札に加える」

「——なに？」

ジャックは遊矢のカード——手札に加えたドラゴンを見た瞬間、目つきが変わった。

現在フィールドにいるドクロバット・ジョーカー。そして《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》。

これらの共通点。即ち神遊矢の特異点を、ジャックはこの一瞬で見切った。

「そして、手札のエンタメイト《EM》ヘルプリンセス《の効果発動！ 《EM》の召喚に成功し

たとき、このカードは特殊召喚できる！」

エンタメイト
《ENヘルプリンセス》

星4\閻属性\戦士族\攻1200\守1200

『おーっと、これは速い！ チャレンジャー榊遊矢、わずか一ターン目にして早くもレベル4モンスターを二体召喚したぞォ！ 《インターセプト・デーモン》の攻撃力は1400。総攻撃が決まれば大ダメージだァー!!』

「バトル！ ドクロバット・ジョーカーで、《インターセプト・デーモン》を攻撃！」

「《インターセプト・デーモン》の効果！ 相手モンスターの攻撃宣言時、500ポイントのダメージを与える！」

遊矢

LP:4000 ↓ 3500

SPC:2

トラップ

「更に罠発動、《ハーフ・カウンター》！ 自分のモンスターが攻撃対象となった時、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の半分を自分のモンスターに加える。よって《インターセプト・デーモン》の攻撃力は、このターンのエンドフェイズまで9

00アップする」

「なに!？」

《インターセプト・デーモン》

攻1400 ↓ 攻2300

「返り討ちだ！ 消し飛ばし！」

光弾による反撃を受けてドクロバット・ジョーカーが消滅し、遊矢のライフが引かれる。

遊矢

LP:3500 ↓ 3000

SPC:2

モンスターが破壊されライフが減少する。これだけなら何度も見慣れた光景だ。しかし今回ばかり違う。モニターを眺めつつ、ジャックはそのモニターを分析する。

「ほう。破壊されたら墓地ではなくエクストラデッキに行くのか。随分とユニークなモンスターだな」

「つ……、カードを一枚伏せて、ターンエンド」

《インターセプト・デーモン》

攻2300 ↓ 攻1400

伏せカードを展開し、遊矢のターンが終了。フィールドには攻撃表示のモンスター1体のみ。

彼のデッキはペンデュラムに特化している。それが使えない今、フィールドが手薄になってしまうのは仕方ないことだ。

「オレのターン！」

ジャック

LP:4000

SPC:3

遊矢

LP:3000

SPC:3

「チューナーモンスター、《トップ・ランナー》を召喚！」

《トップ・ランナー》

星4《風属性》機械族《攻1100守800

「レベル4の《インターセプト・デーモン》に、レベル4の《トップ・ランナー》をチューニング！」

先頭を走る者——《トップ・ランナー》は四つの光の円環となり、《インターセプト・デーモン》が後に続く。

二体の魂は同調、調律し、ここに新たな刃が誕生する。

「王者の決断、今赤く滾る炎を宿す、真紅の刃となる！ 熱き波濤を超え、現れ

よ！

シンクロ召喚！ 炎の鬼神、《クリムゾン・ブレード》！」

《クリムゾン・ブレード》

星8《炎属性》戦士族《攻2800守2600

『決まったアァ——！ ジャック・アトラスのシンクロ召喚！ トップバッターは二刀の長剣を操る剣神、《クリムゾン・ブレード》！』

「っ……！」

MCの実況を耳に入れつつ、遊矢はDVDでのジャックのデュエルを思い出していた。

このモンスターは言わば第一関門。王の待つ玉座、その入口を守る赤い騎士——！

「バトルだ。《クリムゾン・ブレイダー》で《エンタメイトENヘルプリンセス》を攻撃！
“レッド・マーダー”！」

烈火の剣戟を受け、ヘルプリンセスが消滅。攻撃表示であったため、遊矢のライフは大きく削られる。

「うあああ——っ!!」

遊矢

LP:3000 ↓ 1400

SPC:3

「まだ終わらんぞ！ こいつの切れ味、貴様ならよく知っていよう！」

《クリムゾン・ブレイダー》のモンスター効果。戦闘で相手モンスターを破壊し墓地に送った時、次のターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚できない

！」

『な、な、なんとということだ——!! 先程ドロバット・ジョーカーによって手札に加えたドラゴンが封じられてしまったぞー!』

これではエースモンスターを召喚できない! 挑戦者^{チャレンジヤー}神遊矢、このまま成す

べもなく負けてしまうのかー!』

「っ……それは、どうかな!」

練習していたことが幸いした。遊矢はD・ホイールの体勢を立て直しつつ罠を^{トラップ}

発動し——加速する。

^{トラップ}

「罠カード、《デス・アクセル》! 自分が戦闘ダメージを受けた時、300ポイントにつき一つ、S P Cを増やす! ^{スピードカウンター}

俺が受けたダメージは1600。よって、カウンターは5つ増える!」

遊矢

LP:1400

S P C:3 ↓ 8

「仕掛けるつもりか。いいだろう、来るがいい! オレはこれでターンエンド!」

「俺のターン！」

ジャック

LP 4000

SPC 4

遊矢

LP 1400

SPC 9

「……よし」

カウンターは貯まり、これにて準備は整った。

——天を指す。

運転をオートパイロットに任せ、少年は観客席に向かって声を張り上げた。

「レディース、エーンド、ジェントルメン!!」

『え?』

あまりにも唐突なその行動に、誰もが困惑した。

榊遊矢の対戦相手はジャック・アトラス。どのような言葉であれ、その言葉は対戦相手であるジャックに向けられるべきなのだ。

「ご来客の皆様、長らくお待ちしました！ これよりワタクシ榊遊矢と、生ける伝説ジャック・アトラスによるエンタメデュエルを、このスピードの世界で披露したいと思います！」

だが、榊遊矢は観衆に話しかける。

ある者はこう考えるだろう。この少年は、一人ではジャック・アトラスに勝てない。だから彼は力を求める。自分以外の誰かに。観客を味方に付け、力の差を埋めるために。

ある者はこう考えるだろう。この少年は、この会場の全員を楽しませたいのだと。十人いれば十人を笑顔に。百人なら百人。千人なら千人。それ以上でも同様に。

そして、全員が確信する。ここから先が、無謀な挑戦者の本領発揮なのだ。チャレンジャー

「このオレを前にして随分と大きく出たな。その度胸は買ってやるが——ここまで言っただけには、それなりのものを魅せてくれるんだろうな？」

「ああ、勿論だ！ 行くぞ、ジャック・アトラス！」

遊矢は手札から二枚を選択する。

一見するとモンスターカード。しかしそれらは、魔法カードとしても機能する。

「俺はS P Cを四つ使い、スケール3の《エンタメイトエンタメイト

《エンタメイトエンタメイト

遊矢

LP:1400

SPC:9 ↓ 5

スタジアムの上空に二体のモンスターが浮かび上がる。

シンクロ次元にペンデュラム召喚は存在しない。未知なる召喚法、デュエルの新

たな可能性に、観客は呼吸を忘れて見入る。

『な、なんだ？ これは一体どういうことだあ!? 私も正直よくわかりませんが、

なんだかスゴイことが起こる気がするぞォォ——!!』

MCの興奮気味の実況で、スタジアム全体の空気が変わる。

——期待が高まり、会場は湧き上がる。

その熱気を肌で感じ、遊矢の魂もまた揺れ始める。

ペンデュラム
振り子が揺れる。大きく、もつと大きく……！

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーキ！」

ペンデュラム召喚！ 来い、俺のモンスター達！」

上空の孔より現れたのは二つの魂。一体は手札、もう一体はエクストラデッキから、二体同時に召喚される。

「手札から《エンタメイトENヘイタイガー》！」

そしてもう一体！ アンコールだ、《エンタメイトENDクロバット・ジョーカー》！」

《エンタメイトENヘイタイガー》

星4《エンタメイト地属性

《エンタメイトENDクロバット・ジョーカー》

星4《エンタメイト闇属性

MCは実況席から身を乗り出し、マイク片手に喉を震わす。

『ご、ご覧になりましたでしょうか会場の皆様方ー！ 上空からモンスターが二体、神遊矢のフィールドに同時に現れたぞおー！ しかもそのうちの一体は、先程

倒されたはずのドクロバット・ジョーカー！　これが挑戦者の奥の手、ペンデュラム召喚なのかー!?』

「フン！　そんなモンスターでは、この《クリムゾン・ブレード》の足元にも及ばんぞ！」

「まだまだ！　お楽しみはこれからだ！」

俺は、レベル4のヘイタイガーとドクロバット・ジョーカーで、オーバーレイ！」

暗黒の渦が現れ、二体のモンスターはその中心に吸い寄せられる。

ここではない何処か。はるか異次元で新たな命が生まれ、召喚者の元に現れる。「漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙！　今、降臨せよ！」

エクシーズ召喚！　現れろ、ランク4！　《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》!!」

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》

ランク4〈闇属性〉ドラゴン族 攻2500 守2000

巨大な逆鱗を持つ漆黒の龍。

これまで見たことのないドラゴン、見たことのない召喚法に、MCは再び絶叫した。

『こ、こ、これはどういうことだー!? 挑戦者^{チャレンジヤー}榊遊矢、ペンデュラム召喚に続き、

また新たな召喚法を披露したぞー!? 少なくとも、私はこれまであのようなカードは見たことはありません! 《クリムゾン・ブリーダー》の効果を一切受け付けないアレは、一体なんなんだー!?』

「エクシーズモンスターはレベルを持たない。よって、《クリムゾン・ブリーダー》の効果は受けないのさ!

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の効果発動! 素材になったモンスター、オーバーレイ・ユニットを二つ使うことで相手モンスター一体の攻撃力を半分にし、その数値分、このカードの攻撃力に加える!」

「なるほど、^{リベリオン}反逆を名乗るだけのことはある。だがそんな小細工、オレには通用せん!

永統^{トラップ}罠、《デモンズ・チェーン》! 効果モンスター一体の攻撃と能力を封じる

!」

「なに——!」

ジャックが発動したカードから鎖が飛び出し、《ダーク・リベリオン・エクシズ・ドラゴン》の全身を拘束する。

宙に浮くモンスターの魂、オーバーレイ・ユニットは無意味に消費され、効果は不発に終わった。

『おーっと、流石はジャック・アトラス! 事前に伏せた罠カードで、ドラゴンの効果を封じ込めたー! これでは身動きがとれない。さあ、どうする挑戦者!』

「っ……いや、まだだ! カードを一枚伏せて、ターンエンド!」

遊矢のフィールドに伏せカードが現れる。

そして、

「……こんなものか」

「——え?」

溜息まじりに、ジャックは呟いた。

「遊星が勧めた男だからと期待していたが、蓋を開けてみればこのザマか。

断言してやる、神遊矢。貴様はエンタメに向いていない」

その宣言に、遊矢は硬直した。

時が止まったのではないかと錯覚するほどに。

「……どうして」

エンタメというスタイルは、遊矢のデュエルの大元であり目標だ。彼は幼少時、父親が原因で笑うことが少なかった。いつも誰かに泣かされ、誰かに助けられていた。笑顔がない生活の虚しさを、榊遊矢は身を持って体感している。

だから、デュエルで皆を笑顔にしたいと思ったのだ。皆笑って皆幸せ。単純で最も幸福なユメのカタチ。

だから。ジャックの言葉は、遊矢自身の否定にも繋がる。

「どうしてアンタにそんなことが言える、ジャック・アトラス！」

「ここまでのデュエルを思い返してみろ。それが答えだ」

「思い返す、だって……？」

「貴様のデュエルは振り子のようだ。左右に忙しく揺れ動き、焦点がまるで定まっていない」

「……どういことだよ」

「自覚がないなら教えてやろう。そのドラゴンをよく見てみる」

遊矢は、罠トラップによって拘束された《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》を見た。

翼、腕、首。各部位が鎖で縛られ、身動きがとれない状況だ。

「貴様にも背負うものがあるのだろう。やるべきことがあるのだろう。だがそれは全て、今の貴様にとっての鎖に成り下がっている。かつてのオレのように」

「かつて……？」

「ああ。その気になってるだけで、本質がまるで視えていない。貴様のエンタメは押し付けがましい。独りよがりにも程がある」

「な——」

どういう意味か聞き返す前に、ジャックはターンを進める。

「デュエルを続行する！ オレのターン！」

ジャック

LP:4000

SPC:5

遊矢

LP:1400

SPC:6

「バトルだ！ 《クリムゾン・ブレード》で、《ダーク・リベリオン・エクシズ・ドラゴン》を攻撃！ “レッド・マード”！」

遊矢

LP:1400 ↓ 1100

SPC:6

「うわああ——！！！！」

漆黒の龍は十字に裂かれ、ダメージの衝撃が遊矢に伝わる。

このドラゴンは元々遊矢のカードではなく、彼の中にいるもう一つの魂、“ユー”のカードだ。

レジスタンス。強者への反逆を象徴する龍。

それでさえ届かなかった。門番に阻まれ、奥に待つ《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を引きずり下ろすことさえ叶わない。

「……くっ」

遊矢の頭には、ジャックの言葉がひどくこびり付いていた。

……“独りよがり”。“押し付けがましい”とジャックは言った。

どういう意図が込められているのか、今の遊矢には全くと言っていいほど分からなかった。

だって、会場は湧いている。皆が心を一つにして、この時間、この瞬間に没頭しているのだから――

「遊矢ー!!」

「え？」

少女の声。しかし、聞こえたのはほんのひと握りであろう。

「……柚子？」

少女の名を呼ぶ。当然返事はない。高速で走るD・ホイール上での眩きが、観客席まで聞こえるはずがない。

それでも遊矢は会場を見回す。たった一人の女の子。ずっと会いたかった幼馴染を探し出す。

少女はすぐ見つかった。アクション・デュエルで鍛えられた視力と、彼女の奇抜な格好……ライダースーツのおかげだろう。

「……そうだった」

柚子が見ている。遊矢はそのことをすっかり失念していた。

ジャック・アトラスとのデュエルに夢中で、それ以外のことが考えられなくなっていたのだ。

「……俺のターン、ドロー」

ジャック

LP：4000

SPC：6

遊矢

LP：1100

SPC：7

「リバースカード、《ペンデュラム・バック》。ペンデュラム召喚可能なモンスターを二体まで、墓地から手札に戻す。これにより《エンタメイトENヘイタイガー》、《エンタメイトENDクロバット・ジョーカー》を手札に戻す」

「？」

雰囲気の変化にジャックは気づく。

ダウンナーな気配は変わらない。しかし、落ち込んでいるわけでもない。

例えるなら——嵐の直前。何かが起きる前の静かな一時。

スピードカウンター

エンタメイト

「SPCを二つ使い、魔法カード《マジックENキャスト・チェンジ》を発動。手札の

エンタメイト

《エンタメイトEN》を任意の枚数デッキに戻し、戻した枚数プラス一枚、カードをドローする。

手札のヘイタイガー、ドクロバット・ジョーカーをデッキに戻し、合計で三枚ド

ロー」

遊矢

LP:1100

SPC:7 ↓ 5

「モンスターを裏守備表示で召喚。」

カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

チャレンジヤー

『挑戦者のターンが終了。しかし、壁モンスターを召喚しただけだ。これで万事休すかー!?』

「万策尽きたようだな。オレのターン！」

ジャック

LP:4000

SPC:7

遊矢

LP:1100

SPC:6

「オレが引いたカードは《スピードスベルSP—エンジェル・バトン》。こいつを発動し、スピードカウンターSPCを四つ取り除いて二枚ドロ。そして、手札を一枚墓地に送る」

ジャック

LP:4000

SPC:7 ↓ 3

「《マッド・デーモン》を攻撃表示で召喚！」

《マッド・デーモン》

星4〈闇属性〉悪魔族〈攻1800／守0

「バトルだ！ 《クリムゾン・ブレーダー》、裏守備モンスターを攻撃！ 切り裂け、グレッド・マードー！」

二刀の長剣が三度振るわれ、セツトされたカードが十字に切り裂かれた。

しかし破壊した直後、振るわれた剣は錆び付き、《クリムゾン・ブレーダー》の攻撃力が減少する。

《クリムゾン・ブレーダー》

攻2800 ↓ 攻2000

エンタメイト

「《ENラクダウン》のモンスター効果！ このカードを破壊したモンスターの攻撃力を800ポイントダウンさせる！」

「フン、今更足掻いても遅いわ！ 《マッド・デーモン》のダイレクトアタックが決まれば、それで貴様は終わりだ！」

「まだだ！ まだ終わらない！」

……終わってなんかやるもんか。俺はまだ、何一つ成し遂げちゃいないんだ！
速攻魔法発動！ 《イリユージョン・バルーン》！

遊矢

LP:1100

SPC:6 ↓ 4

もぬけのカラとなった遊矢のフィールドに、カラフルな五つの風船バルーンが出現した。

『これは一体何だー!? 挑戦者チャレンジャーを守るかのように、五つの風船が飛び出したぞー

！ これぞまさにイリユージョン！ どうやら彼は、まだ諦めてはいないようだー

!!

「ジャック！ お前は俺に視えていないと言ったな！ けど、それはアンタにも

言えることだ！」

「どういう意味だ」

「……確かに、貴方には視えてるんだろう。この会場が。このフィールドが。もし
かしたら、この展開そのものが既に手の平の上なのかもしれない。

だけど！ 俺の夢。俺の未来。俺の可能性は、決してアンタにも見えはしない

！ だから、さっきの言葉は撤回してもらおう！」

「——……ほう。面白い、ならば見せてみる！ 貴様の可能性とやらを！ 行け、

《マッド・デーモン》！」

「《イリリュージョン・バルーン》の効果発動！ デッキの上からカードを五枚確認し、その中から《エンタメイトEN》を一体選択して特殊召喚できる！」

「《マッド・デーモン》は守備モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を超えていれば貫通ダメージを与える。いくら壁モンスターを引き当てようと、攻撃力と守備力、共に700以下なら貴様の敗北だ！」

「いや、まだ終わらない！ 引き当ててみせる、俺の仲間達を！ まず、一枚目——！」

バルーンが一つだけ割れ、中から引き当てたカードが姿を現す。

「c……《エンタメイトENTランプ・ウィッチ》！」

《エンタメイトENTランプ・ウィッチ》

星1／闇属性／魔法使い族／攻100／守100

「早速モンスターを引き当てたか。運だけはあるらしい。だが、そのモンスターで

は防げんぞ！」

「まだだ——二枚目！」

遊矢はカードを引く。しかし、引き当てたのは罠カード、《エンタメ・フラッシュ》^{トラップ}。

「くっ……三枚目！」

《ENTランポリンクス》^{エンタメイト}

星2\地属性\獣族\攻300\守300

「四枚目——！」

……《SP——ソニック・バスター》^{スピードスベル}。

スピードカウンター

SPCを二つ取り除き、自分のモンスター一体の攻撃力の半分のダメージを与えるカード。

「——くそ」

「四枚目も外れたか。これで後がなくなったな。」

榊遊矢。今、貴様はどんな気持ちだ」

「っ……！」

五枚目を引く手が止まる。

右腕だけが麻痺してしまったような、不自然な感覚。

音が遠ざかり、視界は暗く染まる。

……恐怖と炎は似ている。気づいた瞬間には、既に奥深くまで侵食されている。怖いだろうな。自分を否定する敵に負けるというのは」

「え……？」

先程までとはまるで違う柔らかな言葉に、遊矢は顔を上げる。

「貴様のエンタメはまだ独りよがりだが、その想いは決して間違っではない。

この先、貴様を否定する敵は山程現れる。だが、何があろうと決して折れるな。信じるモノが正しければ、たとえどれほど間違えたとしても——必ず、最期には何かを得られるだろう」

「ジャック……？」

「さあ、カードを引くがいい！ 貴様の未来は尽きてなどいない！ ならば最後に、その輝きを見せてみる！」

「……ああ！」

遊矢は顔を伏せ、見えないように笑いをこぼした。

ジャック・アトラス。この男もまた、不動遊星の仲間なのだと。

「行くぞ、五枚目！」

最後のバルーンが割れ、中からカードが現れる。

ドロートしたカードを確認。遊矢は、未来を共に歩む仲間を召喚する。

「俺が引いたカードは《^{エンタメイト}ENディスカバー・ヒッポ》！ 《イリュージョン・バ

ルーン》の効果により、このカードを特殊召喚！」

《^{エンタメイト}ENディスカバー・ヒッポ》

星3／地属性／獣族／攻800／守800

「《マッド・デーモン》の攻撃！ “ボーン・スプラッシュ”！」

骨の礫を受け、バルーンより現れたヒッポが消滅。更に貫通効果により、遊矢の

ライフが減少する。

遊矢

LP：1100 ↓ 100

SPC：4

『耐えたー！！！』

^{チャレンジヤー}挑戦者榊遊矢、最後の最後でディステイニードロー！

首の皮一枚繋がったぞー！ ジャックの言う通り、彼の未来はまだ終わってはいないようだー!!』

「てて……ありがとう、ヒッポ」

遊矢はカードを墓地に送りつつ、札を言う。

残りのライフは僅か100。対してジャックは全くの無傷。実力差は圧倒的と言ってもいい。

にもかかわらず、会場のボルテージは上がっていく。限界ギリギリの戦いに、客の視線はますます遊矢に集まる。

「オレはカードを一枚伏せてターンエンド。さあ、攻めてこい！」

「俺のターン、ドロー!!」

ジャック

LP:4000

SPC:4

遊矢

LP:100

SPC:5

「……この、カードは」

そうして、遊矢は引き当てた。

託された成長のピース。

可能性に満ちた新たなカードを。

「……独りよがりって言ったな、ジャック」

「ああ」

「……その意味が、少しだけ分かった。俺には、視えてなかったんだ。皆のことが。仲間のことが。観客やMC、遊星さん。そして柚子。

楽しませるなんて言っておきながら。笑顔にするなんて言っておきながら。その具体的な方法を、俺は、何一つ考えてなかった」

ジャックは黙って遊矢の独白に耳を傾ける。

榊遊矢のエンタメは、少しばかりズレている。

才能がないわけじゃない。彼のデュエルで笑顔になる人間は確かにいる。向いていない、というのは流石に言いすぎだ。

けれど所詮、彼のエンタメは「好き勝手に振舞う」だけだ。やりたいことだけをやってるようでは、本当の意味でのエンタメとは言えない。

無論、榊遊矢はそこまで至っていない。ただ、今の自分は少し違うと気づいただけ。

……その一步が。少年の未来を、少しだけ変える。

「見せてやる。今の俺の精一杯を。ジャック、貴方だけじゃない。ここにいる全員……ランサーズの皆にも！」

「……フッ。」

「ならば、来るがいい！ このジャック・アトラスは、逃げも隠れもしない！」

「ああ！ 全力で行くぞ！」

大きく揺れれば、それだけ大きく戻ってくる。それがペンデュラムだ。

「今一度揺れろ、魂のペンデュラム！ 天空に描け、光のアーケ！」

ペンデュラム召喚！ もう一度、力を貸してくれ——！」

遊矢は手をかざし、再び振り子^{ペンデュラム}を揺らす。心なしか、揺れ幅は一回目よりも大きい。

セットされたスケールは3と5。同時に召喚可能なモンスターはレベル4のみ。

《クリムゾン・ブリーダー》によって破壊され、エクストラデッキに送られた

ENTが帰還する。

エンタメイト

「《ENTラクダウン》！」

エンタメイト

《ENTラクダウン》

星4／属性／獣族／攻800／守1800

『出たー！ 先程も見せた新たな召喚法、ペンデュラム召喚！ だが、召喚されたモンスターはわずか一体！ ここからどう巻き返すつもりだ、榊遊矢ー！』

トラップ

「永続罠、《連成する振動》を発動！ この効果により、

ペンデュラム

「ゾーンのラ・パンダ

を破壊し、カードを一枚ドロー！

スピードカウンター

更にSPCを二つ使い、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を

ペンデュラム

「ゾー

ンにセッティング！」

遊矢

LP：100

SPC：5 ↓ 3

「そして俺は、このカードを通常召喚する！」

風水司る未熟な魔術師よ。絆を紡ぎ、今こそ現れろ！

チューナーモンスター、《貴竜^{きりゆう}の魔術師》！」

《貴竜の魔術師》

星3炎属性魔法使い族攻700守1400

「!？」

——その召喚に、ごく一部の者は度肝を抜かれた。

ランサーズ、そして柊柚子。即ち、榊遊矢を知る者達。

「……行け、遊矢」

会場のどこかにいる、一人の男の眩き。

それに応えるようにカードは塗り替えられる。

色は二重に折り重なり、ペンデュラムの、新たな進化の扉が開かれる——。

「レベル4の《^{エンタメイト}ENラクダウン》に、レベル3の《貴竜の魔術師》をチューニン

グ！」

《貴竜の魔術師》は祈るように杖を掲げ、三つの円環を生み出した。ラクダウン

が輪をくぐり抜け、調律・同調する。

「二色の眼の龍^{まなこ}よ。紅き炎をその身に纏い、次元を照らす星となれ！」

シンクロ召喚！ いでよ、大地抉りし紅蓮の龍！ 《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》！

《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》

星7《炎属性》ドラゴン族《攻2500《守2000

合計レベルは7。今ここに、二色の眼を持つ超新星が爆誕した。

炎を纏った神秘の龍が、会場全体に咆哮を轟かす。

『で、で、出たァー！』

ペンデュラム、エクシーズに続き、まさかのシンクロ召喚！ 複数の召喚法を

操るD・ホイラー、その名も榊遊矢！ なんとというデュエリストだ！ これまで無名だったのが不思議なくらいだぞォー！』

《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》は特殊召喚に成功した時、自身の

バトルを放棄することで、^{ペンデュラム}「ゾーン」のモンスターを召喚できる！ 繋げ、ボン

ド・オブ・フレイム“！”

空に浮く一体のモンスターが炎に包まれ、隕石のごとく落下した。

輝くは二色の眼。赤き神秘の龍が、遊矢の場に誕生する。

「真打ち登場！ 雄々しくも美しく輝く二色の眼！ 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星7《闇属性》ドラゴン族《攻2500守2000

「さらに《^{エンタメイト}エンタメイトチアモール》の^{ペンデュラム}「P」効果！ 自分のPモンスターの攻撃力は300ポイントアップする！」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

攻2500 ↓ 攻2800

「バトルだ！ 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》で、《クリムゾン・ブレーダー》を攻撃！ 《螺旋のストライク・バースト》！」

螺旋を描くブレスにて《クリムゾン・ブレーダー》が破壊される。

「そして、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》のモンスター効果！ モンスターとの戦闘で与えるダメージを二倍にする！ “リアクション・フォース”！」

「ぬう……!?」

ジャック

LP:4000 ↓ 2400

SPC:4

更なるブレス攻撃を受け、ジャックのライフが減少。一瞬だけ体制を崩すが、即座に立て直した。世界で活躍しているだけあって、そのテクニクは遊矢の比ではない。

『《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の攻撃が決まり、ジャックのライフが大きく削られた！ 一矢報いた榊遊矢、このまま逆転なるかー!?』

「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

「やってくれたな、榊遊矢！ 今の一撃、確かにオレに響いたぞ！ 先程の言葉は訂正しよう！ だからこそ貴様は、このオレ自らの魂で打ち砕く！ オレのターン！」

ジャック

LP:2400

SPC::5

遊矢

LP::100

SPC::4

「オレは貴様の永続罠^{トラップ}《連成する振動》をコストに、チューナーモンスター《トラップ・イーター》を特殊召喚！」

《トラップ・イーター》

星4〔闇属性〕悪魔族〔攻1900〕守1600

「チューナーモンスター。合計レベルは8……！」

「行くぞ！ レベル4の《マッド・デーモン》に、レベル4の《トラップ・イーター》をチューニング！」

ジャックは高く腕を掲げ、召喚^{シンクロ}した。龍は玉座を立ち上がり、自らの肉体で挑戦者と相対する。

「王者の咆哮、今天地を揺るがす。唯一無二なる覇者の力を、その身に刻むがいい！」

シンクロ召喚！ 荒ぶる魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》
！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》

星8〈闇属性〉ドラゴン族〈攻3000守2500

現れたのは同じく紅蓮の龍。

全身の傷は勝利の証。

絶対的な覇気を持つ、孤高なる破壊龍——！

『ついに来たぞオォー！ ジャック・アトラスの新たなドラゴン、その名も《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》！ これはまずい、どうするチャレンジャー!?』

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》の効果発動！ このカードの攻撃力以下の特殊召喚されたモンスターを全て破壊し、一体につき500ポイントのダメージを与える！

喰らうがいい！ ムアブソリユート・パワー・フレイム“！”

オッドアイズ二体の攻撃力はどちらも3000以下。遊矢のライフは残り10

0。

だが、二体が破壊龍の火炎を浴びる直前、遊矢はセットした罠^{トラップ}を発動させる。

「伏せカードオープン、《ミニチュア・ライズ》^{リベース}！ モンスター一体の攻撃力を1

000ポイント下げ、さらにレベルを一つ下げる！ 対象は、《レッド・デーモン

ズ・ドラゴン・スカーライト》！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》

星8 ↓ 星7

攻3000 ↓ 攻2000

^{トラップ}

罠の効果を受け、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》は縮小し、攻撃力がダウンした。

^{トラップ}

これは、遊矢がジャック・アトラスの対策に投入した罠^{トラップ}カード。《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》の効果は強力だ。特に、ペンデュラムを得意とする遊矢には恐ろしく刺さる。しかしそれは、モンスター自身の高い攻撃力があってのもの。

ならば答えは簡単だ。高いのなら、下げてしまえばいい。

「これで《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》の攻撃力は、俺のオツドアイズ達を下回った。効果では破壊できず、当然戦闘でも破壊できない！」

「甘いわ！ そんな他人の真似事では、このジャック・アトラスを倒すことなどではしない！ それを今、この場で教えてくれる！」

チューナーモンスター、《チェーン・リゾネーター》を召喚！

《チェーン・リゾネーター》

星1 光属性 悪魔族 攻1000 守1000

「レベル7となった《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》に、レベル1の《チェーン・リゾネーター》をチューニング！」

「なっ……！」

《チェーン・リゾネーター》は音叉を鳴らし、自身を一つの光輪に変換。その中心を、縮小したドラゴンが通り抜ける。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

シンクロ召喚！ 我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

星8〔闇属性〕ドラゴン族〔攻3000〕守2000

全身の傷は癒え、角は再生。

ジャック・アトラスを象徴する破壊龍が、今、完全な形で降臨した。

「そんな、ここで《レッド・デーモンズ・ドラゴン》!?」

『なんとお！ 榊遊矢の仕掛けた罠をくぐり抜け、まさかの連続シンクロ召喚！』

これがジャック・アトラス、三歩先を行く彼のデュエルなのかー！』

「これで終わりだ！ 《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃！

森羅万象、全てを突き貫け！ “アブソリュート・パワー・フォース”！」

有無を言わさぬ強烈な掌底が《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を貫き

破壊した。

遊矢に防ぐ術はもうない。ライフが減少し、決着する。

「うわああ——!!」

遊矢

LP:100↓0

S P C 4

ぶしゅう、と空気が抜ける音。遊矢のD・ホイールは速度を失い始め、やがて停止するだろう。

フレンドシップ・カップの開幕戦は、ジャック・アトラスの勝利にて幕を閉じた。



「……負けた、のか」

届かなかった。その事実が遊矢にとってショックだった。

ライディング・デュエルと通常のデュエルは違う。今回のデュエルでも、魔法

カードの制限が無ければ遊矢はもっと動けていただろう。

だが、そんなのは些細なことだ。

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》。

そして、《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》。

これ以上ないほどの大盤振る舞い。間違いなく全力以上の力を発揮した。

——それでもなお、ジャックは遠い。

榊遊矢にはもう一体切り札がいる。しかしそれはジャックも同様だ。

今の自分ではどうやっても勝てないと、遊矢は痛感した。

「おい」

ジャックはD・ホイールを止め、項垂れる遊矢の元へ歩み寄る。

「何も言うな。そして、顔を上げろ」

「えっ——」

言われるがまま、遊矢は顔を上げる。

そして、圧倒的な光景を目にした。

『ついに、決着——！ フレンドシップ・カップの開幕戦、エキシビション・マッチを制したのはジャック・アトラス！ 生ける伝説はなお健在！ いや、むしろ勢いを増している！ その圧倒的な力を、参加者全員に見せつけたぞ——！』

そして挑戦者榊遊矢もよくやった！ ペンデュラム召喚、エクシーズ召喚、そ

してシンクロ召喚！ 数多くの召喚法を駆使し、最後まで全力で食い下がった！
彼もまた大会の参加者！ このフレンドシップ・カップにて、我々にどのようなデュエルを魅せてくれるのでしょうか！ これから先、彼から目を離すことは許されないぞー！！』

「流石はジャック・アトラス！ 伝説のD・ホイーラーだー！！」

「アトラス様ー！」

「榊遊矢って子もやるじゃないか！」

「惜しかったぞ、少年ー！！」

「……これって」

こんなに広がったのか。こんなに多かったのか、と。

走っている時には気づかなかった世界の広さが、そこにはあった。

「お前の目指すモノが何なのかは知らん。オレには関係のないことだからな。だが、この景色だけは覚えておけ」

観衆は各々の言いたいことを好き勝手に叫んでいる。誰が何を言っているのか聞

き取れないほどに。

だが、そこには笑顔があった。

ここにいる誰もがこの瞬間を、十二分に満喫していたのだ――。

本編

「二色の眼まなこの龍よ。紅き炎をその身に纏い、次元を照らす星となれ！

シンクロ召喚！ いでよ、大地抉りし紅蓮の龍！ 《オッドアイズ・メテオバー

スト・ドラゴン》！」

他の案

「二色の眼まなこの龍よ。聖なる炎を纏いて、闇夜を照らす星となれ！

シンクロ召喚！ いでよ、絆を紡ぐ紅蓮の龍！ 《オッドアイズ・メテオバー

スト・ドラゴン》！」

「二色の眼まなこの龍よ。聖なる炎を纏いて、燦然と輝く星となれ！

シンクロ召喚！ いでよ、次元を繋ぐ紅蓮の龍！ 《オッドアイズ・メテオバー

スト・ドラゴン》！」

「爆炎より生まれし二色の眼。業火を纏いて大地を照らせ！」

シンクロ召喚！ いでよ、次元を繋ぐ紅蓮の龍！ 《オッドアイズ・メテオバー

スト・ドラゴン》！」

・
・
・

……などなど。

気をつけた点は

「炎」

「二色の眼」

「星」

「絆」

「次元」

に関連する言葉が含まれていること。その気になれば割と考えられますね。

ぶっちゃけ技名の「ボンド・オブ・フレイム」の方が言わせたかったので、召喚口上はそれっぽいならなんでもいいんですけど。

……うむ、我ながら実に痛々しい。だが逆に考えよう。この痛々しさを恥じるのではなく、楽しむのだ！ 何事であれ頂点を極めるのいいことだって誰かが言っていた！

曇った眼

赤馬零児「これが私のファンサービスだ！ 受け取れイエーガー！」

◆
デニス「燃えてきたぞ！（竜殺し並感）」

◆
柚子「おい、デュエルしろよ」

大体こんな話（ネタバレ）

注意…デュエルなし。

「——素晴らしい」

怒涛のエキシビジョン・マッチが終了した時、赤馬零児は思わずそう口にした。
た。

彼の知る榊遊矢は、ペンデュラム・融合・エクシーズの三種類の召喚法を使う決闘者だ。^{デュエリスト}

——その男が、“シンクロ”を使用した。

赤馬零児はランサーズの面々がシンクロ次元に飛ぶ際、意図的に分断した。榊遊矢の元には、柊柚子とそっくりな容姿をした“セレナ”、彼に触発されペンデュラム使いとなった“沢渡シンゴ”、そして自分の弟である“赤馬零羅”を同行させた。このメンバーを選んだ理由は、各々に経験を積ませて成長させるため。融合次元出身であるセレナをランサーズ側に完全に取り込み、沢渡シンゴを榊遊矢に次ぐペンデュラム使いとして成熟させ、赤馬零羅に自分以外の決闘者^{デュエリスト}を見せつける。そして榊遊矢には、この問題児達を押しつけることで精神的成長を図る。

赤馬零児の思惑は、当初の予定以上の成果を上げていた。

「……これは、信じるほかないようですね」

イエーガーは溜息を漏らしつつ呟く。

「本当に素晴らしいデュエルでした。ペンデュラム召喚とエクシーズ召喚。どちらもこの街には……いえ、おそらくこの世界には存在しない召喚法です。」

神遊矢。負けはしましたが、彼からは将来性を感じました。鍛え方次第では大いに化けるでしょう」

「……その割には、残念そうに見えますが」

「ええ。これで次元侵略の話が真実味を帯びてしまいました。このネオ童実野シティは、また戦場となるのですね」

「……申し訳ありません。しかし、ランサーズは融合次元から人々を守るための組織です。」

ジャック・アトラス。彼の力には私も感服しました。是非我々と……ランサーズと手を組んで頂けたらと」

期待と確信をもって赤馬零児はイエーガーを見る。

しかし彼の答えは、期待していたそれとは異なっていた。

「いいえ。その誘いにはまだ頷けません」

「っ——何故？」

「同盟を結ぶという意見には賛成です。ですが、貴方の真意は別のところにあるはず」

そう言ってイエーガーは懷から小さな端末を取り出した。指で画面を操作した後、それを赤馬零児に見せる。

映っていたのは、四人の少年少女達。

「神遊矢。セレナ。沢渡シンゴ。赤馬零羅。確認ですが、この四人がランサーズのメンバー。そうですね？」

「……流石です。もう情報を集めてられたとは。

はい、その通りです。私と月影、更に残りの三人を含めて、計九人でこの組織は成り立っています」

「おや、九人でしたか。ですが、それでもまだ戦力不足は否めませんね。

……神遊矢。彼は素晴らしい決闘者デュエリストです。しかしそれは、将来性までを考慮に入れた場合の評価。私自身、デュエルは素人ですので正しい評価ではないかもしれませんが、彼はよくてセキュリティ上層部の實力しかないように思えます。

残りの八人を同レベルと仮定しても、やはりランサーズは力不足です。スタンダード次元を守ることはできても、敵の本拠地に乗り込めば全滅は免れません」

「……」

赤馬零児は黙って話を聞いている。いずれ“融合次元に乗り込む”ことを否定せず。

「貴方の真の目的は、ランサーズという組織の強化と肥大化。ジャック・アトラスや不動遊星を初めとしたこの次元の決闘者^{デュエリスト}を取り込むこと。もっと簡潔に言えば、“守る”ための組織ではなく、“攻める”ための組織を作ること。違いますか？」

「……………」

その指摘を受けて赤馬零児は、イエーガーを敵を見る目で睨みつけた。

いや、正確には“睨みつけてしまった”。同盟相手に敵意を向けるなど言語道断。この男のような小心者が相手ならなおさらだ。

だがイエーガーは、その視線を受けてもピエロのように笑う。

「イッヒツヒ、どうやら凶星のようですね。忠告はありがたく受け取っておきます。スタンダード次元に危機が訪れたなら、その時は手を貸しましょう。」

——ですが。貴方の個人的な思惑に付き合うつもりはありません」

「……そうですか。どうやら私は、貴方を誤解していたようです」

赤馬零児は眼鏡を直し、イエーガーと向き合う。どういふわけか、表情は少しば

かり嬉しそうだ。

「それは、どういう意味ですかね？」

「いえ、深い意味はありません。言葉通りの意味ですよ。

この街には不動遊星、そして今はジャック・アトラスという英雄がいる。失礼ながら私は貴方のことを、市長という肩書きだけの飾りと思っていました。ですが貴方は、我々の知る市長以上に広い視野をお持ちのようだ」

「ヒツヒ、それはどうも。では、試合も終わったことですし、場所を変えましょう」
踵を返し、イエーガーは部屋を出ていこうとする。

「……そういえば、貴方はこの街の歴史をご存知ですか？」

「歴史？」

「ええ。といっても、ほんの二年ほど前の話ですがね」

「……いいえ」

しばらく考える素振りを見せたが、赤馬零児には分からなかった。

シンクロ次元の歴史が、ではない。そんなものは調べれば簡単に分かる。それはイエーガー自身にも分かっているはず。

分からなかったのは、何故このタイミングで歴史の話を振ったか、だ。

「この街は二年ほど前まで『サテライト』と『シティ』に分けられていました。現在では考えられないほどの階層社会です。これらは過去に起きたある災害によって分断されており、サテライトの住民はゴミ溜めの中で生活していました」

「ですが、今のネオ童実野シティにその片鱗は殆ど見られません。どのような経緯があったのでしょうか？」

「繋げたのです。サテライトとシティを。誰もが自由に行き来できるよう橋を作り、全域にライディング・デュエル用のコースを設立しました。この街は文字通り、デュエルによって進化したのです。」

ですから私は、その例に倣うべきと考えます」

「倣う……？ 具体的には、どのような？」

「橋を作ります。スタンダードとシンクロを結ぶ大きな橋を。そうして、次元そのものを繋げるのです。貴方がたの技術力と、我々の開発した新エネルギーがあれば、不可能なことではありません」

「——繋ぐ、だと？」

赤馬零児は驚きを隠せない。スタンダード次元からシンクロ次元へ移動する際、ランサーズは「転送」という手段を使った。デュエル・ディスクを装着した者のみを跳ばすという、基本的な手法。この技術は元々エクシーズ次元の物であり、おそらく融合次元も同じ手段を取っているだろう。

だからこそ信じられない。もし実現すれば、それだけで融合次元より一步先へ行くことができる。住民をスタンダード次元に避難させ、応用してシンクロ次元と融合次元を繋いでしまえば、先手を取ることも防衛することも容易となる。

「……本当に、そんなことが可能なのですか？」

「それを今から確かめに行くのです。それに、不動遊星にも貴方のことは知らせておきたいですし」

「不動遊星？ どうして彼がこの話題に出てくるのです？ 彼はジャック・アトラスに並ぶ伝説の決闘者デュエリストのはずでは？」

「……ああ、そういえばそうでしたね。申し訳ありません。彼とはよく顔を合わせるので、ジャック・アトラスのように伝説というイメージがないのです。おそらく、この街の皆さんも同じように思っているかと」

「どういうことです？ それだけ馴染み深い、ということでしょうか？」

「そういうことなのでしょうね。では、ご案内します。ついてき——」

「ここかあ！」

バダン！ と。

恐ろしい勢いで扉が開かれ、イエーガーの姿が消えた。

代わりに現れたのは……榊遊矢に同行させたはずの、三人の問題児達だった。

「……」

「ビンゴだ。ようやく見つけたぜ社長さんよお。この沢渡シンゴの手をここまで煩わせるとは、随分といいご身分——」

「兄様！」

沢渡シンゴの言葉を遮り、赤馬零羅は兄の元へと駆け寄った。

これまで離れていた分を埋め合わせるように、零羅は零児の服をぎゅっと握り締めた。

「兄様……よかった。また、会えた。あの人の、言った通りだった……！」

「零羅……？」

弟の変化に兄は気づいた。

以前より少しだけ……本当に少しだけだが、口数が増えている。

「……君達が連れてきてくれたのか？」

「いや。試合が始まる直前に遊矢に頼まれたのだ。お前を探してほしいとな」

「何？ あの榊遊矢が……？」

セレナの言葉に、赤馬零児は再び驚く。あの少年が何故そこまで気を回せたのか
が引っかけたのだ。

エキシビジョン・マッチ、それも相手はジャック・アトラス。加えて柊柚子のこ
ともある。あの状況で榊遊矢が、まともな精神状態でいられるはずがない。

「とにかく、これでその子は渡したからな。おい、行くぞセレナ」

「いや、待て」

沢渡はセレナに視線を送った後、部屋を出ていこうとしたが、赤馬零児は呼び止
めた。

「なんだよ。まだ何かあんのか」

「沢渡シンゴ、そしてセレナ。君達がここに至ったまでの経緯を私に報告しろ」

「……んなもん知ってどうすんだよ」

「榊遊矢。彼の成長の原因を知りたい。そのためには、君達がこの次元に来て何を経験し、何を得たのかを知る必要がある」

「俺達をいきなりワケ分かんねえ場所に飛ばしたアンタに、んなこと知る権利はないと思うけどな」

「——そうか」

「っ………！」

赤馬零児のひと睨みで沢渡は、蛇に睨まれた蛙のように硬直した。

嫌な汗をかきつつも、なんとか反論する。

「な、なんだよ。別に、間違ったことは言っただろ」

「……」

実際、彼の言には一理ある。それでも、たとえ正論が後ろに控えていたとしても、間違っているのは自分ではないかと思わずにはいられない。それほどの威圧感が赤馬零児にはある。

だが同時に、自分のミスを認める誠実さもまた、彼は持ち合わせている。

「いや、失礼。確かに君の言う通りだ。これに関しては、事前に知らせておかなかった私に非がある。すまなかった」

「お、おう……」

真正面から謝罪され、沢渡は戸惑う様子を見せた。まさかこの男が本当に謝ると思っていなかったのだろう。

「ではセレナ。今度は君に訊こう。何があった？」

「……」

セレナは腕を組み、その視線を怯むことなく受け止める。

無言の間が続く。やがて痺れを切らし、セレナは一言だけ赤馬零児に伝えた。

「不動遊星と会った。それだけだ」

「何？」

不動遊星。先程イエーガーからも聞いた名前だ。

「……そうか。榊遊矢がシンクロを習得したのはその影響か。となると、君達二人はどうなんだ？ 不動遊星と接触して、何か得るものはあったか？」

「さあな。あったとしても、お前には関係のないことだろう」

「ああ、それで構わない。どんな形であれ、君達が更に力をつけたなら満足だ。これでようやく、我々ランサーズは次のステージに進める。

……イエーガー市長」

「市長？」

ぎぎ、と扉が音を立てて閉まっていく。

……その裏側には、ペしゃんこに潰されたピエロがいた。

「うおっ!? 誰だアンタ。というかいつの間に……」

「初めからここにいました。ヒッヒッヒ、流石は精鋭部隊ランサーズ、中々の強さををお持ちのようだ」

「えっ……なんだよその目。俺が悪いのか？」

「いいえ、誰もそうは言っておりませんよ。これしきの不条理、流せぬようでは市長は務まりません。

申し遅れました。私はネオ童実野シティ市長のイエーガーと申します」

「へえ——そうか、アンタ市長か。俺は沢渡シンゴ。知っての通り、舞網市市長の息子。言わば御曹司だ」

「……失礼、舞網市とは？」

初めて聞く単語について、イエーガーは赤馬零児に質問した。沢渡シンゴ本人に直接訊かなかったのは、話を通じないと判断したからだろう。

「スタンダード次元に存在する我々の故郷です。意味合いとしては、『ネオ童実野シティ』と同じかと」

「成程。では今後、私は貴方と何度も会うことになりそうですね」

「まあ、そういうことだ。このシンクロ次元も、いずれは俺のエンタメで染め上げる予定だからな。今のうちに知り合いになっておいて損はないぜ」

とことん上から目線で話す金髪少年。しかし向けられている感情は明らかに好意であるため、イエーガーは咎めない。

エンタメで染め上げる、という宣言には難色を見せたが。

「……まあ、そういうことにしておきましょう。それで、そちらのお嬢さんは？」

「……セレナだ」

「そうですか。では貴女が——」

イエーガーは肝心のところを言わず、そこで言葉を区切る。

その様子を見て、赤馬零児は目を見開いた。

——気づかれている。少なくとも、セレナがスタンダードの決闘者^{デュエリスト}ではないことに。

赤馬零児はこれまでそのようなミスは犯していない。イエーガーとは何度も話し合う機会があったが、ランサーズのプライベートには極力触れられないよう誘導している。

「……いえ。不動遊星と出会っているのなら、さして問題ではないでしょう。」

では、赤馬零児さん。要件はなんでしょうか。確か先程、次のステージ、と仰ってましたが？」

「……ええ。ですがその前に、このフレンドシップ・カップについて一つ質問が」

「構いません。なんなりと」

「ありがとうございます。」

確認ですが、この大会はまず開幕戦として、ジャック・アトラスとのエキシビジョン・マッチが行われる。その後、この街は“バトル・シティ”となり、街の至る所でライディング・デュエルが開始される。戦績は運営に管理され、一定以上の

成果を収めた上位数名が駒を進める。そして最後に、このスタジアムでトーナメント戦が行われる。

……細かいルールは他にもあるのですが、大まかな流れとしてはこれでよろしいですね？」

「はい。その通りです」

「では、ここからが本題です。この“バトル・シティ”ですが、開幕はいつ頃でしょうか？」

「正式な開幕は明日の明朝です。尤も、一定以上の成績を収めればよいので、腕に自身のある方はもう少し遅れても結構ですが」

「そうですか。今すぐではないのですね？」

「……流石にこれほどの規模になると、セキュリティの配置にも時間が掛かってしまうもので。この点に関しては、住民からもちろはらと苦情が届いています。フットワークが悪くて申し訳ない」

「いいえ。寧ろ安心しました。明日ならば間に合います」

「はて？ 間に合う、とは？」

「今回、我々スタンダード次元とシンクロ次元は、融合次元に備えて同盟を結びます。その友好の証として、あるサプライズを提供したいと考えました」

眼鏡を直し、赤馬零児は向き直った。

イエーガーだけではない。セレナと沢渡シンゴ、そして隣にくっついてる零羅にも聞こえるように、その男は高らかに提案した。

「この『バトル・シティ』に我々の世界——『アクション・フィールド』を導入してはいかがでしょう」



「……やるね、あの男」

「デニス……?」

デニスは、これまでにないほどの低音で呟いた。

どうやってあの男を倒すか。それ自体は決闘者なら誰もが考える。だがデニスの

目は、その域をぶちぎりで超えていた。

「どうやって倒すか？ 違う。どうすれば仕留められるか。彼の目からは、そんな殺気が微かに漂っていた。」

「ジャック・アトラス。やはり只者ではなかったか」

黒咲もまたデニス同様、ジャックを評価する。ただしこちらに殺気はない。彼の底知れぬ強さを感じ取り、警戒している。

「見ているだけでも伝わった。今のあいづでは、どう足掻いてもあの男は倒せない」
「うん、黒咲の言う通りだね。最後の連続シンクロは僕も痺れたよ」

「待て。何故二人してそう思う？ 確かにジャック・アトラスは圧倒的だったが、遊矢も頑張っていただろう。それだけではない、あいづはデュエルの中で進化を見せた。可能性はあるはずだ」

「いやいや、結構厳しいと思うよ？ デュエルの前、ジャック・アトラスはペンデュラム召喚を知らなかった。それでこの結果なんだから。きっと次やる時、同じ戦術は通用しない」

「それだけではない。あの男はまだ何か隠していた」

「え？」

黒咲は最後のターンを思い出す。

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト》を遊矢が防ぎ、直後にチューナーを召喚して新たなシンクロ召喚。そして――

「ジャック・アトラスが伏せていた伏せカード。^{リバー}俺はあれが気になる」

「そう？ 確か、遊矢の最後のターンは――」

デニスは遊矢のラストターンを思い出す。

彼はシンクロ召喚を披露し、新たなモンスターでエースを召喚した――

「で、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》で《クリムゾン・ブレイダー》を戦闘破壊したんだったね。でもあの時、ジャック・アトラスは《マッド・デーモン》を守りたかっただろうから、ミラーフォースのような攻撃反応系の罠^{トラップ}だったんじゃない？ 後に備えて温存しておいたとか」

「……確かに、その可能性もあるか」

「？ どうしたのだ黒咲。お前の意見はデニスとは違うのか？」

「――いや、なんでもない。確かにその通りだ。あの状況なら、攻撃反応系の罠^{トラップ}」

を仕掛けるのが一般戦術だろう。そして、それを使うまでもなく、神遊矢は敗れた。それだけのことだ」

黒咲は不安を振り切るように、自分に言い聞かせる。

これより上が、あるはずないと。

「それより、肝心の柊柚子は見つけられたのか？」

「あー……あはは」

「……ぬう」

「……貴様ら」

露骨に目を逸らす二人に、黒咲は大きくため息をついた。会場には人が多かった。ただ見つけられなかっただけなら仕方ないだろう。だがこの二人は、間違いなく足を止めてデュエルを見ていた。感想を述べていること、分析していることが何よりの証拠だ。

「……いやしかし、探そうとすらしなかったお前にどうこう言われる筋合いはないぞ」

「俺は見つけたぞ」

「WHAT S!？」

「何!? ならば、柚子はどこに!？」

「そこまでは分からん。見つけたといっても一瞬だったからな」

黒咲は観客席を見回す。

エキシビジョン・マッチが終了し、明日からは“バトル・シティ”が開かれる。観客の中には参加者も大勢いたらしく、目に見えて人が減っている。

「だがこの場にいないということは、もう別の場所に移動したと考えるべきだろう。つまり……」

「! 柚子もこの大会に出場するということか!」

「十中八九、そうだろう。でなければ、わざわざこの場を離れる理由がない」

「ぬう……まあ、姿を確認できただけでも良しとすべきか」

「あはは! 駄目だよ権ちゃん、そんな顔してちゃ。大会に参加してるってことは、今度会う時はデュエルの相手ってことなんだから。その時はやっぱり笑顔で戦わないと」

デニス は心から楽しそうに笑う。

ジャック・アトラスと榊遊矢のデュエルを見て、彼の心にも火がついたのだ。二人のデュエルは間違いなく観客を魅了した。いつもの遊矢のデュエルとは異なっていたが、あれは間違いなくエンタメと言える試合だった。

今度は自分の番。自分がこの会場を盛り上げるのだと、デニスは気合を入れた。



榊柚子は、とある選手の控え室の前で立ち止まっていた。

プレートに書かれている名前は“榊遊矢”。エキシビション・マッチで、ジャッ

ク・アトラスと戦った決闘者^{デュエリスト}。

「……………」

柚子は扉の前でこくりと喉を鳴らす。ずっと会いたいと思っていたはずなのに、いざ目の前にすると足が進まない。

そも、どう声をかけたらいいのか。

榊遊矢はジャック・アトラスに敗北した。完膚無きまでに。新たな力である“シ

ンクロ”を披露してなお、あの男には一撃しか与えられなかったのだ。

「……落ち込んでる、よね」

扉に手をかける。

……離す。

もう一度手をかける。

……そして離す。

それを繰り返し、はや十分。

「って、あーもう！　なんでこんなに緊張してるのよ！　相手は所詮遊矢じゃない。あいつはただの……っ、ただの、幼馴染なんだから！」

「全くもってその通りだぜ」

「きゃああああ——!?」

耳をつんざく絶叫の後、柚子は恐るべき俊敏性を発揮した。

背後の少年から全力で距離を取り、何故かハリセンを構えて臨戦態勢に入ったのだ。

「ユーゴ！　あんたいつからそこに……!」

「ついさっきだよ。いや、ホント探したぜ。試合が終わった途端、急にどっか行っちゃまうんだから。……で、ここがあいつの部屋か」

「……うん」

「なんで入らねえんだ？　しばらく会ってなかったんだろ？」

「そうだけど……遊矢、きつと落ち込んでるし。なんて声をかけたらいいか、分かんなくて」

「ふーん。別になんでもいいと思うけどな、俺は」

「なんでもって言われても……」

「じゃあ、黙ってればいいだろ」

「そういうわけにはいかないでしょ！　もう、相変わらず分かってないんだから！」

「分かってねえのは柚子の方だろ？　そりゃ、相手が女だったら駄目かもしれないないけどさ。男の場合はそれでいいんだって」

「それでいいって……そんな単純な」

「だから、単純なんだよ男って生き物は。気の利いた台詞はいらねえ。とりあえず

姿さえ見せれば飛びつく。それが男だ」

「それはユーゴだけだと思ふよ？」

柚子は以前、ユーゴが自分に飛びかかろうとしたことを思い出した。

彼には想い人がいる。名前は「リン」。彼女もまたセレナや瑠璃同様、柊柚子と同じ顔をしているらしい。

要するに、シャワー上がりの柚子をリンと間違えて飛びかかろうとした、ということだ。

「んなことないって！ 仮にそうだとしても、あいつだけは例外だ。俺とそっくりな顔してるから、きっと柚子のことが好きはずだ。だから、姿を見せれば飛びかかる」

「どんな理屈よそれは！ というか、それはそれで私が困るんだけど！」

「え？ なんで？」

「なんでって……だって、そういうのはまだ早いっていうか、心の準備が……いや、じゃなくて！ こんな公衆の面前と抱きつかれたら誰だって困るでしょ！」

「？ 公衆の面前？」

ユーゴはさつと辺りを見渡す。

ここらには選手の控え室がずらりと並んでいる。あらかじめ予約をとっていた選手のみが使える特別な部屋だ。当然防音機能付き。廊下でいくら騒いでも中には聞こえない。

そして幸運なことに、廊下自体の人通りは少ない。

「よし、大丈夫だな」

「大丈夫じゃない！ とにかく、遊矢はユーゴと違って繊細なの！ 叩いたら直っちゃうような貴方とは違うのっ！」

「いーからいーから。とりあえず開けるぞー」

「ええっ!? ちょ、ちょっと待って！ まだ心の準備が——」

「いーからいーから」

そうしてにこやかに微笑みながら、ユーゴは扉を開けたのだった。

——しかし、遊矢の反応は二人の予想とは異なっていた。

扉は開いた。だが、肝心の遊矢は二人に目もくれず、ベッドに座ったまま一枚のカードを見つめていた。

「……遊矢？」

「んじゃ、俺はこれで」

「え、ええ？ ちょっと、ユーゴ……」

「俺がいたら邪魔だろ？ こっから先はお前の仕事だ。そんじゃ、今度はハイウェイで会おうぜ、柚子」

ユーゴは最後にそう言い残し、扉を閉めて部屋の前から去っていった。残ったのは柚子と遊矢のみ。だが、再会を喜べる空気ではない。

沈黙は長く続かず、来客に気づいた遊矢はやがて、柚子に話しかけた。

「……柚子。『エンタメ』って、なんだと思う？」

「え？」

「俺は、皆を笑顔にすることだと思う。デュエルで皆を楽しませて、笑顔にする。それが……父さんのエンタメだ」

「――」

それは、明らかに自分の意見を言っている様子ではなかった。

意見を述べるというよりは、まるで自分に言い聞かせるような、自己暗示のよう

な眩きだった。

「……なんてな。ごめん、いきなりこんなこと言われても困るよな。折角の再会なのにさ。とりあえず、適当に座ってくれ」

「……うん」

柚子は備え付けられた椅子に腰をかけ、もう一度遊矢を見つめた。

遊矢はというと、やはりまだ一枚のカードを眺めている。

表情は曇っている。柚子には、ただジャックに負けて落ち込んでいるのではないように思えた。

「遊矢。何があったのか訊いてもいい？」

「……いや、別に。ただ、ジャックに負けただけだよ」

「本当にそれだけ？」

「……まあ、他にも色々あったけど」

「うん」

「……」

再び沈黙。それでも、柚子は急かさない。遊矢が次に紡ぐ言葉を、じつくりと待

ち続ける。

最初はだんまりを決め込んでいた遊矢だったが、柚子の忍耐にやがて痺れを切り、自身の悩みを打ち明けた。

「……俺。この次元に来る前に、母さんからこのカードを貰ったんだ」

遊矢は、ずっと眺めていたカードを柚子に手渡した。

それは一枚の魔法カード^{マジック}。満面の笑顔が広がった世界。

「《スマイル・ワールド》？」

「カードとしての効果はちよつと頼りないけど……父さんと母さんの、馴れ初めのカードだって」

「へー。いいカードじゃない。《スマイル・ワールド》、笑顔の世界か。フィールドのモンスター一体につき、全てのモンスターの攻撃力を上げる……？」

「はは。ホント、笑っちゃうようなカードだよな。自分だけならともかく、相手まで上げちゃったら意味ないのに。」

——でも。そういうの、凄くいいと思った。今の俺じゃ、そのカードは全然使いこなせないけどさ。いつかちゃんと使いこなせるようになって、皆を笑顔にできた

らなつて。

……そう、思つてたんだ」

「思つてたつて……今は違ふの？」

「……分からない。全然、何一つ分からないんだ。俺のエンタメは……独りよがりだから」

遊矢は悔しげに齒噛みし、拳を強く握り締めた。

彼の頭には、あの時のジャックの言葉が未だに残っている。おそらくそれは、榊遊矢がエンタメを志す限り一生消えないだろう。

「独りよがりつて……エキシビション・マッチでは皆を笑顔にできたじゃない」

「あれは父さんのエンタメじゃない！」

遊矢は顔を下に向けたまま、これ以上ないほどの声量で叫んだ。
声には焦りと苛立ちが大きく表れている。

「遊矢……？」

「あ……ごめん。最低だな、俺。イライラして人に当たるなんて」

「ううん。ねえ、一つ訊いてもいい？ エキシビション・マッチのデュエルは、遊

矢のお父さん……“神遊勝”のエンタメじゃなかったの？」

「……うん。別に、父さんのエンタメを極めたわけじゃないけど、あれは絶対に違ってた。父さんのエンタメじゃなかった。でも、最後には皆、笑顔になってんだ」

目を瞑れば鮮明に思い返せる。最後のあの景色を。全員が身を乗り出し、もみくちゃになりながらも笑っていた観客達を。

「多分、あれがジャックなりのエンタメだったんだと思う。決闘者同士が^{デュエリスト}全身全霊でぶつかり合うデュエル。相手に実力以上の力を引き出させて、その上で正面から打ち破るパワー・デュエル」

「そうね。じゃあ、もしかして遊矢も？」

「ああ——シンクロ召喚。ジャックが相手じゃなかったら、きっとできなかった」
遊矢はデッキから二枚のカードを取り出した。

一枚目は《貴竜の魔術師》。デュエルの直前、不動遊星から託されたチューナーモンスター。“貴竜”とは風水言語の一つであり、生き生きとした土地のことを指す。ここには多くの「気」が集まり、住む人間に様々な利益を与えるという。初め

は普通の効果モンスターだったが、いつの間にかペンデュラムモンスターに変化している。

二枚目は《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》。ジャックとのデュエルにて開眼した新しい力。

「シンクロを習得できたのは素直に嬉しいけど……同時に分からなくなったよ。これは父さんのエンタメじゃなくて、ジャックのエンタメで得た力だ。そして、シンクロ次元の人はこの力で盛り上がってた。

——だから。もしかしたら、俺は」

そこまで言って、遊矢は言葉を止めた。ここから先は言うてはいけなないと、自分でブレーキをかけたのだ。

「遊矢は、そこまで考えてどう思ったの？」

柚子は答えを急かす。本人の中では既に答えは出ている。この問題に先延ばしは許されない。

何故ならこれは、デュエル神遊矢の人生の根幹を揺らす部分だからだ。

「……俺は」

恐怖に怯え、両手を組む。

その様子を見て柚子は立ち上がり、今度は遊矢の隣に座り込んだ。

……それで少しは気持ちが和らいだのか。遊矢は覚悟を決め、ひと思いに胸中の不安を吐き出した。

「――俺のデュエルは。父さんのエンタメは、間違ってたんじゃないかって」

「……どうしてそう思ったの？」

「だって、そうじゃないか。父さんのエンタメは全然駄目で、ジャックのエンタメは受けていて。」

でも、そんなことは絶対ないはずなんだ。スタンダード次元では、父さんのデュエルは絶賛されてたんだから」

「そうね……でも、それって矛盾してない？」

「うん。だから、自分でもよく分からなくって。」

俺は、デュエルで皆を笑顔にしたい。でもそのためには、ジャックのエンタメじゃないと駄目で。だけど、認めるわけにはいかなくて」

「抵抗があるのね。これまで遊矢はずっと、“神遊勝”のエンタメを目指してたか

ら。今までの自分を否定するみたいで」

「……ああ。大体そんな感じかな。すごいな柚子は。なんでもお見通しか」

「これでも幼馴染ですから。」

……でも、そっか。じゃあ簡単じゃない。どちらのエンタメが正しいか分からないなら、いっそ両方極めちゃえばいいのよ」

「——は？」

柚子は得意げに——これ以上ないほど自信満々に言い放った。

どちらが正しいか分からない。ならばどちらも極めよう、と。

……強欲にも程がある。

「そんな、無茶言うなよ。俺はそこまで器用じゃない。両方なんて、無理に決まってる」

「じゃあ、どちらも諦めるしかないわね」

「……お前、真面目に話聞いている？ 俺は父さんみたいなエンタメデュエリストになるんだって、何度も言ってるだろ？」

「あはは、ごめん。遊矢、昔からそれが口癖だったよね。いつか父さんみたいにな

るんだーってさ」

ニコニコしながら、柚子は昔を思い出す。

「いつもゴーグルかけて泣いてた遊矢が、今ではすっかり一人前になっちゃって。人間って、変わろうと思えば案外簡単に変われるのかもね」

「む、昔のことは別にいいだろ。今はもう、そんな簡単に泣かない」

「ホントかなー。遊矢、結構いっぱいだったよ。私が来なかったらまた一人で泣いてたんじゃない？」

「だから泣かないって！ もうそんな子供じゃないぞ、俺」

「……それじゃあ、大丈夫ね」

柚子は柔らかく微笑んだ後、立ち上がり、遊矢と向き合う。

彼女に遊矢の悩みは分からない。実際にジャックとデュエルをした遊矢と、見てただけの柚子。理解はできても共感はできない。

だが、だからこそ——本人とは違う立場にいるからこそ、伝えられる言葉だってあるのだ。

「……柚子？」

少女は提案する。自分の想いを伝えるために。

ほかの誰でもない——榊遊矢の笑顔を、もう一度見るために。

「遊矢。私とデュエルしましょう」

……《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》の(2)の効果では《幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ》の(1)の効果が無効にできないと知って只今絶望中。

……デュエル構成練り直しと。

たった二人のエンタメ・デュエル

遊矢と柚子のデュエル回。茶番臭がハンパない。

注意…アニメオリジナルカード、完全オリジナルアクションカードあり。

始めはアクションカードもアニメ限定で書いてただけど、無理だと思ってすっぱり諦めたよ……。

アクション・デュエルの構成難しい。お互いに使うカードが数枚増えるわけだから、当たり前といえば当たり前なんですけども。

シンクロ次元とスタンダード次元は、文化が根本的に違う。それが最も顕著に表れているのは、やはりデュエルだろう。古代エジプトにおける魔術師の決闘を起源とし、時代と共に独自に進化を遂げたのだ。

デュエルの形式が異なれば舞台も異なってくる。

舞網市のデュエルフィールドは、例えるなら運動場。地形は質量を持ったソリッド・ビジョン——“アクション・フィールド”によって様々に変化するため、広いこと、そして何より“何もないこと”が求められる。

対してここ、シンクロ次元におけるデュエルフィールドは文字通りレース場。中央にスタンディング用のフィールドが並び、その周囲を専用コースが囲んでいる。D ホイラーによっては時速数百キロを維持して走ることもあるため、舞網市とは比べ物にならないほど広く大きい。

「客席でも思ったけど、こうして立って見ると本当に広いのねー。ここまで来るだけでも一苦勞じゃない」

柊柚子は空になった席を見回しつつ呟いた。

時間帯は夜。大会参加者は宿を決め、明日に備えて休む頃。街灯の明かりがフィールドを照らし、空には微かだが星が見える。人口の明かりが無ければ、きっと満点の星空を拝めたことだろう。

「ほら遊矢、こっち来なさい。嫌がっても駄目だからね」

「ええ……ちよっ」

紳遊矢は手を引っ張られ、そのまま強引にデュエル場まで連れて行かれた。

場所は当然中央。時間が時間なら、観客全員の視線が集まる特等席だ。

「柚子、頼むから離してくれよ。俺も柚子も明日から試合だろ？ 今日俺、ジャックとデュエルして疲れてるし、なるべく早く休みたいんだけど」

「だーめっ」

柚子は笑顔で封殺する。

その暴虐不尽な振る舞いに、遊矢は諦めて溜息を漏らした。

「今更駄々をこねても駄目。ここまで来ちゃったんだから、いい加減観念しなさい」

「……今すぐだとは思わなかったんだよ。俺はてっきり、明日やろうって意味だと」

「でもそれなら、わざわざコースを見たい、なんて言わないと思うけど？」

「それは、柚子には勝ち残る自信があるんだなって意味で、今のうちに本選のコースを見学したかったってことだよ」

「あー……そっか。うん、それはちょっとあるかも。これだけの大舞台で遊矢とデュエルできたら、きっと楽しいと思うから」

「……いや、それは」

遊矢は言葉を濁し、柚子から視線を逸らした。

以前までなら肯定していただろう。しかし、今の彼にはできない。彼のデュエルはジャック・アトラスによって否定された。『独りよがり』『押し付けがましい』と指摘され、かつ、それは真実であると身を持って実感したのだから。

「……遊矢」

柚子は一つ確信する。このままでは、榊遊矢は勝ち残れない。この大会にはない。もっと大きな意味で、彼は勝ち残れない。

デュエルで皆を笑顔にする。それは幼稚だが、とても素晴らしいことだと柚子も思っている。

だが——誰かを笑顔にしたいと願う人間が、笑顔になれないのは間違ってる。

「遊矢、デュエルをしましょう。私、貴方に伝えたいことがあるの」

「伝えたいことって……だったら、きちんと言葉にして言ってくれよ」

「ううん、言葉じゃ駄目。それだけじゃ、この気持ちは半分も伝わらない。何より、貴方自身に気付いて欲しいの」

「気付いてって……何に？」

「ごめんなさい、ここから先は言えないわ。どうしても知りたかったら、このデュエルを受けて」

柚子はデュエル・ディスクを展開し、構える。

遊矢にはますます分らない。何故ここまで自分とのデュエルにこだわるのか。デュエルがしたいなら今じゃなくてもいい。明日から大会であることを考えると、寧ろ今日は早く休み、朝早くにやる方がいいに決まっている。

ともあれ、ここまで来たら逃げられないし止められない。遊矢はこれみよがしにもう一度溜息をついた後、渋々とディスクを構えた。

「分かったよ。このデュエル、受けるよ」

「ありがと。でも待って。私達、何か一つ忘れてない?」

「……忘れてるって、何を?」

「私達はスタンダード次元の決闘者なのよ? デュエリスト だったら、デュエルの前にやることがあるでしょう?」

「デュエルの前……ああ、そっか」

—— “アクション・デュエル”。フィールド魔法である “アクション・フィールド

ド”を展開し、専用の魔法カードである “^{マジック}アクションカード” をばらまく。決闘者達^{デュエリスト}はモンスターと共に地を蹴り、宙を舞い、これらを拾って戦う。スタンダード次元ではライディング・デュエルの代わりに、この “アクション・デュエル” が主流となっている。

遊矢達ランサーズのデュエル・ディスクは、専用の機器がなくても “アクション・フィールド” が展開できるよう改造されてあるのだ。

「アクション・フィールド、オン。《クロス・オーバー》」

ディスクを掲げた瞬間、世界に物質が付随される。

アクション・フィールドには様々な種類がある。童話で見るお菓子の世界、氷に包まれた氷河期、マグマで溢れる活火山など、多種多様だ。

しかし《クロス・オーバー》は、その中で最も地味な世界。通常の舞台に足場が加えられただけの、初心者用のステージだ。

「柚子、これでいいか？」

「そうね。あとは……笑いましょか」

「笑うって……もしかして、エンタメデュエルをしてくれていることか？」

「ううん、違う。寧ろ逆。エンタメとか、正しいとか、正しくないとか。そういうのは一旦忘れて、二人でデュエルを楽しみましょう。ここには観客もいないんだから」

「……そっか。そうだな。まあ、分かったよ」

遊矢は観客席を見回した後、ほっと一息ついた。

今の遊矢にとって、見物客が一人もいないのはありがたいことだった。これならば、たとえ独りよがりでも批判されることはない。

人がいない。たったそれだけでも、精神的な負担は確実に減るのだから。

「準備はいい？ それじゃ、しっかり合わせてね！」

柚子は笑顔を見せ、手を掲げる。

遊矢にはそれが眩しい。たとえ空が曇っていようと、人工の光で星が見えなくても、柚柚子だけは太陽のように輝いている。

「戦いの殿堂に集いし決闘者達デュエリストが！」

誰もいない会場で、柚子は一人声を張り上げる。

——決闘者達デュエリストが。

彼女はそこで口上を止め、合いの手を待つ。遊矢は苦笑を漏らしつつも、それに応えた。

「……モンスターと共に、地を蹴り宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション！」

「決闘デュエル——！！」

知らず、少年には笑顔が戻りつつあった。



柚子

LP::4000

遊矢

LP::4000

上空に集まったカードが弾け飛び、フィールド全域に散蒔かれる。

それらは全て アクション カード。デュエル中に拾って使用できる専用の魔法カードだ。マジック

「先行は貰うわ！ 私は手札から魔法カード、マジック《独奏の第1楽章》を発動！ 自分の場にモンスターがいない時、手札かデッキからレベル4以下の《幻奏》とつくモンスターを特殊召喚する！

さあ出番よ、《幻奏の音女アリア》！」

《幻奏の音女アリア》

星4〔光属性〕天使族〔攻1600〕守1200

「そしてこのカードは、自分の場に《幻奏》モンスターが存在する時、特殊召喚で
きる！」

来て、《幻奏の音女ソナタ》！」

《幻奏の音女ソナタ》

星3〔光属性〕天使族〔攻1200〕守1000

「特殊召喚されたソナタがいる時、自分の場にいる天使族モンスターの攻撃力、守備力は500アップする！」

そして特殊召喚されたアリアがいる時、《幻奏》モンスターは戦闘では破壊されず、効果の対象にもならないわ」

《幻奏の音女アリア》

攻1600 ↓ 攻2100

守1200 ↓ 守1700

《幻奏の音女ソナタ》

攻1200 ↓ 攻1700

守1000 ↓ 守1500

アリアとソナタの歌声が響き合い、ステータスが変化し、耐性が付与される。

単体では非力。だが二体、三体と集まれば互いをカバーしあい、重奏曲を奏でる。

それが《幻奏》モンスターの特徴。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド。さあ、次は遊矢のターンよ」

「俺のターン、ドロー！」

遊矢は手札からモンスターカードを二枚を選択し、掲げる。

「俺は、スケール2の《エンタメイトENラクダウン》と、スケール3の《エンタメイトENラ・パンダ》で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

二枚のカードを両隅にセットした瞬間、遊矢のディスクに“PENDULUM”と文字が浮かび上がった。

モンスターが出現し、二体はフィールドの上空へと浮上していく。

「早速ペンデュラム召喚ね。でも、そのスケールじゃ何もできないわよ？」

「このままだったらな。俺はここで速攻魔法《ペンデュラム・ターン》を発動！

セットされた^{ペンデュラム}モンスターのスケールを、ターン終了時まで1から10までの任

意の数値に変更する。これにより、《エンタメイトENラ・パンダ》のスケールを10に変更。

そして、ラ・パンダの^{ペンデュラム}効果発動！ 一ターンに一度、自身のスケールを一

つ上げることができる。この効果で、ラ・パンダのスケールは11に上がる！」

ラ・パンダが指し示す数字が一気に上昇した。

本来なら《ペンデュラム・ターン》の効果はターン終了時に消滅し、対象となったモンスターのスケールは元の数値に戻る。

しかし、ラ・パンダ自身の効果でスケールを上書きしてしまえば、《ペンデュラム・ターン》の効果は切れてもスケールは11のままでいられる。

「そっか、これなら。考えたわね、遊矢」

「ああ。これで、レベル3から10のモンスターが同時に召喚可能！」

黒く染まった夜空に、ペンデュラムの光が灯る。

振り子はアークを描き、ゲートを穿つ。

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！

ペンデュラム召喚！ 来い、俺のモンスター達！」

——モンスターが二体召喚される。

一つは光。一つは闇。万華鏡を持つ蠍と、二色の眼の龍。

「《エンタメイトカレイドスコープイオン》！」

そしてもう一体！ 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

エンタメイト
《EINカレイドスコープオン》

星6／光属性／昆虫族／攻100／守2300

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2500／守2000

「カレイドスコープオンの効果発動！ このターン自分のモンスター一体は、特殊召喚された相手モンスター全てに一回ずつ攻撃できる！

輝け、オッドアイズ！ “カレイド・ミラージュ”！」

「っ……！」

万華鏡の光を浴び、オッドアイズの眼はギラギラと輝き始める。

それに目を眩ませつつ、柚子は一目散に走り出した。狙いは一つ。攻撃を躲す

アクシオン
△カード。

「バトルだ！ 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》で、《幻奏の音女ソナ

タ》を攻撃！ “螺旋のストライク・バースト”！」

「きゃああ——っ！」

アリアの歌声で守られているため、ソナタは戦闘では破壊されない。しかし、《オッ

ドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』にとってそれは、大きな意味を持たない。

「オッドアイズの効果発動！ モンスターとの戦闘で与えるダメージを二倍にする！ 〃リアクション・フォース〃！」

「うっ——！」

柚子

LP:4000 ↓ LP:2400

「まだまだ行くぞ柚子！ 二撃目、今度はアリアに攻撃！ 〃螺旋のストライク・

バースト〃！」

「っ——そうはいかないわ！

アクションジック

▶魔法、《回避》を発動！ モンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

柚子は先程発動しそびれた ▶カードを使い、攻撃を回避した。

アクション

これが 〃アクション・デュエル〃の真骨頂。互いのプレイヤーはフィールドに散らばったカードを使い、デッキ構築の時点では想定していなかった戦略を立て、実行することができる。

「躲されちゃったか。俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

ドローした後、柚子は遊矢のフィールドを確認する。

遊矢の「ペンデュラムゾーン」には《エンタメイトラクダウン》がいる。ラクダウンの「ペンデュラム効果」は、

相手モンスターの守備力を下げ、更に自分のモンスターに貫通能力を与える効果。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は戦闘で与えるダメージを二倍にし、
エンタメイト

《エンタメイトカレイドスコピオン》はオッドアイズに全体攻撃を付与する。

これらのコンボにより、《幻奏の音女アリア》の戦闘破壊耐性が逆に働いてしまっている。

このままではただのサンドバック。柚子はこの状況を打破すべく、上級モンスターを召喚する。

「私は、アリアとソナタをリリース！」

天上に響く妙なる調べよ、眠れる天才を呼び覚ませ！ いでよ、《幻奏の音姫プ

ロディジー・モーツァルト》！」

《幻奏の音姫プロディジー・モーツァルト》

星8「光属性」天使族「攻2600」守2000

「っ——！」

タクトを持つ歌姫——プロディジー・モーツァルトは、柊柚子のエースの一体。攻撃力は《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を上回っている。

遊矢は攻撃に備え、^{アクション}カードを求めて走り出した。

「プロディジー・モーツァルトの効果発動！ 一ターンに一度、手札から天使族・光属性モンスターを特殊召喚できる！」

これにより、《幻奏の音姫ローリィット・フランソワ》を特殊召喚！」

《幻奏の音姫ローリィット・フランソワ》

星7／光属性／天使族／攻2300／守1700

「ローリィット・フランソワの効果発動！ 一ターンに一度、墓地から天使族・光属性モンスターを一体、手札に戻すことができる！」

私は墓地から《幻奏の音女ソナタ》を手札に戻し、ソナタの効果でもう一度特殊召喚！」

《幻奏の音女ソナタ》

星3／光属性／天使族／攻1200／守1000

「特殊召喚されたソナタがいる時、天使族モンスター^{エンタメイト}の攻撃力と守備力は500ポイントアップするわ！」

《幻奏の音姫プロディジー・モーツァルト》

攻2600 ↓ 攻3100

《幻奏の音姫ローリィット・フランソワ》

攻2300 ↓ 攻2800

《幻奏の音女ソナタ》

攻1200 ↓ 攻1700

「さあ、バトルよ！ まずはローリィット・フランソワで、^{エンタメイト}《~~EN~~カレイドスコアピオン》を攻撃！」

「っ……あった！」

ローリィット・フランソワの音波攻撃を受け、カレイドスコアピオンが破壊される。

その余波を受けつつも、遊矢はかろうじて ^{アクション}△カードを拾った。

「続けていくわよ！ プロディジー・モーツァルトで《オッドアイズ・ペンデュ

ラム・ドラゴン》を攻撃！ “グレイスフル・ウェーブ” ！」

「させない！」 アクションマジック ▶魔法《不動》！ このターンオッドアイズは戦闘、及びカード

ド効果では破壊されない！」

「でも、ダメージは受けてもらうわ！」

プロディジー・モーツアルトの攻撃により、遊矢のライフが削られる。しかしその数値は微々たるもの。《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》もまた健在だ。

遊矢

LP:4000 ↓ LP:3400

「どうだ、柚子。俺の場にはまだオッドアイズがいる。これならもう攻撃できないだろう？」

「それはどうかしら。これを見なさい、遊矢！」

「え？」

柚子は得意げに一枚のカードを見せる。

裏面には大きく“A”の文字。即ち アクション ▶カード。遊矢が アクション ▶カードを拾っている

間に、柚子もまた アクション ▶カードを拾っていたのだ。

それも攻撃を防ぐカードではなく、“追撃”のカードを。

「まさか、^{アクシヨン}△カード!？」

「そうよ! 私は^{アクシヨンマジック}△魔法《セカンド・アタック》を発動! 戦闘を行った自分

のモンスターの攻撃力を800ポイント上げて、もう一度バトルできる!」

「なっ——!」

《幻奏の音姫プロディジー・モーツァルト》

攻3100↓攻3900

「いくわよ! プロディジー・モーツァルトで、もう一度攻撃! グレイスフ

ル・ウェーブ!」

遊矢

LP:3400↓LP:2000

「ぐっ——……!」

遊矢はモンスターの後ろに隠れ、ダメージを堪え続けた。

先程発動した^{アクシヨンマジック}△魔法の効果により、このターン《オッドアイズ・ペンデュラム・

ドラゴン》は破壊されない。しかしダメージは大きい。無傷の状態から一気に半分

を持っていかれた。何より驚愕すべきは、攻撃力2500のオッドアイズがいるにも関わらず、ライフを奪った手段が全て戦闘ダメージである点だろう。

「バトルフェイズ終了時、『セカンド・アタック』の効果は切れて、攻撃力は元に戻るわ。

私は更にもう一枚カードを伏せて、ターンエンド」

《幻奏の音姫プロディジー・モーツァルト》

攻3900 ↓ 攻3100

音姫達の猛攻が終了し、ようやく遊矢のターンが回ってくる。

流れは柚子にある。ペンデュラムモンスターは何度倒されても復活するが、それだけでは力で押し切られる。

「……はあ。やっと終わったか。それにしても、柚子は相変わらずだな。ストロングっていうか」

「あっはははー……——それはどうも」

「っ!？」

地獄耳恐るべし。ちょっとした眩き程度だったのだが、柚子には聞こえてしまっ

たらしい。

——その時、遊矢には幻聴が聞こえた。

ゴゴゴゴ、と地面が割れるような、隕石が落ちたような——それとも火山の噴火だろうか……？

いずれによ、地雷であることは間違いなかった。

当然か。年頃の女の子がストロングと揶揄されたら誰だって怒る。

……たとえ本人にその気がなく、純粹な賛美だったとしてもだ。

「じゃ、じゃあ行くぞ。俺のターン、ドロー！」

「はつきり答えなさい！ 遊矢、ストロングってどういう意味よ！」

「ふ、深い意味はないよ！ 強いなって思っただけ、それだけだから！」

「——あっそう」

「あっ」

言葉を間違えた？ 言い方の問題？ 思うこと自体がアウトだった？

——否、どれも無い。どれでも同じ。何を言っても、きっと同じ結果になっていた。

「いーわよ、じゃあかかってきなさい！ 貴方が勝手につけた“ストロング”の異名通り、力パワーで振じ伏せてやるわ！

聞いているの遊矢！ 目を逸らさない！ こっちを見なさい！ いくらオッドアイズが、ペンデュラムモンスターでも、所詮は攻撃力2500。そんなひ弱なモンスターじゃ私には勝てないわよー！」

「……………」

遊矢は思考を停止し、かつての自分を思い出す。

ストロング。その場の勢いだったとはいえ、なんて言葉を口走ってしまったのか。当たり前だと思っていたもの。目の前にいた少女の強さを、あの時の自分は分かっていなかった。鬱陶しいと思うことだってあった。この柊柚子という女の子が、もっとお淑やかな子だったらなあと。

——けれど。今はただ、その強さに感謝を。

「……あはは」

「？」

突然の笑い声に、柚子は困惑する。

遊矢が笑ってくれた。それはとてもいいことだし、彼女自身も望んでいたことだ。だが、どうしてこのタイミングで笑ってくれたのか、彼女には今ひとつ分からなかった。

「遊矢、どうしたの？ 何か悪いものでも食べた？」

「なんでそうなるんだよ！ 確かに、そこまでいいもの食べてなかったけど……カップ麺ばかりだった」

「？ どういうこと？」

「ああいや、何でもない。ただ、柚子は凄いなあって思っただけだよ」

「凄い？ 料理のこと？」

「うーん……まあ、それもかな。それも含めて全部。——柚子はさ。本当に凄いよ」

万感の思いを込めて、遊矢はそう言った。

真正面から尊敬の眼差しを向けられ、柚子は赤面する。

挑発したかと思えば急に笑い、笑ったかと思えば褒め殺し。柚子としては嬉しい変化なのだが、こうもコロコロ変えられると調子が狂う。

「なによ、いきなり褒めちゃって。そんなこと言われても、私はまだ怒ってるんだ

からね！」

「だから、深い意味はなかったんだって。

……柚子は、凄い。あまりにも凄すぎて、俺には眩しい。俺はきっと、お前みたいに強くなれない。ジャックのようにも、父さんのようにもなれないんだ」

「遊矢……？」

そうして、榊遊矢は弱さを認めた。不可能だと認めた。

笑いながら。どうあがいても、父のようにはなれないと。

「でも……よく考えたら、それは当たり前のことだった。だって俺は、柊柚子じゃない。ジャック・アトラスじゃない。榊遊勝じゃない。

……エキシビジョン・マッチでも、ジャックは言ってたよ。所詮誰かの真似事じゃ、オレには勝てないって」

誰かの真似をする。それ自体は間違ったことではない。この世のありとあらゆるものは、既存のものを改良して成り立っている。このデュエル・モンスターズだって、元はといえば古代エジプトの決闘をベースに作られたのだから。

だが、それでは限界があるのだ。最後の壁を乗り越えるためには、自分なりの答

えを見つけないといけない。

遊矢は笑顔で問いかける。既に分かりきった答えを。

「柚子。俺は将来、エンタメデュエリストになるよ。でも、俺にはどうすればいいか分からない。俺は、誰のエンタメを目指せばいい？」

「……私は」

その問い掛けに、柚子はほっとした。泣きそうになるくらいに。

それでも今は堪えた。今は笑おう。このたった二人のエンタメデュエルを、楽しいものにするために。

「私は、“神遊矢”のエンタメが見たい」

「——かしこまりました」

遊矢は仰々しく礼をした後、リアル・ソリッド・ビジョンの足場を軽やかに移動し、やがて頂上に辿り着く。

ペンデュラムの光が灯る空を指差し、誰もいない会場で声を張った。

「レディース、エーンド、ジェントルメン！ 只今より始まりますは、ワタクシ神遊矢による、神遊矢にしかできない、神遊矢だけのエンタメ・デュエル！」

短い間ですが、どうぞご堪能ください！

……なーんてな」

「あはは、おっかしい」

赤の他人が見れば、とんだ茶番に映ることだろう。

だが観客はいる。たった一人の寂しい席だが、確かにいるのだ。ならばその期待に応え、心ゆくまで楽しませるのがエンタメデュエリストだ。

「それじゃ行くぞ、柚子！」

——揺れろ、魂のペンデュラム！ 天空に描け、光のアーク！

ペンデュラム召喚！ 来い、俺のモンスター達！」

天空の孔より、再びモンスターが現れる。

光属性と水属性。先程破壊された一体と、たった今ドロしたもう一体。

「もう一度来い、《エンタメイトENカレイドスコープオン》！」

続いて、《エンタメイトENマンモスプラッシュ》！」

《エンタメイトENカレイドスコープオン》

星6／光属性／昆虫族／攻100／守2300

エンタメイト
《EMマンモスプラッシュ》

星6\水属性\獣族\攻1900\守2300

「新しいモンスター……!?!」

「お楽しみはこれからだ！ 俺は《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》と、
エンタメイト
《EMマンモスプラッシュ》をリリース！

二色の眼の龍よ！ 巨獣のしぶきをその身に浴びて、新たな力を生み出さん！」
遊矢はエクストラデッキから一枚のカードを取り出す。

獣を宿す神秘の龍。二つの魂は混じり合い、融合し、新たな命となりて誕生する。

「いでよ、野獣の眼光^{まなこ}りし凜猛なる龍！ 《ビーストアイズ・ペンデュラム・ド

ラゴン》！」

《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星8\地属性\ドラゴン族\攻3000\守2000

「来たわね、ペンデュラム融合！」

「まだまだ！ ここでエンタメイト
《EMカレイドスコピオン》の効果を発動！ このター

ン、《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は、特殊召喚されたモンスター

全てに攻撃できる！ “カレイド・ミラージュ”！」

龍の瞳に万華鏡の光が宿り、野獣の咆吼が轟く。

ビーストアイズの攻撃力は3000。プロディジー・モーツァルトにはわずか100届かないが、それでも他の二体に攻撃すれば決着する。

「バトルだ！ 《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》で、《幻奏の音女ソナタ》を攻撃！ “ヘルダイブ・バースト”！」

「くうっ——!!」

柚子

LP:2400 ↓ LP:1100

「ここで、ビーストアイズの効果発動！ 戦闘で相手モンスターを破壊した時、素材となった獣族モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「まだよ！ ^{トラップ}罠発動、《ブレイクスルー・スキル》！ 相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする！」

追撃のプレスを放とうとした瞬間、^{トラップ}罠のエフェクトによって遮られた。

野獣の名を冠するだけあって、その能力は非常に攻撃的だ。前のターンで柚子が

この罠^{トラップ}を引いていなければ、ここで負けていただろう。

「やるな、柚子。でも、ソナタがいなくなったことで《幻奏》モンスターの攻撃力は下がった。更にビーストアイズは、カレイドスコープの効果がまだ攻撃ができる。さあ、これをどう躲す？」

「こうするわ！ 罠^{トラップ}カード、《奇跡の残照》を発動！ このターン、戦闘で破壊されたモンスター一体を、墓地から特殊召喚する！」

《幻奏の音女ソナタ》を、守備表示で特殊召喚！」

《幻奏の音女ソナタ》

星3 光属性 天使族 攻1200 守1000

「これで私の《幻奏》モンスターの攻撃力は元に戻るわ！」

「甘いぞ柚子。ビーストアイズはこのターン、特殊召喚された全てのモンスターに攻撃できる。ソナタを特殊召喚しても、もう一度攻撃すればいいだけだ」

「ええ、分かってるわ。勝負はここからよ。ほら、遊矢も」

「え？」

「私だけ」^{アクション} カードを使っても盛り上がらないでしょ？ だから、遊矢も自分の

カードを探して」

「わ、分かった」

柚子に急かされ、遊矢もまた アクション ♡カードを探し始めた。

カード自体はあちこちに散らばっている。見つけるだけならそこまで苦ではない。

問題は、今すぐ使えるかどうかだ。

「……あった！」

先に見つけたのは遊矢。躊躇いなく、拾ったカードを発動する。

アクションマジック 「♡魔法、《ペネトレイト》！ 自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃

した時、攻撃力が守備力を超えていれば、貫通ダメージを与える！

これで終わりだ！ 行け、ビーストアイズ！ もう一度《幻奏の音女ソナタ》を攻撃！」

「それはどうかしら！」

柚子もまた走りながら アクション ♡カードを拾い、発動する。

アクションマジック 「♡魔法《回避》を発動！ ビーストアイズの攻撃を無効にする！」

「なっ——!?」

槍のように鋭く尖ったブレスを、ソナタは間一髪回避した。柚子は得意げに笑い、挑発する。

「ふっふーん。どう？」

「ぐっ……だけど、ローリット・フランソワの攻撃力は2800だ！」

行け、ビーストアイズ！ 三回目の攻撃、*“ヘルダイブ・バースト”*！」

柚子

LP:1100 ↓ LP:900

「くっ——やるわね、遊矢。これがペンデュラム融合の力ってわけ？」

「まあな。でも、お楽しみはまだまだこれからだ。ペンデュラムは可能性の振り子。

俺はこれからも、もっともっと進化する」

「私だってそうよ。さあ、今度はこっちが魅せる番。覚悟なさい遊矢！」

「ああ、来い。俺はこれで、ターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

カードを確認し、柚子はほくそ笑む。引いたのは彼女のデッキのキーカード。ビー

ストアイズと同じ“融合”の力。

「私は魔法カード《融合^{マジック}》を発動！ これにより、フィールドのソナタとプロディ

ジー・モーツァルトを融合！

流れる旋律よ。至高の天才よ。タクトの導きにより、力重ねよ！

融合召喚！ 今こそ舞台に、勝利の歌を！ 《幻奏の華歌聖ブルーム・ディー

ヴァ》！」

《幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ》

星6〔光属性〕天使族〔攻1000〕守2000

花卉が一枚ずつ開き、中から小さな歌姫が現れた。ソナタやプロディジー・モーツァルトとは違い、その姿は少女のように幼い。

「このターンで決着をつけるわ！」

バトル！ ブルーム・ディーヴァで、《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃！ “リフレクト・シャウト”！」

ブルーム・ディーヴァの音波攻撃に対抗し、ビーストアイズは灼熱のプレス“ヘルダイブ・バースト”を放った。

——ここで、《幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ》の特殊効果が発動する。

「ブルーム・ディーヴァは特殊召喚された相手モンスターと戦闘を行った時、相手モンスターを破壊し、元々の攻撃力の差分のダメージを与える！」

ビーストアイズの攻撃力は3000！ 遊矢、貴方に2000ポイントのダメージよ！」

「そうはいかない！ カウンター罠^{トラップ}、《ダメージ・ポラリライザー》！ 効果ダメージの発動と効果を無効にする！」

遊矢はセットしておいた罠^{トラップ}を使い、効果ダメージをかうじて防いだ。

とはいえ、状況は変わらない。次のターン、再度攻撃されたら遊矢のライフは尽きる。

「……《ダメージ・ポラリライザー》のもう一つの効果。互いのプレイヤーはカードを一枚ドロウする」

「上手く防いだわね。いけると思ったんだけどなあ。

……私はドロウしたカードを伏せて、ターンエンドよ」

「俺のターン、ドロウ！」

ドローした後、遊矢は長考する。

……《幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ》。柊柚子の融合^{エース}モンスター。

対して遊矢のフィールドには《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》、そ

して《^{エンタメイト}カレイドスコープオン》の二体。どちらも特殊召喚されたモンスター。

更に、ビーストアイズの攻撃力は3000。頼もしい攻撃力も、ブルーム・ディーヴァにとっては格好の的ではない。

「……ん？」

遊矢は足元のカードに気づき、それを拾った。裏面にはAの文字——^{アクション}アカード。

そのカードは、今の彼の心情をこれ以上ないほどの確に表していた。

このデュエルは、まさにこういうデュエルだ。ならば結果はどうあれ、このカードで逆転を狙うべきだろう。

「遊矢、どうしたの？」

「ん、なんでもない。」

俺は^{アクション}魔法《リスタート》を発動。自分の場のカードを全てデッキに戻す。戻っ

てこい、俺のモンスター達！」

全てが消える。ペンデュラムスケールの二体、ビーストアイズ、カレイドスコピオン。合計四体をデッキに戻し、何もかもを零に帰す。

これはリセット——否、リスタートだ。

「ペンデュラムスケールも、ビーストアイズも戻しちゃうなんて」

「大丈夫、これは戻っただけだ。ペンデュラムモンスターは、これまでの俺の積み重ね。無かったことにはしない。その上で俺は、俺だけのデュエルを見つけてみせる。」

《リスタート》の効果。デッキに戻したカード二枚につき、一枚ドローする」

遊矢はデッキの上に指を置き、祈るように問いかける。

“——応えてくれ”

《リスタート》によって戻したカードは四枚。遊矢は合計二枚のカードをドローした。

引き当てたのは《魔術師》二枚。絆のピースと始まりのピース。

「俺は、スケール1の《星読みの魔術師》と、スケール8の《時読みの魔術師》

で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

白と黒の魔術師がセットされ、上空へ浮かび上がった。

夜空に光が灯る。始まりの二体によって、閉じられたゲートは再び開く……！

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！」

ペンデュラム召喚！ いでよ、雄々しくも美しく輝く二色の眼！ 《オッドア

イズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

ペンデュラム振り子はアークを描き、三度モンスターが召喚された。

待っていたと言わんばかりに、神秘の龍は帰還する。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星7《閻属性》ドラゴン族《攻2500守2000

「更に俺は、手札の《きりゅう貴竜の魔術師》の効果発動！ このカードは、レベル7以上

の《オッドアイズ》モンスターのレベルを三つ下げ、手札から特殊召喚できる！」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》

星7 ↓ 星4

《きりゅう貴竜の魔術師》

チューナー

星3炎属性魔法使い族 攻700 守1400

「チューナーの《魔術師》？ これって——！」

「レベル4となった《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》に、レベル3の

《貴竜の魔術師》きりゅうをチューニング！

二色の眼の龍まなこよ。紅き炎をその身に纏い、次元を照らす星となれ！

——シンクロ召喚！

いでよ、大地を扶る紅蓮の龍！ 《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》

！」

《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》

星7炎属性ドラゴン族 攻2500 守2000

ドラゴンは紅蓮の炎を纏い、両目の輝きと共に生誕した。

暗闇の中でも燃え盛るその肉体は、太陽のように眩しい。

「これが、遊矢のシンクロ召喚……凄い、凄いよ遊矢！」

「えへへ……俺は、カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「え？ 攻撃はしないの？」

「ああ。メテオバーストの効果じゃ、柚子にダメージは与えられないからな」

《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》は、榊遊矢の他のドラゴンに比べて攻撃能力が低い。

……バトルフェイズ中、相手はモンスター効果を発動できない”

この場合、ブルーム・ディーヴァの効果ダメージは無効にできるが、永続効果——破壊されず、ダメージを受けない”効果は無効にできないのだ。

拳銃と弾丸に例えるなら、メテオバーストは弾丸を全て弾き飛ばせるが、拳銃そのものはどうにもできない。存在するだけで効果があるものに対しては無力なのだ。

「そう。だったら残念だけど、このデュエルもらったわ！」

私のターン、ドロロー！ このままバトルフェイズよ！」

「《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》がいる限り、相手はバトルフェイズ中にモンスター効果を発動できない！ これでブルーム・ディーヴァの効果を封じる！」

「それはどうかしら？ 私はここで、墓地から罠カード《ブレイクスルー・スキ

ル》を発動！」

「墓地から罠^{トラップ}!?」

《ブレイクスルー・スキル》は、モンスター効果をターン終了時まで無効にするカード。そしてもう一つ、このカードには墓地でのみ発動する効果がある。

「このカードを除外することで、相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。私は《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》を選択！」

罠カードの赤いエフェクトが《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》の全身を覆った。

炎の光は小さくなり、徐々に勢いが弱まっていく。

「これでブルーム・ディーヴァの効果は復活するわ！」

行け、《幻奏の華歌聖ブルーム・ディーヴァ》！ 《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》を攻撃！ 「リフレクト・シャウト」！

ブルーム・ディーヴァの歌声がメテオバーストを誘い、炎熱のブレスを放つ。

華の歌姫と火炎の龍。中々に凶悪な光景だが、結果は真逆となった。モンスター

効果によってメテオバーストは破壊され、遊矢のライフが削られる。

遊矢

LP:2000 ↓ LP:500

「更に罠^{トラップ}発動、《幻奏のイリュージョン》。これにより、ブルーム・デューヴァはこのターン二回攻撃ができる。遊矢の残りライフは500、ダイレクトアタックが決まれば私の勝ちよ！」

「それはどうかな！」

罠^{トラップ}発動、《コズミック・ブラスト》！ ドラゴン族シンクロモンスターがフィールドを離れた時、その攻撃力分のダメージを相手に与える！

《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》の攻撃力は2500。よって柚子、お前に2500のダメージだ！」

「ええ!？」

太陽は消えた。だが種火は消えない。

燦っていた火は炎となり、龍を象った。それは隕石のごとく降り注ぎ、召喚者^{ブレイヤー}に

直接ダメージを与える。

「これでフィニッシュだ！ 行け、《コズミック・ブラスト》！」

「きゃああああ——！！」

柚子

LP:900 ↓ LP:0

炎の一撃を受け、柚子は尻餅をついた。

——勝者は櫛遊矢。

アクション

▶カード、アクション・フィールドはその役目を終え、早々に消えていった。



「柚子、立てるか？」

「あ……う、うん」

遊矢は躊躇なく手を差し出し、柚子を助け起こした。

前回——舞網チャンピオンシップでは拒絶された。それでも懲りず、自然と手を差し伸べられるのは彼なりの強さだろう。

「ありがとう。柚子のおかげで、少し元気が出たよ」

「どういたしまして。答えは見つかった？」

「いや、正直に言うともまだ分からない。でも、一つだけ分かったよ。

父さんのエンタメとジャックのエンタメ。どっちかが間違ってるって思ってたけど、きつとそうじゃない。どっちも正しかったんだ。だってあの時——ジャックとデュエルした時、お客さんは確かに笑ってたんだから。

だから思ったんだ。俺は、俺だけのエンタメがしたい。父さんにもジャックにも真似できない、榊遊矢だけのエンタメで、皆を笑顔にしたいって」

その答えに、柚子は満足して微笑んだ。

エンタメという定義について、ここまで確固とした答えを求めていたわけではない。

これまで通り父親のエンタメを貫くか。それとも、ジャック・アトラスのエンタメに鞍替えするか。

彼女としてはどちらでも良かった。なんでも良かった。

——ただ、この少年に笑ってさえくれれば。

「……榊遊矢だけのエンタメ、か。うん、凄くいいと思うよ、私」

「とは言っても、具体的には何をすればいいのやら。問題は山積み……寧ろ増える気がするよ」

だがそれでいい。そういったことは、これから少しずつ学んでいけばいい。

幸いにもこの次元には多くの先導者がいる。

不動遊星。ジャック・アトラス。探せばもっと多くのデュエリストが挙げられるだろう。

ここはそういうところなのだ。

ネオ童実野シティ。人と人の絆を育み、次世代へと繋げる街。

——そしてまた、新しい絆が結ばれる。

「いいデュエルだったぜ、二人共」



“俺は、俺だけのエンタメがしたい。父さんにもジャックにも真似できない、榊遊矢だけのエンタメで皆を笑顔にしたい”

——ああ。それは、正しく独りよがりだ。

皆を笑顔にしたい？

なんて思いつが。なんて独善。そんなことは誰も頼んでいない。所詮は理想の押し付けだ。彼が目指すのは結局のところ、究極の“お節介”でしかない。

だが。

——だがそれは、決して間違いではない。

皆を笑顔にしたい。

それだけは疑うべくもなく、善い願いだ。

榊遊矢を否定する敵は当然のように現れるだろう。

何故なら、彼の理想に正解はない。エンタメの定義は捉え方・考え方次第でいくらでも変わる。

誰か一人、身近な人だけを笑顔にする。それなら可能だ。

だが、皆を笑顔にすることはできない。いつか必ずどこかで、越えられない絶壁にぶつかるだろう。

その上で、ジャック・アトラスは言ったのだ。“折れるな”と。

だから、榊遊矢は胸を張る。折れないことを誓う。

ずっと自分を見てくれていた、柊柚子という幼馴染に。

《コズミック・ブラスト》は遊星VSアキ（一戦目）で遊星が使ったカードです。クエーサーを初めとしたシンクロ龍と相性が良いように思えますが、発動ターンは特殊召喚できなくなるのでそこまで凶悪じゃないですきつと。LP:4000だとヤバイけど。

《幻奏》Sモンスターがいたら、柚子が遊矢にシンクロ教えてもらおう展開（＝柚子覚醒のフラグ建築）ができるんだが、まだまだ先になりそうだなー。というか

多分ないな。

デュエル終了後、誰かに

？「いいデュエルだったぜ、二人共」

とか言わせてしまったが、まだ誰かは決まっていぜ！

ストーリーメモ

A R C V 73 話視聴後

「これで……満足したぜ」

→モチベーション消滅の瞬間

元々この小説は、本編に対する不満やイライラを物語にただけだったのです。本編の遊矢が立ち直った今、モチベーションを維持するのは難しい。途中で失踪するくらいなら、多少強引でもキリがいいこのタイミングで終わらせるべきだと考えました。

←はメモ書きです。

「……やっぱり凄い。この人達、全員がフレンドシップ・カップの参加者なのね」
熱気に塗れた人混みの中で、柊柚子は呟いた。

ライディング・デュエル用のコースには色とりどりのD・ホイールがずらっと

並び、D・ホイーラー達はというと、バトル・シティ開幕までの時間を各々自由に過ごしていた。

といっても全く緩やかな雰囲気ではなく、ガラの悪そうな連中があちこちでメンチを切っている。

「なんとなく分かつてはいたけど、舞網チャンピオン・シップとは別物ね。全体的にピリピリしてる……？」

「そうだな。もしかしたらライディング・デュエルとアクション・デュエルの違いが、こういうところにも出てるのかもな」

遊矢は自分のD・ホイールを触りながら、軽くイメージする。

デュエルで皆を笑顔にする。言葉にすると簡単に聞こえるが、実際は尋常ならざる難易度だ。ただ強いだけではない。勝つだけでは達成できない。いやそもそも、この次元の決闘者相手に勝てるのかさえ分からない。

何しろ遊矢自身、ライディング・デュエルは初心者だ。同じような参加者は数多くいるが、この大会にはジャックとの対戦目当てで参加したベテランD・ホイーラーも紛れ込んでいる。

「ライディング・デュエル……かあ」

対して柚子は、桃色のD・ホイールを不安そうに撫でる。彼女にはライディング・デュエルの経験が一切ない。この次元に迷い込んでからは遊矢そっくりの人物“ユーゴ”と行動を共にしていたが、彼女自身がライディング・デュエルをするとはなかった。つまり、ぶっつけ本番でやるしかないということだ。

遊矢は思い出す。この次元に来たばかりの自分達を。

全ては“不動遊星”がきっかけだった。彼と出会ったおかげで、バラバラだった歯車は少しずつ噛み合い始めた。もし出会っていなかったら、おそらく何もかもが違う結果になっていただろう。もしかしたら柚子の立場に立っていたのは、ほかならぬ遊矢自身だったかもしれないのだ。

「ゆ、遊矢？」

ならばと、遊矢は柚子の手を握る。

そして提案する。不動遊星ほど上手くはいかないだろうが、それでも、少しは安心させられるように。

「柚子。最初のデュエルは俺と一緒にやらないか？ その方が経験も積めるし、緊

張も少しくらい誤魔化せるだろ？」

「一緒に？ 私と遊矢が？」

「ああ。名付けて、タッグ・ライディング・エンタメ・デュエル」だ。……ちよつと長いかな」

「でも、遊矢だってまだ経験浅いでしょ？ 私がいたら足手まといに……」

「その時はその時さ。一定以上の成績を出せば勝ち上がれるんだから、一回くらいは負けても大丈夫だよ」

「そうなの？ ……でもこの大会、タッグ・デュエルなんてできるのかな」

「その点は心配いらねーぞ。この大会は比較的自由度が高いからな。タッグは勿論、変則バトル・ロイヤルだってできる」

「？」

柚子の問いに答えたのは別の男だった。

黒いヘルメットを脇に抱え、茶色のライディングスーツ。顔にはイタズラでもされたのか、文字のような、あるいは模様のようなラインがこれでもとか刻まれている。

二人は知っていた。それは“マーカー”と呼ばれる印であり、犯罪者の刻印であることを。不動遊星にもマーカーはあったが、ここまでひどくはなかった。一体何をしたらここまでマーカーまみれになるのかは、この次元の人間でも分からない。柚子は警戒心をむき出しにして、遊矢の後ろに下がった。

「遊矢、この人……」

「大丈夫だ、柚子」

「え？」

ただ、遊矢は知っていた。

ガレージに飾ってあった一枚の写真。それに不動遊星、ジャック・アトラスと共に写っていた人物であると。

「えっと……もしかして、不動遊星さん知り合いの方ですか？」

「おお、よく分かったな！俺はクロウ。クロウ・ホーガンだ。お前、エキシビジョン・マッチでジャックとデュエルしたやつだよな。」

名前は……榊遊矢だったな。となると、もしかして後ろのが柊柚子か？」

「え？ 柚子のこと、知ってるんですか？」

「まあな。事のあらましは遊星から聞いてるぜ。随分と大変だったらしいが……ま、再会できてよかったじゃねえか」

「はい。遊星さんには色々とお世話になりっぱなしです」

「らしいな。ならお礼は、そのD・ホイールとデッキで払ってもらおうか」

「……デュエル、ですか？」

「ああ。折角だ、二人まとめて相手してやるよ」

「え——っ」

通常、デュエルは一对一か二対二で行われる。それはライディング、アクションを問わず同様である。

だからこそ、クロウの発言は二人を驚かせるものだった。一对二では、どうしてもアドバンテージに差が出来てしまう。バトル・ロイヤル形式でもタッグ・フォース形式でも、一人の方が圧倒的に不利なのだ。

「本当にいいんですか？」

「お前ら、どっちもライディング・デュエルは初心者だろ？ だったら問題はねえさ。このクロウ様に任せとけ」

「——いいわけないだろ。何言ってんだお前は」

また一人、クロウの後ろから人が駆けつけた。

長身の男だった。寒色系のライディング・スーツを着込み、脇には黄土色のヘルメットを抱えている。

「シンジ。お前もこのエリアに来てたのか」

「偶然だと思うけどな。で、クロウ。お前いきなり浮気か？ 一戦目は俺とやるって言ってただろ」

「悪い。けど、エキシビションであんな試合見せられちゃ、今のうちにやるしかねえと思っただけ」

「だとしても一対二は無理だ。ルールブック読んでねえのかよ」

「前回の時はできただろ？ 乱入にバトル・ロイヤル、なんでもありだったじゃねえか」

「そのシステムだと、徒党を組んで乱入を繰り返せば相手にターンを回さず勝ててしまうからな。それで問題になって、今回は禁止になったんだよ。できるのは通常のライディング・デュエルと、"タッグ・フォース" ルールのデュエルだけ。どう

してもやりたいなら、その辺のセキュリティに申請して許可を貰わないとな」

「はあ!? マジかよ……どうせ申請なんかしたところで、許可なんて貰えねえだろうしなあ」

「……えっと」

クロウとシンジの会話について行けず、遊矢と柚子は沈黙する。

どちらも成り行きで参加することになったため、詳しいルールまでは把握していなかったようだ。

「遊矢、どうする? 一対二は無理だって」

「そうだったのか……じゃあ、仕方ないな」

遊矢は腹を括り、クロウとシンジに向き合った。

柚子を一人にはしておけない。クロウとデュエルする。

これらを同時に満たす方法は一つだけ。遊矢と柚子にとっては無謀極まりない提案だ。クロウ・ホーガンは以前、不動遊星、ジャック・アトラスと同じチームで活躍していた。実力は折り紙つきだ。

それでも、もう一度ジャックとデュエルするためには、避けては通れない壁であ

る。

「クロウさん、シンジさん。俺達とタッグ・デュエルをしましょう」

「ええ!？」

真っ先に反応したのはクロウでもシンジでもなく、柚子だった。

「ちよっと遊矢。本気なの？」

「ああ。確かに、いきなりこの人達を相手にするのは厳しいと思う。でも、試したいことがあるんだ。そしてそれは、お前とのタッグでしかできない。

……頼む、柚子」

「う……私じゃないと、駄目なの？」

「ああ。他には考えられない」

言動は冗談レベルでぶっ飛んでいたが、遊矢の目は真剣そのものだった。

柚子はその気迫に気圧され、泣く泣く承諾した——してしまった。

クロウは、そんな遊矢を見てほくそ笑む。彼自身、こういう思考をする人間は嫌いではないのだ。

「どうやら冗談で言ってるわけじゃなさそうだな。

遊矢。一応聞いておくが、俺達がどういうチームか知ってて言ってるんだよね？」
「知ってるさ。クロウ・ホーガンとシンジ・ウェーバー。世界大会で活躍中のタッグ・チームだ」

「せ、世界大会!？」

再び柚子は驚く。

マーカーだらけのD・ホイラーは実は大物で、その大物相手に遊矢が喧嘩を売っている……声を荒らげるのも無理はない。

柚子はようやく遊矢の無謀さを理解する。初心者と世界レベルのベテラン。結果は初めから見えているようなものだ。

「そこまで知った上で俺達に挑むと？ どう足掻いたところで、大人と子供の遊びにしかならねえと思うが？」

「それはどうかな。デュエルはそんな単純じゃない。少なくとも、俺はそう信じてる」

「——ははっ、違いねえ。そんなじゃま、期待させてもらうぜ」

クロウは踵を返し、シンジと共に自分のD・ホイールの場所へ戻っていった。

面白い相手を見つけたと言わんばかりに、笑みを浮かべながら。

——かくして対戦相手は決定した。

榊遊矢、柊柚子と、クロウ・ホーガン、シンジ・ウェーバーによるタッグ・デュエル。

バトル・シティと化したこの街では、シティ全域でライディング・デュエルが行われる。これもまた、数十を超える戦いの一つに過ぎない。

大きな意味を持つか、それとも平凡な一試合として終わるか。全ては彼ら次第である。



以下、メモ。

『バトル・シティ編』

・遊矢・柚子

VS

クロウ・シンジ

ルールはタッグ・フォース式（重要）

遊矢・柚子。クロウ・シンジのコンビネーションに追い詰められるも、連続ペンデュラム召喚でなんとか対抗する。

（タッグ・フォース・ルールでは、ペンデュラムスケールは共有する）

ターンは

1・遊矢

2・クロウ

3・柚子

4・シンジ

の順番。

ラストターンで柚子が遊矢の《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》をペンデュラム召喚。

遊矢、遊星直伝のライディング・テクニクで^{アクション}△カードを拾いまくり柚子をサポート。

しかし、シンジも同じようにAカードを拾いまくり対抗する。完全にマリ○カー

ト。

ここでクロウが《月影のカルート》で反撃。これで終わりかと思いきや、柚子が“なにか”を発動して攻撃を取り消すorオッドアイズの攻撃力上昇。（“なにか”はご都合Aカード）

柚子「いくわよ遊矢！」

遊矢「あ、ああ！（それ俺のモンスターなんだけど、まあいいか）」

遊矢・柚子「“螺旋のストライク・バースト”！」

で今度こそフィニッシュ。遊矢Ⅱトマトラル。

勝者は遊矢・柚子。試合後クロウが柚子をからかう。

クロウ「よく考えたら勝てるわけなかったわH A H A H A！」（ハリセン受けながら）

・セレナ VS 炎上ムクロ

融合 VS スピード☆アクセルデッキ

ムクロのデッキは平たく言うなら超速（物理）バーン（カード）SPCデッキ。

炎上ムクロ、SPCをガンガン稼いでヒヤッハー！！！！！！

《融合》、《スペーススピード・フュージョン》はどちらもSPCが必要。セレナは終始圧倒される。

ラストターンで存分に《融合》を使って一矢報いるが、ムクロのエースに倒され敗北。

勝者は炎上ムクロ。ここでセレナの精神を徹底的に折り、覚醒フラグを立てる。

『オベリスク・フォース襲来』

・大会中に融合次元が侵略してくる。

遊星、大会を辞退して市民を守ることを優先する。

ジャックは頭に血が上り、同じようにキングの座を捨てようとする。

零児 「キング。どちらへ？」

ジャック 「キングではない。今のオレはジャック・アトラス。遊星^{あいつ}と同じ、この

街で育った一人の決闘者だ^{デュエリスト}」

零児 「しかし今は大会中。貴方がその席を離れば、問題になると思いますが」
ジャック 「知ったことではない。キングの座など欲しければくれてやる。今のオ

レには、そんなものよりも大事なことがある」

イエーガー「……お待ちください、ジャック・アトラス」

イエーガーに諭され、ジャックは「砦」となる。

市民を会場内に避難させ、その入口をジャックが仁王立ちで守るイメージ。

・遊矢、キレる。霸王化。逆鱗。

当然のように《霸王黒龍オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン》（以下オベリオン）で「ワンターンズ」をキルガ。

そして暴走。オベリス・フォースを片っ端から殲滅する。

「流石にやりすぎだろ」ということで、

逆鱗遊矢 VS 沢渡・セレナ・柚子

の変則マッチ開始。ターンは三人↓遊矢の順。三人は攻撃できないが、遊矢は攻撃できる。

各々エースを召喚するが、初手オベリオンで「ワンターンズ」を倒されかける。

途中で遊星乱入。《エフェクト・ヴェーラー》で効果を止める。

以下、華麗なるソリティア←

《エフェクト・ヴェーラー》の効果発動。

手札 4

遊星「俺のターン、ドロー！」

手札 5

《ジャンク・シンクロン》召喚、効果で《エフェクト・ヴェーラー》特殊召喚。

手札 4

墓地から蘇生したので《ドッペル・ウォリアー》特殊召喚。

手札 3

《ドッペル・ウォリアー》に《ジャンク・シンクロン》をチューニング。《アク

セル・シンクロン》、ドッペルトークン×2特殊召喚。

手札 3

《アクセル・シンクロン》を自分の効果でレベル7に。ドッペルトークンと《ア

クセル・シンクロン》で《スターダスト・ドラゴン》召喚。

手札 3

ドッペルトークンと《エフェクト・ヴェーラー》で《フォーミュラ・シンクロン》特殊召喚。効果でドロー。

手札4

遊星「アクセルシンクロオオオ！！！！！」

そして「*グンダ*」。*グンダ*→遊矢~~ザ~~……。

《Sp—オーバー・ブースト》×2、《Sp—ファイナル・アタック》
ブ○シド「馬鹿な！ 攻撃力6600の五回連続攻撃だと!？」

ここで遊矢は一旦フェードアウト。ヒーローとヒロインが交代する。

・遊星のガレージ（仮）でランサーズ集合。

柚子が正式にランサーズIN。

セキュリティのおかげで住民の被害は今のところゼロ（ここ重要）

しかしあちこちにオベリスク・フォースがいるので危険。

柚子「避難し遅れた人達を探しに行きましょう！」

というわけでランサーズを分断……ではなく班分け。

柚子・デニス（重要）

権現坂・黒咲

セレナ・沢渡

で別れる。

遊矢「zzz……」

零羅「看病」

零児・月影「情報収集」

・権現坂・黒咲 VS オベリスク（ry

ルールはタッグ・フォ（ry

デッキの相性最悪にも関わらず、安心安定のコンビネーションでオベフォ殲滅。
特に山場はない。

・セレナ・沢渡 VS バレット（ここ重要）・オベ（ry

ルールは（ry

沢渡は終始サポートに徹する。

セレナが覚醒する（雑）

勝者、セレナ・沢渡

・柚子・デニス

ユーリと遭遇。バトル・ロイヤル開始。

デニス「なあWんちゃってWおかしくって腹痛いわぁW」

デニス「楽しかったよ柚子WW君達とのエンタメごっこおWW」

ユーリ・デニス VS 柚子

柚子フルボッコ、そして攫われる。シンクロ次元からオベリスク・フォースが全員撤退する。

↓セレナは失敗したが、柚子を攫うことには成功した。

遊矢が起きる。主人公交代。曇る。

市民の被害はゼロ。しかし柚子はいない。

仲間は励まそうとするが耳を貸さない。権現坂でも不可能。

黒咲「おい、デュエルしろよ」

黒咲が遊矢と自然な流れ（？）でデュエル。

黒咲 VS 遊矢

簡単に言うとは遊矢イジメフェイズ。

黒咲「ユートは違ったぞ」

黒咲「あいつは瑠璃が攫われても、俺達と一緒に立ち上がった」

黒咲「貴様にそのドラゴンは相応しくない」

黒咲「戦う意思を持たぬというのなら、貴様はここで永遠に這い蹲っている！」
度々ユートと比較し、遊矢を挑発し続ける。

遊矢「何度も何度もユートとばかり……他の言葉を知らないのか？」

遊矢「俺はユートじゃない。榊遊矢だ！」

みたいな決め台詞と共に覚醒。BGM…揺れろ、魂のペンデュラム。

当たり前のようにカード創造。《ペンデュラム・コール》で《竜脈の魔術師》、《竜穴の魔術師》をサーチし、Pスケールをセッティング。

オッドアイズPをペンデュラム召喚、以下省略。

フィールドには《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》と《竜穴の魔術師》。

遊矢 「——これで、レベル7のモンスターが二体揃った」
 ㄱㄱㄱ

権現坂 「レベル7が二体……まさか！」
 ㄱㄱㄱ

権現坂、以前の逆鱗遊矢を思い出す。

権現坂 「遊矢！」

遊星 「待て、権現坂」

権現坂 「なぜ止める!? このままでは遊矢は——！」

遊星 「いや、あの時とは明らかに違う」

権現坂 「なに……？」

遊星 「よく見ておくんだ。これが、遊矢なりの覚悟だ」

遊矢 「俺は、レベル7の《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》と《竜

穴の魔術師》で、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

「構築！まで言ってるのは「これまでとは違う感」を出すための演出。

遊矢、《オッドアイズ・アブソリュート・ドラゴン》を創造（エクシーズ召喚）し、

黒咲に勝つ。

最後に柚子を助けることを誓ってエンド。

ここから遊矢は《マスター・オブ・ペンデュラム》のカードも使うようになる。

ユーゴ「……俺は？」

作者 「素で忘れてた」